福岡市埋蔵文化財調査報告書第1391集

那珂 80

――― 那珂遺跡群第170次調査の報告 ―――

2020

福岡市教育委員会

序

福岡市は、古くから大陸との文化交流の門戸として、また対外交易や外交の窓口として栄えてきた地域であります。このような歴史的環境のもとに、市内には数多くの史跡や文化財が残されており、本市におきましては保護と活用に努めているところであります。しかしながら、都市の発展に伴う開発行為によってやむを得ず失われていく埋蔵文化財もあり、これらについては事前に発掘調査を行って、記録保存を行っています。

本書は、博多区那珂三丁目地内の那珂小学校内における留守家庭子ども会施設改築工事に伴い行われた、那珂遺跡群第170次発掘調査について報告するものです。

那珂遺跡群は、弥生時代から古墳時代前期、古墳時代後期から飛鳥・奈良時代にかけて、福岡平野では中心的な遺跡であったことが知られています。

今回の調査においても、弥生時代初め頃の貯蔵穴、弥生時代中期から中世の各時代の井戸、古墳時代初め頃の古墳の周溝（方形周溝墓）と考えられる溝が検出され、弥生時代以降、連綿と人々の営みが続いていたことが判明しました。また調査中には、那珂小学校の授業の一環として発掘調査の見学会も行われ、子どもたちが郷土の歴史について考えるきっかけを作ることもできました。

今後本書が、文化財保護への理解と認識を深める一助となり、学術的な研究資料として、また地域の歴史の学習の材料として活用して頂きましたら幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から資料整理、報告書作成にいたるまで、ご理解と多大なご協力をいただいた調査委託者および那珂小学校をはじめとする関係者の方々に対し、心より感謝の意を表する次第であります。

令和２年３月25日

福岡市教育委員会
教育長　星子　明夫

例　言

1．本書は、福岡市教育委員会が、平成29年4月25日から同年6月22日まで発掘調査を実施した、留守家庭子ども会建設（改築）工事に伴う、記録保存のための那珂遺跡群170次調査の報告書である。

2．発掘調査は、建設工事によって遺構が影響を受ける範囲について行った。なお中世の大溝遺構の一部は地下に現状保存されている。

3．遺構の呼称は記号化し、溝状遺構をＳＤ、土坑（貯蔵穴も含む）をＳＫ、柱穴などピット状遺構をＳＰ、その他の遺構（不明遺構，特殊遺構，近代以降の攪乱）をＳＸとした。

4．本書の遺構図に用いる方位北は、特に断りがないものは国土座標北（世界測地系）である。ただし個別遺構図においては、磁北も併用している。磁北は真北から西偏約6° 20′である（国土座標北からは西偏約6° 40′）。調査地付近の国土座標点（世界測地系）は、国土交通省が各所に設置している都市再生街区基準点から座標位置を求めている。なお、周辺調査地点での座標系は日本測地系第Ⅱ系のため、国土地理院ホームページの変換表を用いて、調査区における日本測地系座標も求めている（Fig.4）。また調査区内の標高は、道路下水道局が設置・管理している那珂小学校における水準点標高（7.911m）から移動して用いている。

5．本書に用いる遺構図の作成は、調査担当の久住猛雄および，藏冨士寛（埋蔵文化財課）、中園将祥（埋蔵文化財課嘱託）、坂口剛毅（埋蔵文化財課技能員）が行った。遺物の実測図作成者は下記の通りである。土器･陶磁器類は主に野村美樹、久冨美智子、林田憲三、立石真二、平田春美（埋蔵文化財課技能員）、西田尚史（当時、福岡大学大学院）が行い、一部を久住が行い、製図時に久住が各図をチェックし一部修正加筆した。木器の実測は、林田が主に行い、「折敷」のみ比佐陽一郎（埋蔵文化財センター）が行った。鉄器は林田、山下理呂（九州大学大学院）が実測した。石器の実測は、主に立石が行い、「板石硯」のみ久住が行った。製図は、遺物図全てと遺構図の一部を久住が行い、遺構図の一部を小畑貴子、林由紀子（埋蔵文化財課整理補助員）、山下が行った。また本書に用いる遺構・遺物写真は，木器の「折敷」を比佐が、鉄器Ｘ線写真を比佐、松薗奈穂（埋蔵文化財センター嘱託）が撮影したが、他の全ては久住が撮影したものである。

6．本書の執筆と編集は久住が行った。

7．本調査に関わる出土遺物と記録類（図面、写真等）は、全て埋蔵文化財センターに収蔵され、管理される予定である。

本 文 目 次

Ⅰ．はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
Ⅱ．調査の記録・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
　1．調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
　2．検出遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
　3．出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35
Ⅲ．調査のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・52

1. Ⅰ区中央～南半 SE03, SE02, SE06, SE08 掘削状況（北から）

2. Ⅰ区北半 SE02, SE01, SE03 掘削状況（東から）

3. Ⅱ区掘削状況全景（北から）

4. SE01 上層土層状況および方形井戸枠痕跡井戸側落込検出状況（南から）

5. SE01 井戸側落込 EL-330cm まで掘削状況（南から）

6. SE02 下層上部（Ⅰ・Ⅴ区ー 100 ㎝）井戸枠痕跡、曲物、木製品検出状況（北東から）

巻頭図版 2

1. SE02 下層上部（Ⅰ・Ⅴ区ー 100 ㎝）曲物、木製品検出状況近景（北東から）

2. SE02 下層上部井戸側落込「折敷」出土状況（東から）

3. SE02 ほぼ完掘状況（南から）

5. SE03, SX04 最上層掘削状況（南から）

4. SE02 最下層上部井戸側枠材遺存状況（西から）

7. SE03 西側上層遺物出土状況（東から）

6. SX04 西側半裁土層状況（西から）

8. SE03 下層上部 EL-200cm 掘削状況（北から）

1. SE03 最下層重機掘削確認状況（南から）

2. SE06 上面検出状況（西から）

3. SE06 中層上部掘方内鹿角・漆器出土状況（南から）

5. SE06 下層井戸側落込確認状況（南から）

4. SE06 中層上部掘方内漆器出土状況近景（北から）

6. SE06 下層上部遺物出土状況近景（北から）

7. SE06 下層中部掘方遺物出土状況近景（西から）

8. SE06 完掘状況（北東から）

9. SK05 完掘土層状況（東から）

10. SK09 完掘状況・土層状況（東から）

11. SX104（・SD102- Ⅵ区北）土層状況（東から）

13. SD101- Ⅰ区下層遺物出土状況近景（北から）

12. SD101-0 区北～Ⅰ区下層遺物出土状況（南から）

14. SD101- Ⅰ区下層遺物出土状況近景（西から）

巻頭図版 4

1. SD101- Ⅱ c 区西ベルト（隅角部）土層状況（東から）

2. SD101- Ⅳ区西側土層状況（東から）

3. SD101- Ⅱ～Ⅳ区掘削状況（東から）

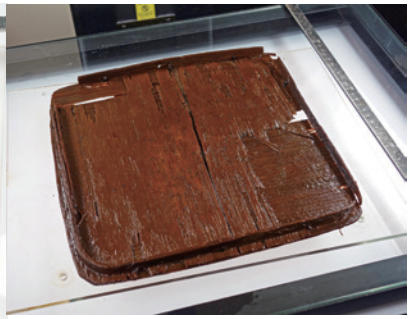
4. SD101- Ⅱ c ～Ⅲ a 区ベルト外し後遺物出土状況（北東から）

5. SD102- Ⅱ区東側土層状況（西から）

7． SD102 掘削状況（東から）

6. SD102- Ⅱ区東側土層状況中央近景（西から）

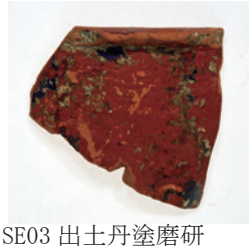
8. SE02 出土木製折敷写真 1



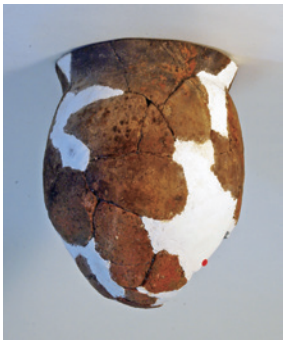
9. SE02 出土木製折敷写真 2

10. SE03 出土丹塗磨研壺（34-10）

11. SE03 出土丹塗磨研小型高坏、小型壺（33-12, 34-12）



12. SE03 出土丹塗磨研小型樽形甕（34-9）



13. SE06 出土弥生終末期在来系甕（35-17）

14. 板石硯破片（47-1）

Ⅰ．はじめに

１．調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、同市博多区那珂三丁目地内の那珂小学校敷地内における留守家庭子ども会施設改築工事に伴う「埋蔵文化財の事前審査について（依頼）」の文書を平成28年８月10日付でこども未来局放課後こども育成課から受理した（事前審査番号28-1-77）。

これを受け、経済観光文化局文化財部埋蔵文化財課事前審査係は、工事予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である那珂遺跡群（分布地図番号0085）に含まれており、当該地の過去の確認調査や対象範囲隣接の発掘調査（那珂遺跡群104次調査）の成果から、当該地は埋蔵文化財が存在することが明らかと判断した。遺構の密度や深度の再確認のため、さらに同地で平成28年10月25日に確認調査を行ったが、比較的浅い深度で遺構が検出され、予定される施設改築の基礎工事等は、埋蔵文化財に影響が及ぶものと判断された。その埋蔵文化財の保全等に関してこども未来局と協議を行った。

その結果、埋蔵文化財を保全するための工事の設計変更は難しく、予定工事は埋蔵文化財への影響を回避できないことから、施設改築工事範囲について記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。また両者の協議により、平成29年４月25日から同年６月９日までを現地における発掘調査の期間とすることになった。

発掘調査は平成29年４月25日に開始した。調査開始後に、事前の予想を超えて井戸遺構が集中して検出されたため、６月９日とした当初の終了予定は困難な状況であることが判明した。このため、埋蔵文化財課とこども未来局放課後こども育成課で協議を行い、発掘調査期間について若干の延長を行うことで合意した。また発掘調査後半で検出した中世の大溝については、全掘する時間を確保できなかったため、基礎工事の影響が及ばない深度以下については地下に現状保存することになった。発掘調査は平成29年６月22日に終了した。資料整理および報告書作成は、平成31年度（令和元年度）に資料整理を行い、令和２年３月に報告書を刊行することになった。

また、当該調査に関する基本情報は下記表のとおりである。

＜調査基本情報＞

遺跡名	那珂遺跡群	**調査次数**	170 次	**調査略号**	NAK-170
調査番号	1704	**分布地図図幅名**	023　雀居	**遺跡登録番号**	401320085
申請地面積	250㎡	**調査対象面積**	250㎡	**調査面積**	262㎡
調査期間	平成 29（2017）年 4 月 25 日～ 6 月 22 日			**事前審査番号**	28-1-77
調査地	福岡市博多区那珂３丁目 10 番１号那珂小学校地内				

２．調査の組織

・調査委託：こども未来局

・調査主体：福岡市教育委員会

（発掘調査　平成29年度　；　資料整理・報告書作成　平成31・令和元年度）

・発掘調査および整理・報告総括

経済観光文化局文化財部（平成28・29年度）・文化財活用部（令和元年度）

埋蔵文化財課　課長　常松幹雄（平成28・29年度）、菅波正人（令和元年度）

埋蔵文化財課調査第２係長　大塚紀宜

・事前審査

埋蔵文化財課事前審査係　吉田大輔（平成28・29年度）、中尾祐太・松崎友理（令和元年度）

・発掘調査および整理・報告庶務

文化財保護課（平成28年度）・文化財活用課（令和元年度）管理調整係　松原加奈枝

・発掘調査および整理・報告担当

埋蔵文化財課調査第２係　久住猛雄

３．周辺の地理的歴史的環境

那珂遺跡群は、福岡平野の中央やや北側にあり、那珂川と御笠川・諸岡川に挟まれた中位段丘上に立地する（Fig. 1）。南方の春日丘陵から北に延びる段丘は、那珂の南側に接する五十川遺跡付近で狭くなるが、北に続く那珂遺跡群では段丘の幅が広くなる。北側に接する比恵遺跡群や、南側の五十川遺跡とは連続的な分布にあり、同一段丘上に立地する。特に比恵遺跡群は、那珂との間に鞍部（浅い谷状地形）があるが、遺構分布や遺構変遷の様相から、弥生時代から古代においては実質的に同一の遺跡群と捉えられ、「比恵・那珂遺跡群」とも総称されている（田崎博之1998ほか）。また、比恵の東側に隣接する山王遺跡も、丘陵鞍部を挟むが、段丘は連続しており、特に弥生時代から古墳・飛鳥時代までの遺構展開が一連の動態であり、山王遺跡も含めて「比恵・那珂遺跡群」と総称してもよい。行政上の「周知の埋蔵文化財包蔵地」の便宜的区分を越えて同一の「遺跡群」として把握することが肝要である。この範囲は、かつて中山平次郎が、すでに大正年間に、「博多湾沿岸地方の遺跡としては、筑紫郡住吉村平田、同郡那珂村竹下及那珂付近から、北方に向って那珂村東光寺を経て、堅粕村比恵の南方に達する地域の遺跡が最も大きいのであって、他にこれ程の広き遺跡を見出し得ぬ」「随て私は最古の那津の都市といふべきものは、上述の竹下以北比恵南方に至る十二三町の地域で無くてはならぬと考へて居る」と指摘した地域にまさにあたる（中山平次郎1925）。中山平次郎が遺跡分布を遺物の表面採集によって推定した時代（大正年間）には、旧地形もまだよく残り、上述の範囲で遺物がかなり採集でき、かつ遺構もよく残っていたようである。しかし比恵・那珂遺跡群（以下、「比恵・那珂」とする）の現状は、中世以降（特に中世末以降）の開墾や屋敷地（城館）の造成により古代以前の遺構群が一部削平され、さらに近現代の区画整理（特に「駅南地区」の比恵遺跡群が顕著である）や都市化による地形の改変・削平が著しく、遺構の残存状況は必ずしも良好ではない場合が多い。しかしながら、地点によっては多くの遺構が密集して遺存していることもある。周囲に比べて地形が高く残る土地や、逆に旧地形が低く削平度が少ない場合など、遺構の著しい重複によって遺構の平面プランが不明瞭かつ遺構の認識・検出が困難となり、「包含層」状になっている場合も少なくない。また削平された場所でも、開墾耕作により二次的な「包含層」が遺構検出面の上に堆積して広がっている場合もある。これらは、確認（試掘）調査や本調査の遺構検出時においての要注意事項である。比恵・那珂の標高は、地形の削平部分も考慮すると最高所が12m前後、低いところで5m前後であり、一定の起伏がある。比恵・那珂の範囲は、南北2.4km、東西0.5kmから最大1.0kmの100ha以上に及び、特に弥生時代～古墳時代、飛鳥時代の遺跡としては全国的にも最大規模の部類に入る。さらに、弥生時代中期後半から古墳時代前期前半の集落の様相は、比恵・那珂における小規模調査を含む多くの調査の累積により（2020年１月現在、比恵は156次、那珂は178次、山王は15次までの調査がなされている）、遺構密度や環溝・区画溝・条溝・「道路」遺構により「街区」状に区画される状況、井戸遺構の集中などから、中山平次郎が予測した「那津最古の都市」を実証するに至っている（久住猛雄1999･2003･2008･2009・2019、南秀雄2018）。

比恵・那珂では、弥生時代早期（「突帯文土器」期）の那珂の二重環濠集落（那珂37次ほか）より本格的な集落遺跡が形成される。弥生時代早期から中期前半（須玖Ⅰ式前半）までは、比恵・那珂の段丘縁辺部にいくつかの集落や墓地が形成されたことが判明している。しかし弥生時代中期前半～

Fig.1　那珂遺跡群の範囲と周辺遺跡分布図（1/25,000）

（注：遺跡（周知の埋蔵文化財包蔵地）の範囲は変動がありうる。開発工事などに際しての最新の情報は、福岡市埋蔵文化財課事前審査係で確認されたい。）

1. 那珂遺跡群　2. 比恵遺跡群　3. 山王遺跡　4. 五十川遺跡　5. 那珂君休遺跡　6. 板付遺跡　7. 高畑遺跡　8. 諸岡Ａ遺跡　9. 諸岡Ｂ遺跡　10. 井尻Ａ遺跡　11. 井尻Ｂ遺跡　12. 井尻Ｃ遺跡　13. 笹原遺跡　14. 三筑遺跡　15. 麦野Ａ遺跡　16. 麦野Ｂ遺跡　17. 麦野Ｃ遺跡　18. 南八幡遺跡　19. 横手遺跡群　20. 寺島遺跡　21. 曰佐遺跡　22. 須玖・岡本遺跡　23. 大橋Ｅ遺跡　24. 三宅Ｂ遺跡　25. 三宅Ｃ遺跡　26. 野多目Ａ遺跡群　27. 板付東遺跡　28. 井相田Ｄ遺跡　29. 仲島遺跡　30. 井相田Ｃ遺跡　31. 東那珂遺跡　32. 雀居遺跡　33. 下月隈Ｃ遺跡　34. 立花寺Ｂ遺跡　35. 久保園遺跡　36. 席田大谷遺跡　37. 宝満尾遺跡　38. 宝満尾東遺跡　39. 天神森遺跡群　40. 下月隈Ａ遺跡群　41. 下月隈Ｂ遺跡群　42. 上月隈遺跡群　43. 席田平尾遺跡　44. 下月隈Ｄ遺跡　45. 狐塚遺跡　46. 下月隈鳥越遺跡　●. 170 次調査地点

中頃（須玖Ⅰ式期）にかけて、まず比恵や山王の段丘中央部に集落や墓地が形成され始め、続いて那珂の段丘中央部に中期中葉から後葉（須玖Ⅰ式後半～須玖Ⅱ式前半）にかけて集落や墓地が形成される。井戸の掘削も、山王で中期前葉（須玖Ⅰ式前半）のものがあり（山王10次）、比恵では須玖Ⅰ式後半から、那珂でも須玖Ⅰ式後半から（本報告那珂170次など）開始される。井戸の掘削数の増加は、段丘中央における「集住」の根拠となる重要な事象で、比恵・那珂では中期後葉（須玖Ⅱ式前半）から中期末（須玖Ⅱ式後半）にかけて爆発的に井戸掘削数が増加し、人口が増加し、人口密度も増えたと推定される（久住・久住2008）。実際に、竪穴住居や掘立柱建物などの居住遺構もこの時期に急増する。居住遺構が濃密化する中期後半（須玖Ⅱ式期）には、八女粘土層以下までも深く掘削する井戸も出現し、井戸の造営数は北部九州の同時期の遺跡では突出して最大多数であり、その状況は古墳前期前半まで継続する。比恵・那珂における井戸址の集中は特異であり、水場に乏しい段丘上における極度の「集住」がその築造の背景にあろう。さらに中期中頃から中期後葉にかけては、比恵・那珂全域で、「条溝」や「大溝」の掘削が開始され、弥生時代後期にかけて直線的な大溝・条溝や方形を指向する「環溝」が段丘上を区画し、通常の集落の構造とは一線を画する。弥生中期の墓地は複数箇所で確認できるが、比恵６次周囲の墓群は墳丘墓を形成し（吉留秀敏1989）、中期前半の甕棺からは細形銅剣が出土した。後期になると墓地遺構は不明確となるが、井戸、竪穴住居、掘立柱建物、溝などの遺構は間断なく営まれる。後期初頭以降の井戸数の増加を考慮するとむしろ集落の人口密度は増大したと考えられる。後期初頭以降には比恵中央東部に「１号環溝」が造営され、以後、「３号環溝」「２号環溝」と続く（比恵139次報告参照）。さらに片側ないし両側に側溝を備える「道路」的な帯状空間が少なくとも中期末には出現し、条溝、環溝とともに広大な集落内を機能的あるいは階層的に区画することが開始され、以後「街区」化して「都市」的様相を呈していく。弥生時代の比恵・那珂は、銅鏡副葬等の厚葬墓や青銅器埋納遺構が現状見られず、それらが存在する福岡平野のもう一つの弥生時代巨大遺跡群である須玖岡本遺跡群（春日市）と比較して、政治・祭祀的センター性に乏しい（久住猛雄2000）。しかし、高床倉庫域と考えられる広域の掘立柱建物卓越地区の存在（比恵中央北部）や、朝鮮半島系（粘土帯土器、三韓土器、楽浪土器）や列島内各地の広範囲の外来系搬入土器の継続的存在などから、交易（経済）の一大拠点としての性格が考えられる（久住2008、森本幹彦ほか2015）。長距離交易の一大拠点であったことは、水銀朱原料である辰砂（中国大陸原産）の一括出土（比恵57次・69次）や、中国戦国末期の「燕」ないし衛満朝鮮に由来する鋳造鉄斧の出土（比恵51次）、長方形または板状小型鉄素材の出土（比恵57・70・123･125・145次ほか）、中国南方～東南アジアに生産地が考えられるガラス（カリガラス）小玉（比恵6・145次、山王11次ほか）の多数出土やインド産とされる特異な赤褐色ガラス（ムチサラ）極細管玉（山王10次）の居住域での出土、基準重量での取引の存在を示す棹秤用の「石権」の出土（比恵125次、那珂113次）、北陸産小型管玉の出土（比恵145次）などからも伺える。弥生時代では、鉄器は弥生時代中期末までにかなり普及していた証拠があり、出土する中期後半以降の木製鋤は、80％前後が鉄製刃先装着用とされ、農具というより段丘上での掘削に使用する「土木具」が大半であった。そのほか青銅製鋤先が一遺跡での最多数の出土がある。比恵・那珂では青銅器・ガラス製品生産関係遺物も複数地点で出土し、須玖岡本遺跡群のような極度の集中性はないが、鋳型出土数では須玖岡本遺跡群に次いでいる。

弥生終末期になると、比恵・那珂は再編成期を迎える。集落再編の軸として、先行する複数の「道路」状空間を直線的に結ぶように、比恵遺跡群中央北西部から那珂遺跡群中央部まで貫く延長1.5km以上の両側側溝を備えた「道路（メインストリート）」が造営され、それと同じ方位で一辺70mと大型化する「２号環溝」が掘削される（久住1999・2008）。後者は「王」の居館と推測され、その成立直

Fig.2　那珂遺跡群170次調査の位置と周辺調査地点分布図（１）（1/4,000）
（注：調査次数のみの記入で調査区が入っていないものもある。）

後の古墳時代早期（弥生終末期後半）には、九州最古の前方後円墳である那珂八幡古墳（全長約86mと最近の那珂175次で判明した）が那珂中央部に築造される。当初の「道路」の終点は那珂八幡付近とみられるが、その後古墳初頭にさらに南側に延伸され、その両側に前方後方形を含む古墳前期の小古墳群が次々と造営されている。「道路」の北側はこれまで不明確であったが、近年の調査（比恵127・132・143次）から比恵中央段丘北西部で緩やかに北に曲がることが判明し、試掘調査の諸成果と合わせ、比恵北部を横断する「水路」が湾入すると推定される箇所に向かって延びると推定される。この湾入部分は、今後「船着場」遺構が検出される可能性があろう。さらに比恵南西部でも西から谷部が湾入した場所上に「道路」推定線が来るが（比恵141次南）、この谷部でも「船着場」（比恵141次の湧水する落ち込みには木樋が出土）や「橋」が検出する可能性もある。なお近年、主に古墳初頭前後に帰属する「板石硯・研石」が比恵・那珂で複数出土しているが（比恵140・141・143・144次、那珂113・170次、山王13・14次、比恵57次に未成品）、そのうち２点が「メインストリート」沿いであることが注目される（比恵141・143次）。この比恵・那珂における「メインストリート」の造営途中、那珂八幡造営頃に、奴国の「主都」とも言われる春日市須玖岡本遺跡群は衰退し、青銅器工房群が途絶え、遺構も激減する。比恵・那珂に奴国の「主都」が遷ったらしい。比恵・那珂には那珂八幡だけでなく、弥生終末期古相に推定一辺20m前後の方形墓があり（比恵120次周囲推定）、これに接し「道路」沿いに終末期新相の推定全長36mの前方後方墳があり（36・55次）、さらに比恵中央部には弥生中期墳丘墓に接して、終末期新相成立の一辺30m以上の比恵１号墳がある（6・16・89次）。那珂八幡古墳南方には、「道路」が古墳時代初頭に延伸され、「道路」両側の居住域は他へ移転し、全長30m級の前方後方墳を含むほ小古墳群（「方形周溝墓」群）が、古墳前期中頃まで「道路」両側に形成される。さらに那珂八幡古墳の北側では、「道路」側に前方部を想定すると、那珂八幡の1/2サイズの小型前方後円墳が築造された可能性がある（那珂171次の円形周溝）。比恵１号墳とそれに接する比恵２号墳（古墳初頭）の周溝には、西日本各地と朝鮮半島系土器（楽浪、馬韓）があり、交易を司る被葬者が考えられる。この周囲は漁撈具が多く出る地区であり海上活動の指導者でもあろう。比恵墳丘墓・１号墳を取り巻くように「倉庫域」があることも注意される。比恵・那珂の居住域は、「メインストリート（道路）」や「２号環溝」の造営により諸施設の方位が同じ方向を指向し、また墳墓域の再設定により居住域に変動があるなど「区画整理」が進むが、古墳時代前期前半までは集落規模と遺構分布は保持される。ところが古墳前期後半には遺構が激減し、その後中期初頭から中期末までの遺構の分布は非常に疎らでごく僅かとなる。ただし古墳時代前期中頃から前期末にかけては、「２号環溝」が「首長居館」として継続し、その周囲だけは遺構群が存続し、朝鮮半島系の陶質土器なども搬入されることも判明しており、福岡平野の最高首長の「居館」が継続していたらしい（久住2019）。

その後、古墳時代後期以降に比恵・那珂の拠点化が再開される。この時期から飛鳥時代の詳しい説明は他に譲るが、古墳後期中頃（TK10期；６世紀第２四半期）の三重周溝を巡らす全長75mの東光寺剣塚古墳築造後の、三重柵列＋大型倉庫群（比恵109・125次→8・72次、39次）を嚆矢とする「那津官家」に関わる比恵・那珂の初期官衙関連遺構群の展開は、再び「都市」的様相を呈し、飛鳥時代前半までは、かつての「メインストリート」が再利用されて主要遺構が再配置されていることが判明してきたことが特筆される（菅波正人2012、南秀雄2018）。

＜参考文献＞久住愛子・久住猛雄 2008「九州Ⅰ―福岡県下における弥生時代から古墳時代前期の井戸について―」『井戸再考』第57回埋蔵文化財研究集会資料集　／久住猛雄 1999a「弥生時代終末期「道路」の成立」『九州考古学』74、九州考古学会／久住猛雄 2000「奴国の遺蹟－須玖・岡本遺跡群と比恵・那珂遺跡群－」『考古學から見た弁・辰韓と倭』九州・嶺南考古学会第四回合同大会　／久住猛雄 2003「北部九州における弥生時代の特定環構区画と大型建物の展開」『日本考古学協会2003年

Fig.3　那珂170次調査の位置と周辺の調査地点（２）（1/1,000）
（注：95次調査の位置は報告の座標が間違っている可能性があり、敷地で合わせた。）

度滋賀大会資料集』　／久住猛雄 2008「福岡平野　比恵・那珂遺跡群―列島における最古の「都市」―」『弥生時代の考古学』８、集落からよむ弥生社会、同成社　／久住猛雄 2009「比恵・那珂遺跡群―弥生時代後期の集落動態を中心として―」『弥生時代後期の社会変化』第58回埋蔵文化財研究集会資料集　／久住猛雄 2019「筑前西部～中部（糸島・早良・福岡平野周辺・糟屋南部・二日市地峡北半）の弥生時代終末期から古墳時代前期の集落・集落動態・首長居館・交易拠点」『集落と古墳の動態―古墳時代前期末～古墳時代中期―追加資料』第22回九州前方後円墳研究会宮崎大会追加資料　／菅波正人 2012「博多湾岸のミヤケ関連遺跡」『日本考古学協会2012年度福岡大会研究発表資料集』　／田崎博之 1988「福岡地方における弥生時代の土地環境の利用と開発」『福岡平野の古環境と遺跡立地』九州大学出版会　／中山平次郎 1925「古代の博多（一）」『考古学雑誌』第16巻第6号　／南 秀雄 2018「上町台地の都市化と博多湾岸の比較―ミヤケとの関連」『大阪文化財研究所　研究紀要』第19号　／森本幹彦ほか 2015『新・奴国展』福岡市博物館特別展示図録　／吉留秀敏 1989「比恵遺跡群の弥生時代墳丘墓―北部九州における弥生時代区画簿の一例―」『九州考古学』63

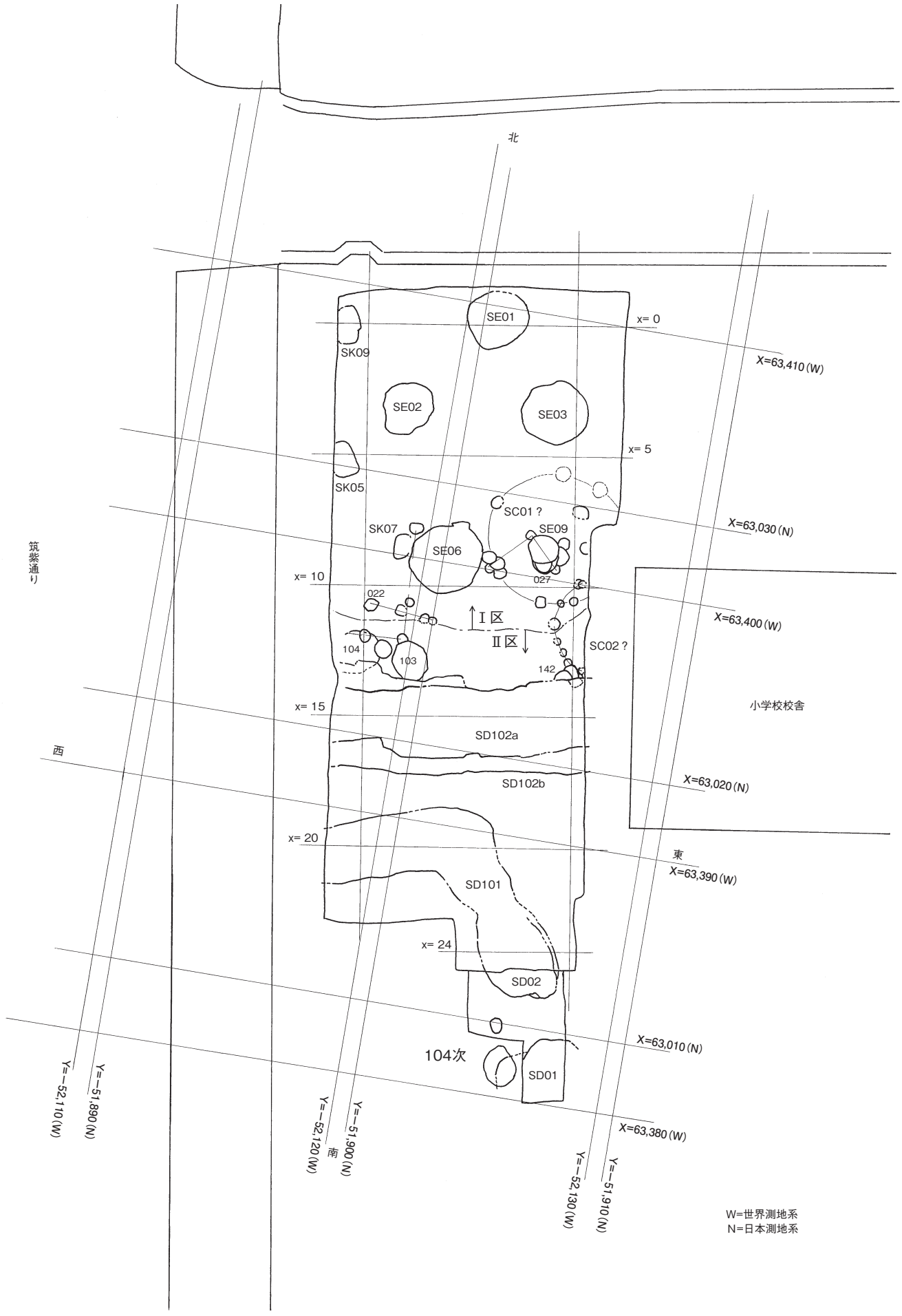


Fig.4　那珂170次調査区全体図（1）（1/200）

4．那珂170次の周辺の調査（Fig.2・3）

那珂39次　那珂170次の北西60ｍの調査区（福岡市埋蔵文化財調査報告書第1259集；以下「市報○○○」とする）。弥生時代前期後半の貯蔵穴、弥生中期の甕棺（中期前半の成人棺と中期後半の小児棺）、古墳時代前半の環溝、中世の土壙墓と地下式などが検出されている。古墳前期前半の溝はⅡＢ期（弥生時代終末期～古墳時代前期の土器編年は、久住1999b･2017に拠る）の土器があり、底部焼成前穿孔二重口縁壺の出土から墳墓の溝にも見えるが、この溝は那珂5次の弧状溝と繋がり、東西25m×南北34mの隅丸長方形の「環溝」になると思われ（Fig.3）、墳墓ではない祭祀（葬送儀礼？）の場とするのが妥当だろう。環溝内に伴う建物は無いらしい。周囲には、5･39次の環溝の北東170mには那珂109・112次の方形周溝墓群、また南東65mには104・170次の方形周溝墓があり、これらに関わる施設とも考えられる。また環溝は北西に陸橋があり、さらに南西側では重複があり掘り直しが考えられる。

那珂５次　170次の北西45mの調査区（福岡市埋蔵文化財年報Vol.27；以下「年報○○」とする）。39次の南側。北側を囲むような弧状溝が検出されているが、39次の溝と繋がる環溝である。溝下層の一部に「一括土器」が出土しているが、時期は混在しており（ⅡA～ⅡC期）、複数回の祭祀の結果

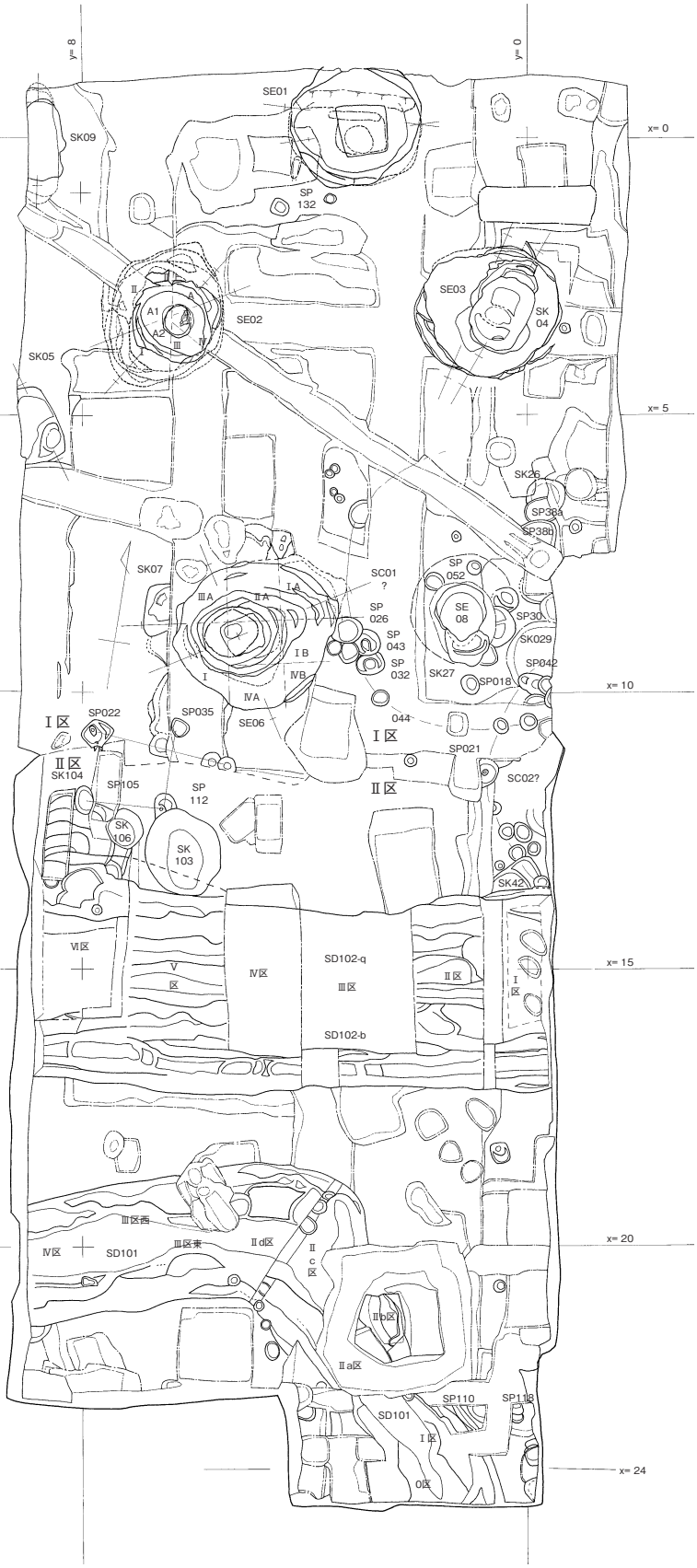


Fig.5　那珂170次調査区全体図（２）（1/125）

と考えられる。39次の同時期の溝と同様に二重口縁壺も多く、墳墓祭祀と共通する土器組成である。

那珂40次　筑紫通りを挟んだ西側28mの調査区（市報367集）。遺構が濃密に検出された。弥生中期後半（須玖Ⅱ式前半）の竪穴住居SC04、中期末（須玖Ⅱ式後半）の貯蔵穴、推定弥生中期～後期の掘立柱建物、SC05は終末期前半（ⅠA期）、SC16は終末期後半（ⅠB期）、SC15は古墳時代初頭（ⅡA期）の竪穴住居群が続く。また飛鳥時代前期（須恵器Ⅳ期）の竪穴住居、掘立柱建物、溝、中世の大溝、土壙墓がある。中世の南北大溝は170次の東西大溝SD102と連関する可能性もある。

那珂７次　170次の東北東80mの調査区。遺構が濃密に検出された。まず弥生中期初頭と中期後半の柱穴があり、竪穴住居や掘立柱建物の存在が考えられる。次に弥生終末期の竪穴住居と甕棺がある。次に古墳後期末（須恵器ⅢB期）～飛鳥時代前期（Ⅳ期）の竪穴住居とおそらく一部の掘立柱建物があり、一時期空白があり、奈良時代から平安時代初期の掘立柱建物群が続いている。遺構の分布から、当時の段丘はさらに東へ延びていたのではないかとも推定されている。

那珂104次　170次の南側に接する調査区で、一部重複する。170次SD101の続きであるSD02と陸橋をおいてSD01が検出されている。方形周溝墓の周溝である（年報VOL.19）。出土土器にはⅡB期の二重口縁壺（31頁Ph.3）や布留系甕があり方形周溝墓の時期を示すが、弥生土器も混入している。

那珂95次　170次の南東58mの調査区（年報VOL.19）。古墳後期～飛鳥時代の掘立柱建物と溝などがある。なお報告の調査区の国土座標がずれている可能性があり、今回は敷地との関係から調査区を地図に入れ込んだ（Fig.33）。

那珂113次　170次の南東95mにある調査区（市報982集）。東側から西側に入り込む谷頭が検出されていて、下層に弥生早期～中期末までの遺物が、上層に弥生中期後半、弥生終末期～古墳前期前半、古墳時代後期～飛鳥時代前期、奈良時代初頭までの遺物が含まれる。谷部の弥生終末期前後の土層からはベニバナ類の花粉が検出されている。その他下層の石製品に、略円筒状の「石権」（分銅）が3点検出されたほか（報告Fig.15-s8,s9,s15；輪内遼2018）、「砥石」として報告されている中に「板石硯」がある（報告Fig.15-s5）。谷部落ち際には弥生中期末（SK06）、後期初頭（SK05）の貯木土坑ないし井戸もある。その他、柱穴群から弥生時代～古墳時代前期、古墳後期～飛鳥時代、中世の掘立柱建物があったらしい。板石硯と石権の出土が注目され、那珂170次でも板石硯があり、このエリアには弥生中期後半前後の交換･取引が行われた「市場」があった可能性もある。

＜参考文献＞久住猛雄1999b「庄内式併行期における北部九州の土器様相」『庄内式土器研究』ⅩⅨ　／久住猛雄2017「糸島・早良・福岡平野」『九州島における古式土師器』第19回九州前方後円墳研究会長崎大会　／輪内遼2018「比恵・那珂遺跡出土遺物の再検討―弥生時代の九州の天秤権を考える―」『七隈史学会第20回大会研究発表報告集』

Ⅱ．調査の記録

１．調査の概要

那珂170次調査地点は遺跡群東縁部中央に位置する（Fig.1・2）。周囲の標高は、東側が8.25～8.35m前後、西側が8.0～8.2m前後である。 地表から近現代の盛土を除去すると、地山の鳥栖ロームがあらわれ、その上面で遺構を検出した。竪穴住居がほとんど残っていない点、貯蔵穴とみられる土坑が極めて浅い遺存であることを考慮すると、弥生時代の地表からは推定１m以上削平されていると考えられる。検出遺構は、弥生時代前期の貯蔵穴、弥生時代中期の井戸、古墳時代前期前半の方形周溝墓、中世前期の土坑・井戸、中世後期～近世初期の井戸・大溝（壕状遺構）などである（Fig.4・5）。ただし出土遺物から、弥生時代前期・中期・後期・終末期、古墳時代前期・後期、飛鳥時代の各時代の遺構がさらに多く存在したと考えられる。

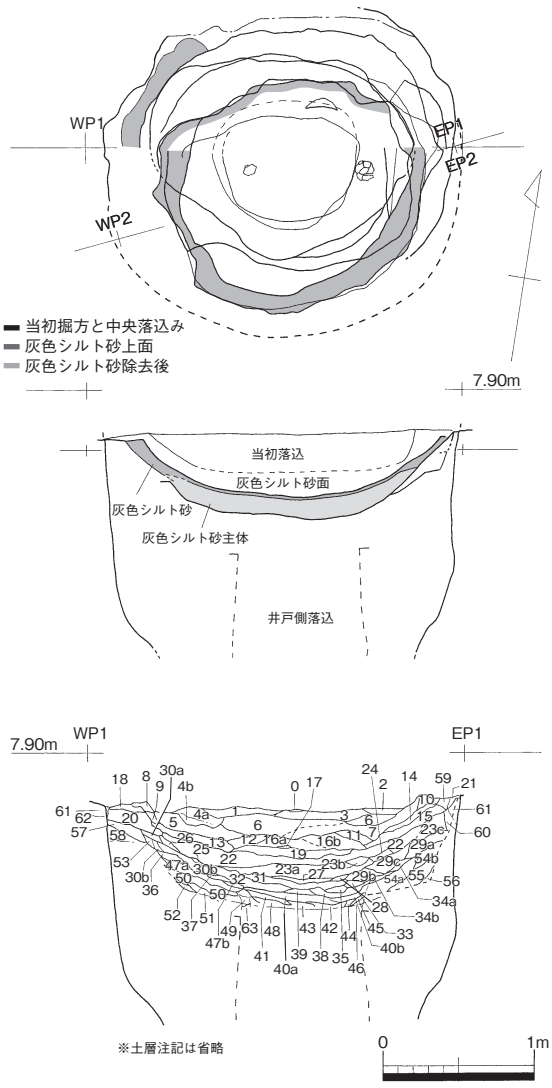


Fig.6　SE01上部実測図・土層断面図（1/60）

古墳前期前半の方形周溝墓（小方墳）SD101は南側隣接の104次調査南側の土坑状溝（SD02）から連続するもので（Fig.4・25）、本調査区で西側に屈曲してＬ字状になり（Fig.20）、方形周溝になることが確定した。下層から二重口縁壺など精製土器が多い土器群が検出され、周溝墓の供献土器の転落である可能性が高い。104次調査とあわせて、104次の溝の途切れ（104次SD01とSD02の間）が周溝墓東側の陸橋部となるとみられ、規模は周溝下端で南北、東西ともに16.8m前後と推定できる。土器群は陸橋側の溝下層と溝屈曲部までが多い。井戸は１基のみ弥生時代中期中頃～後半（SE03；Fig.12・13）であるが（当初「素掘り」と考えたが、何らかの井戸側が

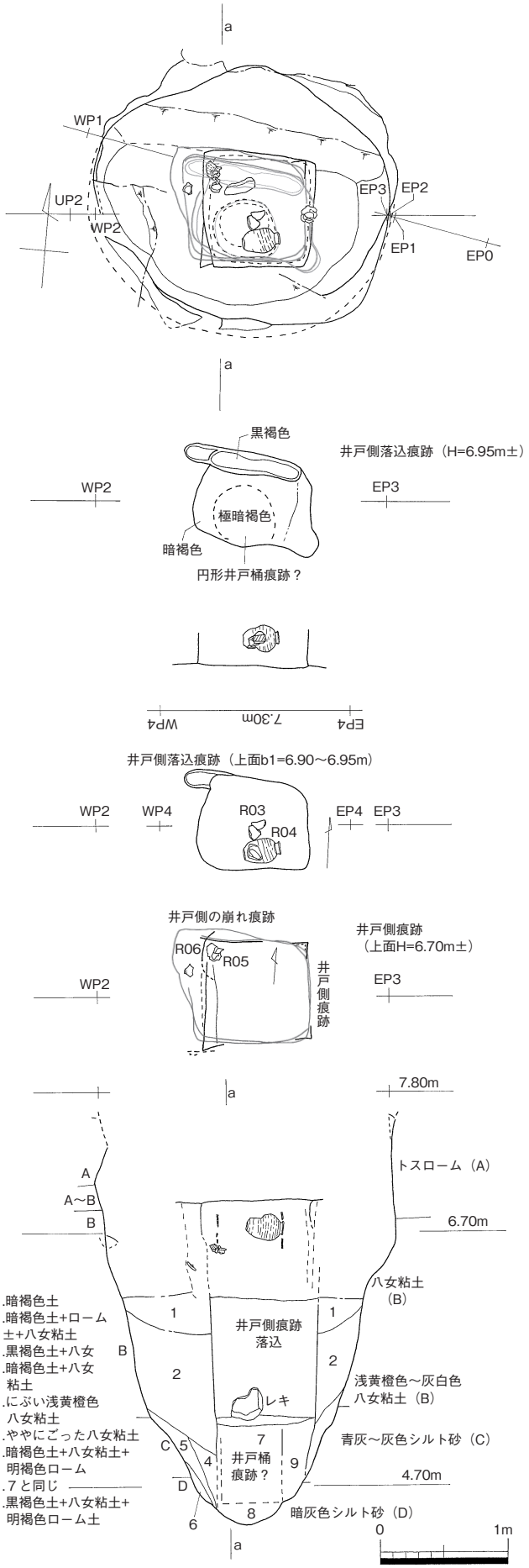


Fig.7　SE01実測図（1/60）

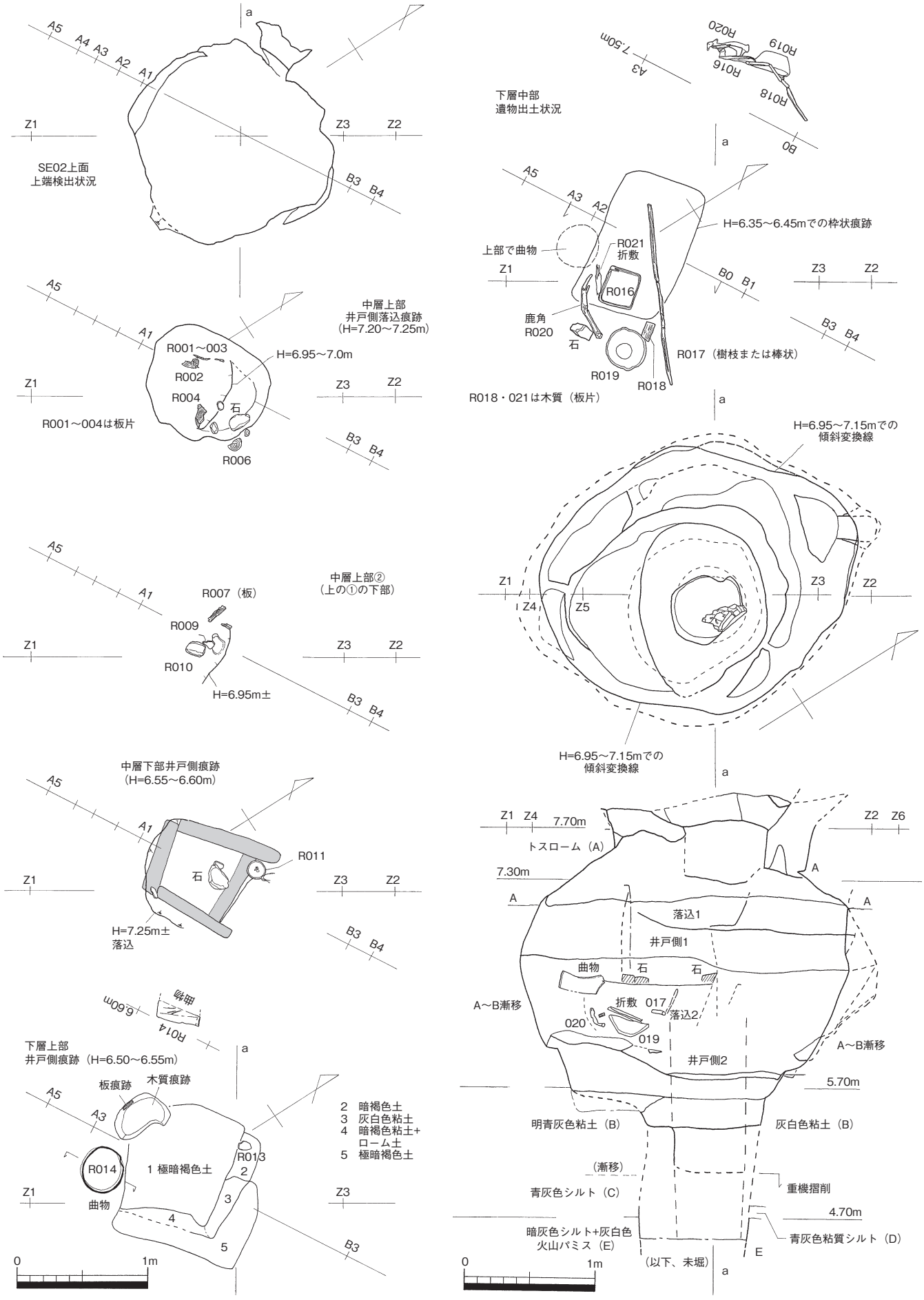


Fig.8　SE02上半実測図（1/40）

Fig.8　SE02上半実測図（1/40）

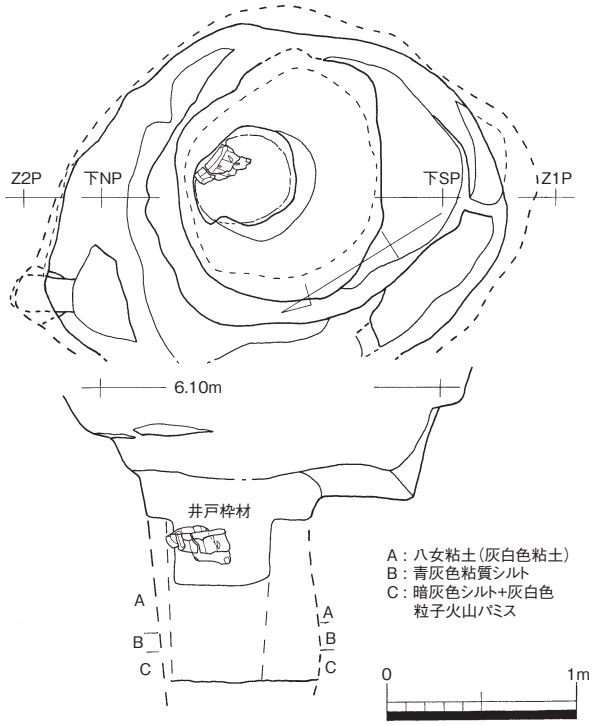


Fig.10　SE02下層下部井戸枠材出土状況図（1/40）

住居の掘方や掘立柱建物跡は確実なものがない。ただし調査区中央東側で、円形住居（弥生中期？）の痕跡とみられる柱穴群が2か所あり（SC01,SC02；Fig.5）、また建物の痕跡の一部とみられる柱穴列もある。弥生時代早期（突帯文期）～前期は、前期前半の貯蔵穴2基（SK05,SK09）のみがあるが、遺物は早期からあり削平された遺構の存在が予測され、比恵・那珂での弥生時代集落の展開が、段丘の縁辺部の複数個所で始まるというこれまでの傾向をさらに裏付けることになった。

出土遺物は、弥生土器（早期～終末期）、古墳時代前期の古式土師器、古墳時代後期～中世の土師器・須恵器、瓦器、瓦質土器、中世の輸入陶磁器・国産陶器のほか、中世の木製品や獣骨など有機質遺物、各時代の石器・石製品などがあり、出土総量はコンテナ計43箱である。遺構が不明確な弥生時代早期・後期、古墳時代後期～飛鳥時代、奈良時代前半までの土器も少なくなく、調査地が弥生時代から近世初頭にかけて、ほぼ絶え間なく集落の一部あるいは墳墓地として利用されたことが判明した。

なお中世末の溝SD102は全掘できなかったが、建設予定の建物基礎が一定深度以上に影響が及ばないことから、未掘部分は「現状保存」としている。

あった可能性がある）、他は中世前期から末期までの４基（SE01,SE02,SE06,SE08）である。中世のいずれも井戸枠の落込みや部材痕跡があり何らかの井戸側があったとみられ、中には木製品や骨角製品などの有機質遺物が遺存しているものもあった。井戸はいずれも検出面からの深さが３ｍ前後で、比較的深く（本来の深さは4m以上になる）、最下部は八女粘土より下部の青灰色シルト砂層まで掘削されているものもあった。その他、SD102は中世末から近世初頭の東西に走る壕状の大溝で、一度埋没後に南縁部が幅狭く再掘削されている（Fig.27）。弥生時代の遺物（土器、石器）が中世の井戸や溝にも多く混入するが、削平のため竪穴

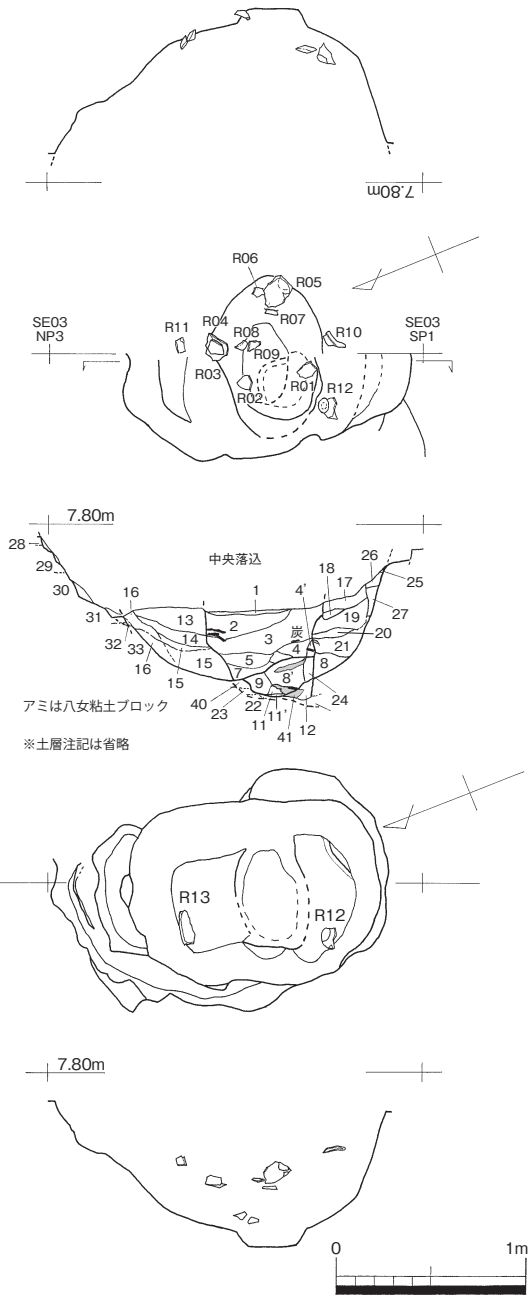


Fig.11　SX04（SE03上部落ち込み）実測図・土層図（1/40）

また調査中には、那珂小学校６年生の授業の一環として、発掘調査の見学会が数度行われ、児童が郷土の歴史に触れることができ、好評を得たことを記しておきたい（Ph.1・2)。

Ph. 1　井戸遺構を見学する小学生

Ph. 2　方形周溝墓を見学する小学生

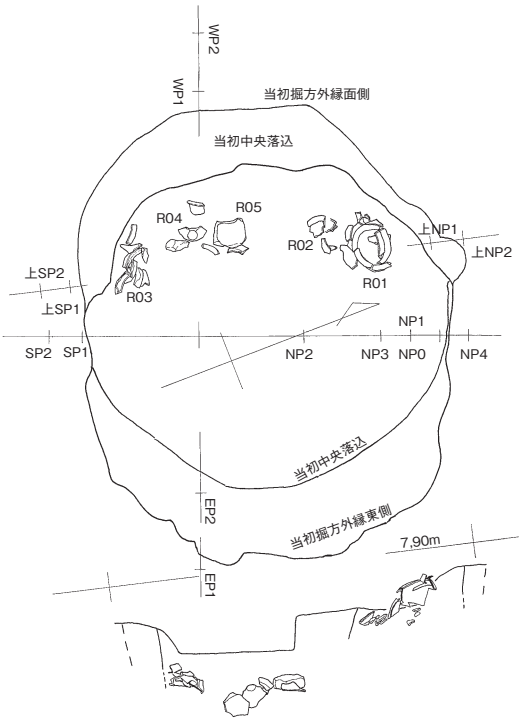
で灰色シルト砂の面となる（Fig.1、PL.1-2)。この灰色シルト砂層を除去した深さ60cm前後の面で、井戸側痕跡とみられる略方形の落込みが観察され（Fig.2、巻頭図版１-4)、これ以下は、推定井戸側落込み部分を先に掘削し、ある程度掘削したら外側を下

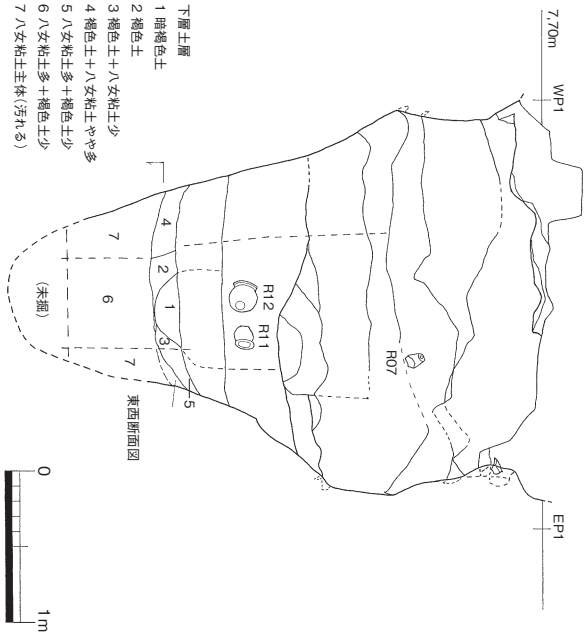
２．検出遺構（Fig.4,5)

（１）井戸（ＳＥ）

・SE01（Fig.6,7、巻頭図版１-4,5、PL.1-1～10)

Ｉ区北側で検出。検出上面での径は南北150cm×東西180cmの円形に近い楕円形。検出上面からの深さは320cm。上面で円形状に灰色シルト砂の帯があり（PL.1-1)、これがすり鉢状に落ち込み、深さ40cm前後





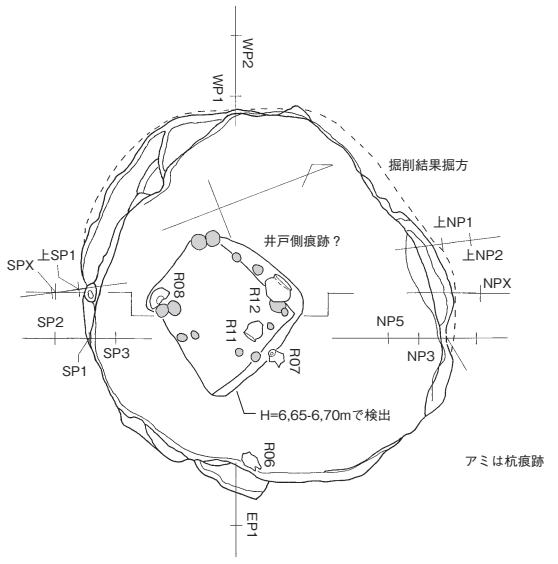


Fig.12　SE03上半実測図・東西断面図（1/50）

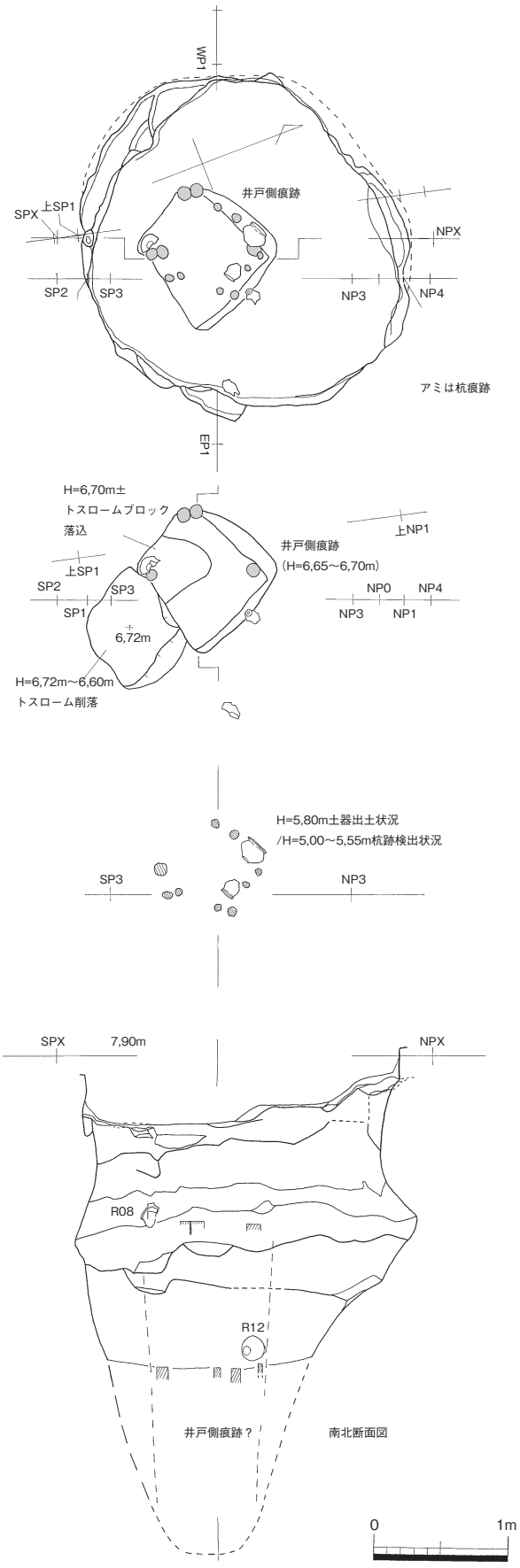


Fig.13　SE03中位以下実測図・南北断面図（1/50）

げていくという手順で掘り進めていった。なお他の井戸遺構の掘り方も、中央付近に井戸側の落ち込みとみられる部分が観察された場合には、基本的に同じ手順で行っている。そのため、井戸側部分の堆積土（埋土）中遺物と、掘方埋土の各出土遺物は、およそ分離して取り上げることができていると考えられる。SE01では、深さ60cm強（H=6.95m±）で井戸側の落込みを検出した（巻頭図版１-4）。逆に言うとこの上では井戸側落込みは検出されず、これより上にあった井戸側は解体され部材が持ち去られたと考えられ、底面を灰色シルト砂で埋め立てた落込みの埋土は、井戸跡を埋めたときに沈みこまないための地業と考えられる。

略方形の井戸側落込みは（PL.1-4～9）、上部では70×80cm前後の歪んだ方形をなすが、これは土圧で歪んだものともみられ、ある程度掘り進むと80～85cm強の正方形に近い形状で検出できる部分があり、これが本来の平面形で、また井戸側の枠板の厚さは、遺物出土状況などから、10センチ未満と推定される。なお方形枠板の隅角がどうなっていたかは部材が残らないので不明だが、部分的な土層の平面的相違からの確認によると、隅角は「T」字状の組み合わせであった可能性がある。また、これは部分的な確認であるが、方形枠板井戸側の内部に円形の落込みが見られた部分があり、円形桶組などの円形枠が内部にあった二重構造の井戸側だった可能性もある。その場合、内側の円形枠のみが、掘方が狭くなる深さ240cm前後以下、底面からあって、方形枠板側は、掘方が広くなる部分からあったとも推定できる。その方形枠板推定範囲の最下部付近に、大きな礫が投棄されており、「井戸封じ」の祭祀儀礼の痕跡と思われる。井戸の掘方の下部は八女粘土層を超えて灰色シルト砂層を大きく掘りこんでおり、湧水がかなり見込まれる井戸であったと考えられる。なお下部は重機を用いて確認している（PL.1-10）。

井戸の時期は、出土遺物を参照すると（Fig.28～Fig.29-1～17）掘方出土最新遺物からは13世紀以降に掘削され、井戸側内最新遺物から14世紀前半頃までには廃棄され埋められたものと考えられる。

・SE02（Fig.8～10、巻頭図版１-6, 2-1～3、PL.1-11～14,2-1）

Ⅰ区中央北西で検出。上面での径は南北130cm×東

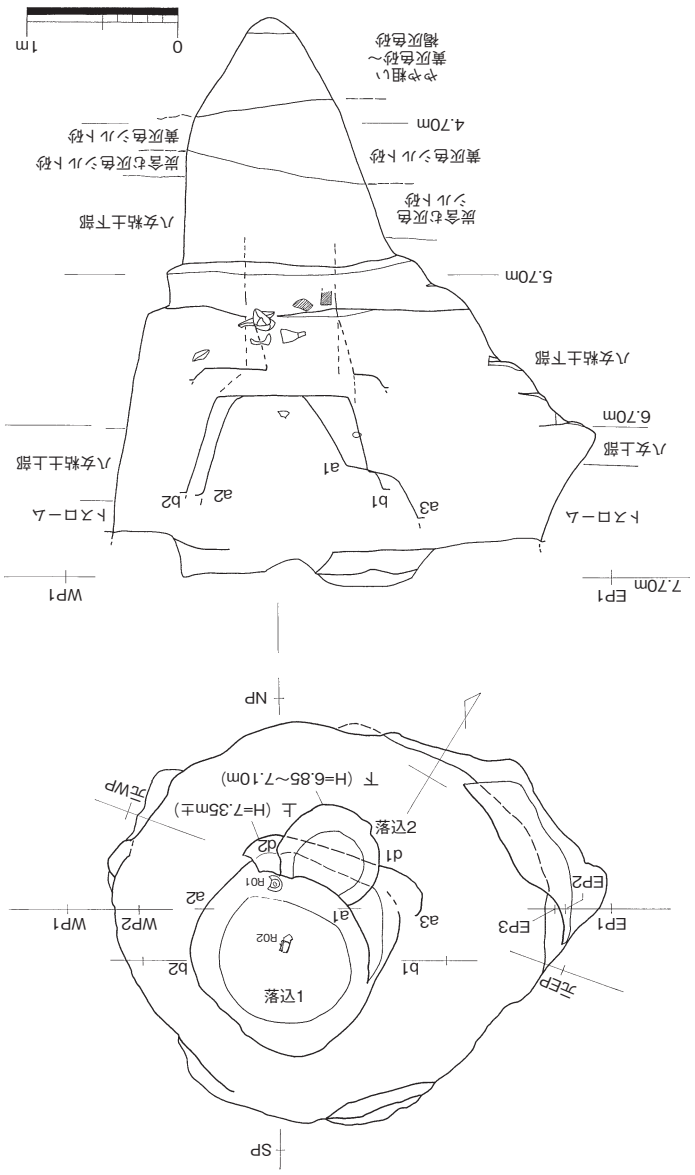


Fig.14　SE06実測図・南半見通し断面図（1/50）

西115cmだが（PL.1-11）、深さ130cm前後の湧水が上がってくる八女粘土中位上部において掘方壁が崩落して大きくオーバーハングしており、その部分では南北290cm×東西245cmの菱形に近い略楕円形となる（巻頭図版２-3）。また深さ240cm前後で掘方は略南北135cm×略東西100cm前後と狭くなる。深さは、上面から340cm前後までを重機で確認したが、以下は危険なため掘削を断念している。

井戸側と思われる落込みは深さ80cm前後でまず検出されたが（Fig.15断面図「落込１」、PL.2-12）、略方形に確認されたのは深さ75cm前後（H=7.20m前後）で（PL.2-13、巻頭図版１-6）、

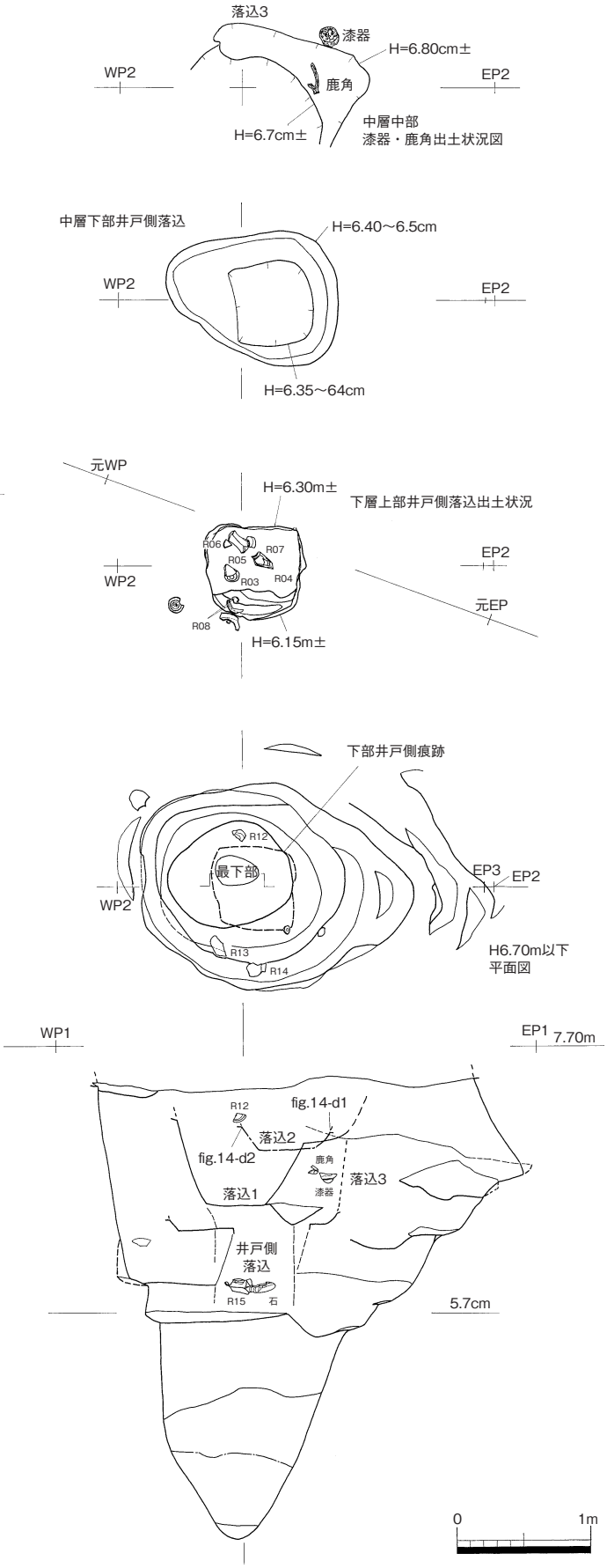


Fig.15　SE06中位以下実測図北半見通し断面図（1/50）

これがはっきりするのは深さ135㎝前後（H=6.60m前後）で、土層の平面分布から、南北の東西枠板が東側に突出する方形枠と推定できた（Fig.14）。ところがこの少し下の深さ150㎝以下になるとこの方形枠板痕跡が続かず（ちょうど掘方南西側に木製曲物と腐朽した木製品が据えられたレベル付近；巻頭図版２-1）、上部の井戸開口部と合わない掘方の南西側に偏った部分に長方形状落込みが検出され、この内外に木製折敷や瓦質擂鉢、鹿角などが検出された（Fig.15上、PL.1-14,15、巻頭図版２-2）。亀甲２点もこの付近から出土しているようである。この長方形落込み（Fig.15の「落込２」）は、実際にはこれら遺物が廃棄された範囲を包含する図面よりも一回り大きい落込みだった可能性がある。結論的に言えば、下半部の井戸側の廃棄に伴う祭祀に伴うもので、上部の井戸側（方形枠板痕跡）は、これら遺物群埋置後の新しい井戸側と解釈する。この高さ前後で大きく掘方がオーバーハングしているのは、湧水がこの時期、八女粘土層の途中でも多くあったためであり、上部に井戸側を設置しても井戸としては機能したものと判断する。さて「落込２」の遺物廃棄層を掘削すると、深さ180㎝前後から掘方中央に新たに井戸側の落込みがみられ、これは略円形である（Fig.15中段「井戸側２」）。深さ250㎝前後からは重機も一部使い掘削したが、井戸側落込み内に、木製の円形刳貫き井戸側の一部を検出した（Fig.10）。ただし、出土状況をよく見ると、刳貫き部材の内湾部が外壁側に倒れこんでおり（PL.2-1、巻頭図版２-4）、原位置ではなく、腐朽を免れ遺存した部材が土中で反対側に倒れたものと解釈する。

なお上層出土の遺物は、平面位置で区分けして取り上げている（Fig.5）。

遺構の時期は出土遺物（Fig.29-18～30、30-1～8,13）から、14世紀頃掘削、15世紀前半頃までに廃棄、埋め立てられたものであろう。

・**SX04**（Fig.11、巻頭図版２-6、PL.2-3）、**SE03**（Fig.12･13、巻頭図版２-7,8・３-1、PL.2-5～8）

SX04とSE03はⅠ区中央北東で重なって検出され（Fig.5、巻頭図版２-5、PL.2-2）、当初はSX04の中央にも井戸側状落込みが検出されたため、井戸の切り合いと考えたものである。だが、**SX04（SK04）**は、SX03中央の落込み凹みに形成された別の土坑で（便宜上、SE03の項で報告する）、井戸側と考えた落込みは、後の解釈では、「**大柱**」遺構痕跡ではないかと考えている。SX04は南北

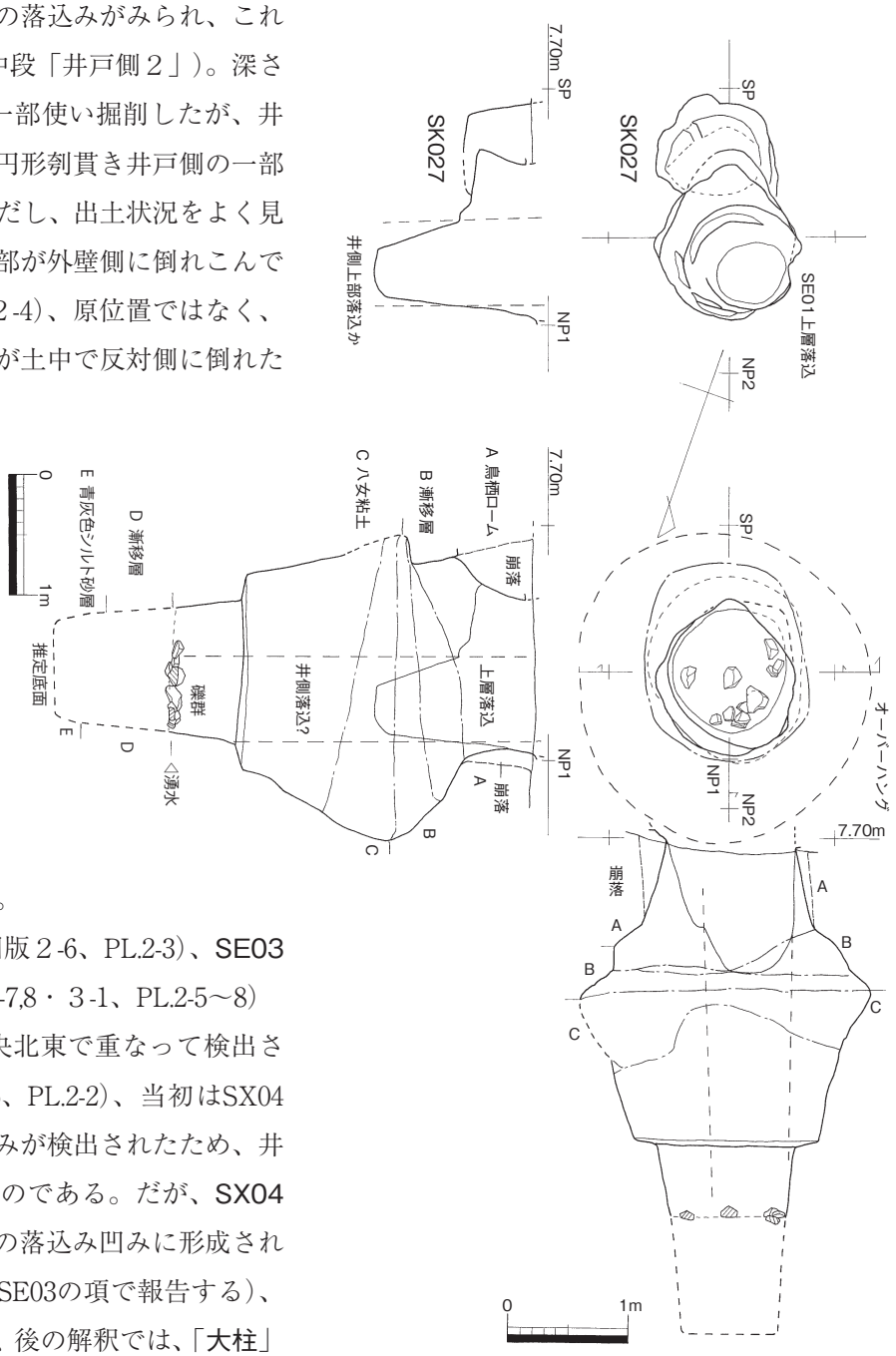


Fig.16　SE08実測図（1/50）

178cm×東西126cmの楕円形土坑状遺構（掘方）で、中央の落込みがある。南北60cm×東西80cmの中央部分は「大柱」の抜き跡と考える。遺構の深さは80cm前後だが、底面は下部のSE03と分かち難く不明確な箇所もあった。遺構の時期は出土遺物（Fig.30-14～21、Fig.31、Fig.32-1～6）から弥生時代中期後半、須玖Ⅱ式前半だが、次のSE03に比べて須玖Ⅱ式後半に近い時期である。

SE03は、上面での径が南北210cm×東西230cmだが、東西側、特に西側の検出面での掘方痕跡は極めて浅く消え（このレベルで段状になっていたとみられるが）、掘削後には径200cmの不整円形となった。最上面から130～150cmの深さで100～130cmの深さでオーバーハングがあるが、壁面の一部は意図的に足場を作ったような掘り込みもある。これ以下の深さは径が狭まる。下部は深さ230cmまで人力で掘削、以下は深さ270cmまで重機で掘削したが、底面までは確認できなかった。ただし、ピンポールで突いて、最下部に完形土器群がなさそうなことまでは確認している。最下層の土層（Fig.12、巻頭図版３-1）や、一部は深さ120cmで、多くは深さ210cm前後で確認した杭状痕の並びや、下層上部で確認している略方形の落ち込み痕跡（巻頭図版２-8、PL.2-7）から、この井戸は素掘ではなく、杭と矢板状のものを組み合わせるような井戸側施設があった可能性が高い。中央落ち込みは深さ100cm前後から不明瞭だがあったので、中央部出土土器と周囲（掘方）出土土器は分けている。上層の西側で土器群が出土したが、縁辺部であり、中央の円弧の縁辺に沿うように出土しており、掘方出土土器の可能性がある（巻頭図版２-7、PL.2-5,6）。杭と板材を組み合わせた木製方形井戸側（井戸枠）は、実は中期中頃までの井戸には北部九州では佐賀平野を中心に多くみられるもので（渡部芳久2008）、SE03も主要な時期幅は須玖Ⅱ式前半であるので、そうした例が参考になる。遺構の時期は出土遺物（Fig.32-3～24、Fig.33、Fig.34-1～19）から、掘削時期は上層西側縁辺部土器群（Fig.32-15～22、Fig.33-1,2）が掘方出土とすると須玖Ⅱ式前半（田崎博之1985の「須玖Ⅱ式古段階」）でも須玖Ⅱ式後半に近い様相にあたりその時期が考えられるが、重機掘削の最下層土器群（Fig.34-13～19）は須玖Ⅰ式後半（田崎1985「須玖Ⅰ式新段階」）の様相があり上部土器群とは時期差がありそうなので、井戸の再掘削ないし井戸側の再構築の可能性がある。ただしいずれにしても廃棄時期は上部のSX04の時期である須玖Ⅱ式前半の幅内である。

＜文献＞渡部芳久2008「九州Ⅱ」『井戸再考～弥生時代から古墳時代前期を対象として～』第57回埋蔵文化財研究集会発表要旨集　／田崎博之1985「須玖式土器の再検討」『史淵』第122輯

・SE06（Fig.15,16、巻頭図版３-2～8、裏表紙下半写真）

Ⅰ区南側中央で検出した。検出時は、基礎攪乱の合間の中央部が南北に高く遺存していた（巻頭図版３-2）。この状態をもとに上部は区分けして（Fig.5）、上層遺物を上げている。上面での径は南北264cm×東西326cmの略楕円形、深さは最上面から375cm前後である。掘方は、下半の深さ220cm付近ですぼまり、下部は八女粘土より下の灰色シルト砂層まで掘り込んでいる。東側のみ深さ100cm付近でオーバーハングしているが、これは湧水のためというよりは、この付近の下方のみが数段のステップ状になる掘方のため、井戸側構築のための何らかの足場設置のための故意の掘り込みとも考えられる。掘削の順序に沿って見ていくと、深さ45～60cmで井戸側の位置を示す円形の落ち込みが見えるが（「落込１」；Fig.14、PL.2-9）、この際、途中で別の小さく浅い落ち込みも見え（「落込２」；Fig.14）、上部は井戸側を解体して取り出した後に埋めたり、途中で何らかの理由で掘り込んだりした状況であろう。深さ100cm前後でも落込みが見え、この内外に漆器（赤・黒漆）と鹿角があった（「落込３」；Fig.15上段、巻頭図版３-3,4、PL.2-10）。内外に分かれているので、漆器は井戸掘削・構築時の祭祀、鹿角は井戸廃棄時または再構築時（落込１と落込３が別時期の井戸側解体時とした場合）の祭祀であろう。井戸側痕跡が明瞭に見えるのは深さ140cm前後以下であり（Fig.15の上から2・3番目

の平面図、巻頭図版３-5,6、PL.2-11,12)、略方形の井戸側（井戸枠）があったことが分かる。ただし井戸側部材は残らず、掘方が下半で狭くなってきたため、作業の都合上、下半部は井戸側部分と中央部を分けて掘ることができなかった。ただし最下部で、井戸側の一部に使ったと思われる横木状杭が検出された（PL.2-13)。井戸側痕跡が確認できた最下部（深さ180～190cm）には、礫の集中廃棄があり、「井戸封じ」の祭祀と考えられる。また、この深さよりやや上部付近の掘方から、完形に復元できる（一部は井戸側内破片とも接合）弥生時代終末期の甕形土器が出土した（巻頭図版３-7)。

出土遺物（Fig.34-20～23,Fig.35）は、中世後期）の遺物を含みながらも、弥生中期・後期・終末期、飛鳥時代、中世前半期（12～14世紀前半）の遺物も多く含んでいる。井戸の掘削－廃棄時期は15世紀～16世紀前半前後とみられるが（Fig.35-7,8,11など)、遺構掘削時に多くの古い遺構を破壊したとみられ、特に完形に復元できる弥生時代終末期（ＩＢ期）の甕の存在（Fig.27-27）からは、その時期の井戸が重複していた可能性を想起させる。

・SE08（Fig.16、PL.2-14,15）

Ｉ区南東で検出。SK27や、弥生時代の円形竪穴住居痕跡SC01を構成するピット群を切る。上面は略南北115cm×略東西100cmの菱形に近い不整楕円形で、下部が深さ100cm前後で大きくオーバーハングして径210cm×190cmになり、掘削作業が危険なため途中で上部を掘り落して調査している。掘方は深さ200cm前後で以下が一回り小さくなる。上部が狭く危険なため、深さ245cm前後の礫群がある部分までを人力掘削とし、以下は重機で最下部を確認し、深さは320cm前後である。当初、上層途中から比較的掘りやすい円筒状に掘削できる落込みがあり、不明確だが円形井戸側（桶組など？）があった可能性がある。ただし途中から掘方が狭く、大きくオーバーハングしているなど安全作業を優先し、掘方と井戸側を区別した掘削はできなかった。出土遺物には（Fig.36-1～10)、朝鮮陶磁や瓦質土器火鉢などがあり、16世紀頃の掘削～廃棄が考えられる。

（２）土坑（ＳＫ）

・SK05（Fig.17、巻頭図版３-9、PL.3-1）

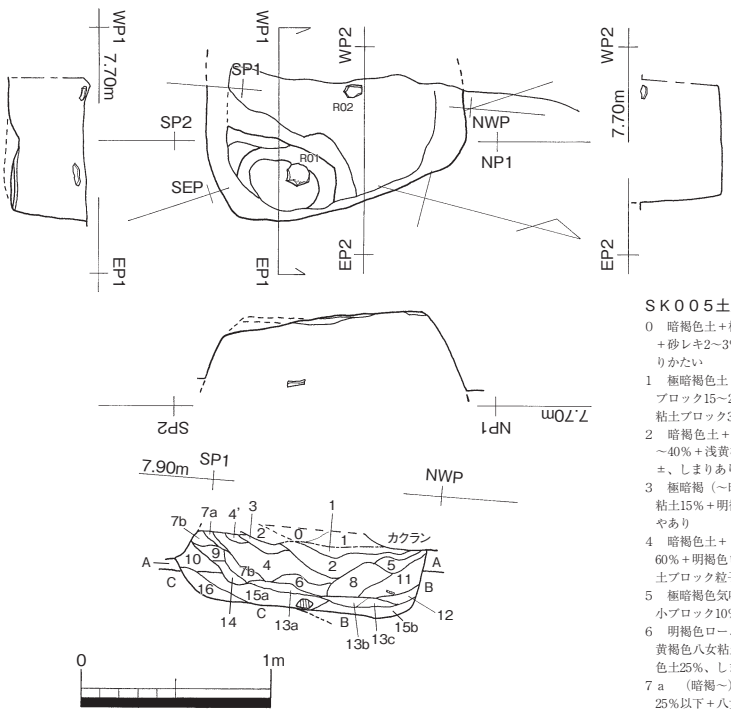


Fig.17　SK05実測図・土層図（1/40）

ＳＫ００５土層注記

0　暗褐色土＋橙～明褐色中小ブロック・粒子20%＋砂レキ2～3%＋八女粘土小ブロック、しまりありかたい

1　極暗褐色土（～暗褐色土）＋明褐色ローム大小ブロック15～20%＋褐色土ブロック3～5%＋八女粘土ブロック3～5%、しまりあり

2　暗褐色土＋明褐～黄褐色土ロームブロック30～40%＋浅黄橙～明黄褐色八女粘土ブロック5%±、しまりあり

3　極暗褐（～暗褐色土）＋浅黄橙～明黄褐色八女粘土15%＋明褐色ロームブロック10%、しまりややあり

4　暗褐色土＋（明）黄褐色ローム土ブロック50～60%＋明褐色ローム土ブロック＋浅黄橙色八女粘土ブロック粒子5%　しまりややあり

5　極暗褐色気味暗褐色やや粘質土＋明褐色ローム小ブロック10%以下（7%）

6　明褐色ロームブロック＋浅黄橙40%（＋α）～黄褐色八女粘土ブロック30%（＋α）＋暗褐～褐色土25%、しまりややあり～やや甘い

7ａ　（暗褐～）褐色土＋明褐色ローム小ブロック25%以下＋八女粘土小ブロック粒子20%、しまりややあり

7ｂ　暗褐色粘質土10%＋褐色粘質土20%＋八女粘土浅黄～うすい黄褐色粘土ブロック50%＋明褐色ロームブロック20%、しまりあり（～ややあり）

8　褐色粘質土主体40～50%＋暗褐色粘質土斑状20%＋明褐色ローム土斑状20%＋浅黄橙色八女粘土ブロック斑状10～15%（※８層上半と下部北に暗褐色土ブロック多い)、しまりややあり

9ａ　暗褐色土＋八女粘土小ブロック7%＋明褐色ローム土小ブロック15%、粘性欠ける、しまりあり

9ｂ　暗褐色土＋明褐色ロームブロック20～25%＋浅黄橙色八女粘土ブロック10%＋極暗褐色土小ブロック3～5%、粘性ややあり、しまりややあり～甘い

10　暗褐色土斑状40%＋明褐色ローム土30%＋褐色土20%＋八女粘土大小ブロック10%、しまりややあり～あり、やや粘質土、下部黒褐色土粘質土の筋が入る

11　暗褐（～極暗褐）色土＋明褐色ローム中小ブロック15～20%、土器片あり、しまりやや甘い、粘性ややあり

12　極暗褐色土＋明褐色ロームブロック15～20%（13ａ層より暗い)、しまりややあり～やや甘い

13　極暗褐～暗褐色土に地山Ａの明褐色（～暗い橙色）ロームブロック一部ラミナ状/斑状に混じる

13ａ　（南）ロームブロック25%

13ｂ　ロームブロック30%

13ｃ　ロームブロック40%

14　暗褐色土（やや粘質）＋明褐色ローム土10～15%＋八女粘土粒子10%、しまりあり

15　明褐～明黄褐色ローム土（ローム漸移土＝Ｂ層）＋浅黄橙色八女粘土上部（＝Ｃ層）ブロック＋褐色・暗褐色土の汚れ５%あり、しまりややあり　粘性あり

15ａ　八女粘土ブロック層、やや暗い

15ｂ　鳥栖ローム主体層＋暗褐色～褐色土ブロック混じり10%

16　一見地山、Ｃ層地山の脇に入りこむＡ～Ｂ層地山土明褐色ローム地山崩落土＋褐色（～暗褐色）土汚れ3～5%＋灰白～浅黄橙色八女粘土小ブロック5%、しまりややあり　粘性あり

Ａ　鳥栖ローム層地山

Ｂ　鳥栖ローム／八女粘土漸移層地山、にぶい明褐色ローム＋灰白～浅黄橙色粘土小ブロック貫入

Ｃ　八女粘土、明褐色ローム土が灰白色（～浅黄橙色）粘土に貫入する

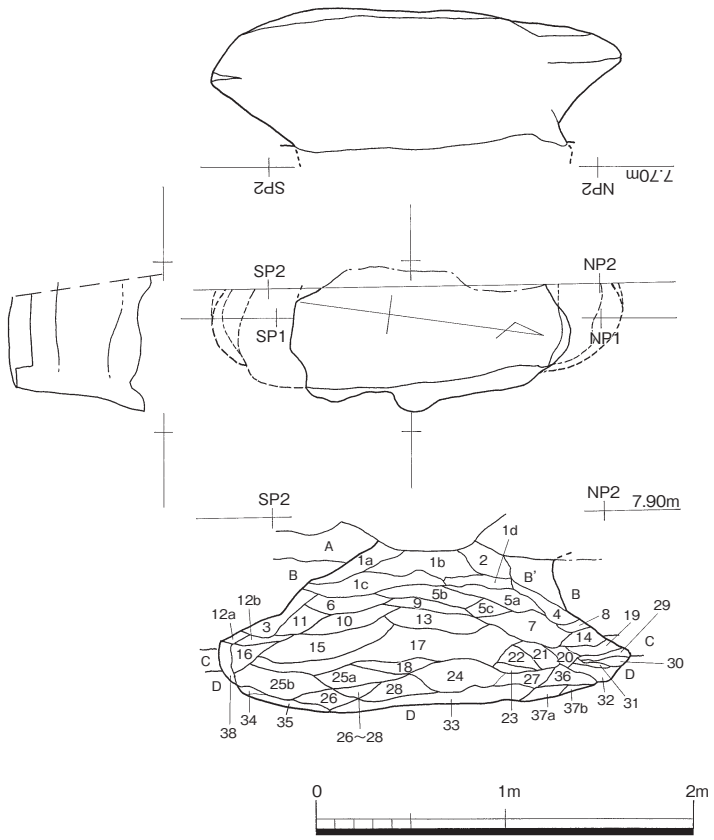


Fig.18　SK09実測図・土層図（1/40）

Ⅰ区西縁中央で検出した略長方形の土坑。遺構の約1/3は調査区外になる。略南北140cm、略東西90cm以上（推定110cm前後）、南辺が長く北辺が少し短い台形状平面か。深さは45cmの遺存。底面は南東側がわずかに高くなるがその中央が凹む。他は全体に平坦な底面。堆積は、最下部はレンズ状堆積のようだが、他は意図的に埋め戻したようにも見える。遺構の時期（弥生時代前期初頭）と、想定される本来の深さ（1㎡以上の削平が考えられる）から、袋状にならないタイプの貯蔵穴と考える。出土遺物（Fig.36-11～21）は、板付Ⅰ式の良好な資料。意図的埋納ではない破片の流れ込みではあるが、一括性は比較的高い。壺に板付系が多く、甕に夜臼系が多い。詳細は遺物の項で少し触れたい。

・SK09（Fig.18、巻頭図版３-10、PL.3-2）

Ⅰ区北西で検出した土坑。遺構の約1/3は調査区外。当初の検出時の平面は、南北150cm×東西75cm以上（推定約80cm強）の楕円形だが、土層断面から、確認面を20cm程度下げすぎているのが分かり、本来遺存していた上面長軸は94cm前後である（土層の「B'」層は地山崩落土）。下部は長軸方向で特に大きくオーバーハングしており、南北220cm×東西90cm前後に広がる部分があったと推定できる。袋状貯蔵穴である。底面は南

ＳＫ００９土層注記

0　鳥栖ローム土＋浅黄橙色八女粘土ブロック＋黒褐～暗褐色土ブロック5%、再堆積土
1ａ　鳥栖ロームブロック主体＋極暗褐色ブロック15%＋黒色　炭粒少しまりあり
1ｂ　極暗褐色土＋明褐～（褐）色土ロームブロック20%＋橙色ローム土粒子3%＋八女粘土（C・D層）小ブロック5%　しまりあり
1ｃ　極暗褐～暗褐色土＋明褐～褐色土10%＋橙色ローム土粒子5%＋黒色土粒子（10ミリ以下）1%、しまりあり
1ｄ　極暗褐色土＋褐色ロームブロック25%＋橙色ローム小ブロック・粒子5%＋八女粘土粒子2%、しまりあり
2　A層鳥栖ローム土＋黒褐～極暗褐色ブロック5%、しまりあり
3　黒褐色土＋橙色ローム土粒子10ミリ以下10%　八女粘土20ミリ以下3%＋黒色土粒子1%、しまりややあり
4　暗褐～（にぶい）褐色土＋明褐（～橙）色土ロームブロック25%＋暗褐色土10%、しまりあり
5ａ　暗褐（～極暗褐）色土＋明褐色ローム土小ブロック・粒子10～15%＋橙色粒子5%＋黒色粒子1～2%、しまりあり～ややあり
5ｂ　暗褐色土＋橙色（～明褐色）土ローム粒子（10ミリ以下）10%＋明褐色ローム小ブロック3～5%＋八女粘土小ブロック・粒子1～2%＋黒色土粒子1%、しまりあり
5ｃ　５ｂ層と７層の間、暗褐（～極暗褐）色土＋橙色～明褐色土小ブロック・粒子5～7%＋八女粘土粒子1～2%
6　５ｃ層に近い、極暗褐（～暗褐）色土＋橙色～明褐色土小ブロック・粒子5%＋八女粘土小ブロック・粒子2%＋黒色土粒子1%、しまりややあり～あり
7　極暗褐（～暗褐）色土＋明褐（～褐）色土ロームブロック5%＋橙色土粒子・小ブロック2%＋黒色土粒子2%、しまりあり～ややあり
8　極暗褐色土＋褐色～明褐色土ロームブロック40%、　しまりやや甘い～ややあり、粘性あり
9　極暗褐色土＋褐色土10%＋橙色ローム土粒子1～2%＋八女粘土粒子1%、しまりややあり
10　極暗褐（～暗褐）色土＋褐（～明褐）色土ロームブロック10～15%＋土器片少し＋黒褐色土ブロック1～2%、しまりあり
11　極暗褐（～暗褐）色土（６層より明るい）＋橙色ローム小ブロック・粒子7%＋明褐色ロームブロック5%＋炭粒含む黒色有機土粒5ミリ以下2%、しまりあり
12ａ　極暗褐（～暗褐）色土＋橙色ローム小ブロック15%、しまりやや甘い、やや粘性あり
12ｂ　極暗褐（～暗褐）色粘質土＋八女粘土or漸移層地山ブロック7%＋橙色ローム小ブロック5%、しまりやや甘い
13　極暗褐（～暗褐）色やや粘質土＋明褐（～橙）色ローム中小ブロック30%＋黒色有機質土5ミリ以下2%＋土器小片、しまりあり
14　極暗褐色粘質土＋明橙（～明褐）色ロームブロック15%、しまりあり～ややあり、14層下部にロームブロック多い
15　極暗褐（～暗褐）色土やや粘質土＋明褐色ローム大小ブロック40～50%、しまりあり～ややあり
16　極暗褐色やや粘質土＋明褐（～褐）色ローム中小ブロック7%、しまりあり
17　明褐色の濁ったローム土ブロック主体＋極暗～暗褐色土ブロック20%＋黒色粘質土2%＋八女粘土粒子1%以下、しまりあり、粘性あり、埋め戻し層か
18　極暗褐色（～暗褐色）やや粘質土＋明褐（～橙色）ロームブロック30～40%、しまりややあり
19　暗褐色土粘質土＋明褐色ロームブロック25%、しまりややあり
20　明褐色ロームブロック70～80%＋暗褐色土20%、　しまりあり～ややあり
21　極暗～暗褐色やや粘質土＋明褐（～橙）色ロームブロック60%＋黒褐色土粒10ミリ以下少し、しまりややあり
22　極暗～暗褐色土やや粘質土＋ローム明褐色土小ブロック以下～粒子7～10%、しまりあり
23　暗褐色土＋明褐色ロームブロック40%（多）、しまりややあり～やや甘い
24　極暗～暗褐色粘質土＋明褐（～褐）色土ローム大小ブロック20%＋一部橙色ローム土小ブロック2%＋炭粒わずか、しまりややあり
25ａ　27層に近い極暗褐（～暗褐）色やや粘質土＋明褐（～褐）色ロームブロック25～30%＋八女粘土ブロック3%＋土器小片わずか、しまりややあり～やや甘い
25ｂ　25ａ層よりロームブロックやや少、やや暗くい極暗褐色土が強い、ロームブロック20（～25）%＋八女粘土小ブロック粒子3%、しまりやや甘い～ややあり
26　暗褐（～極暗褐）色土＋明褐色ロームブロック多40%＋黒色土10ミリ以下1～2%八女粘土ブロック粒子2～3%、しまりやや甘い（～ややあり）
27　極暗褐（～暗褐）色やや粘質土＋明褐色ローム中小ブロック・粒子30～40%、しまりややあり、粘性ややあり（～やや甘い）
28　暗褐色（>極暗褐色）粘質土＋明褐～（明）黄褐色ロームブロック・粒子25（～30）%＋八女粘土小ブロック粒子3%、しまりややあり
29　極暗褐（～暗褐）色粘質土＋明褐（～橙）色ローム小ブロック・粒子5～10%、南側ロームブロック10%　、北側ロームブロック少・極暗褐色土強
30　極暗～暗褐色粘質土＋明褐～橙色ロームブロック15%　しまりやや甘
31　暗褐色土やや粘質＋明褐色（～橙）色ロームブロック50%、しまりややあり
32　極暗褐（～暗褐）粘質色土＋明褐色ロームブロック・粒子10～15%（周囲層よりやや少ない）＋八女粘土小ブロック2～5%　しまりややあり
33　暗褐色やや粘質土＋明褐（～橙・黄褐）色ローム土　小ブロック20（～25）%＋八女粘土（浅黄橙～明黄褐色）ブロック5%　しまりやや甘い（～甘い）
34　暗褐色粘質土＋明褐（～橙）色ロームブロック3%
35　暗褐色粘質土＋明褐（～黄褐）色ローム中小ブロック15%＋八女粘土中小ブロック5%、しまりやや甘い（～甘い）
36　極暗褐色やや粘質土＋明褐（～（明）黄褐）色ロームブロックラミナ状25～30%、しまりややあり
37　浅黄橙～浅黄褐色八女粘土上部ｏｒ鳥栖ローム下部地山崩落土（粘質土）＋（にぶい）褐色土ラミナブロック
37ａ　褐色土40%
37ｂ　褐色土10%
38　八女粘土＋暗褐色土15%
A　鳥栖ローム上部地山、褐色～明褐色
B　鳥栖ローム下部地山、明褐色～橙色
C　八女粘土上部または鳥栖ローム～八女粘土漸移層
D　八女粘土

北200cm×東西75cm前後だろう。土層を見ると、中央が山状になっており、自然崩落というよりは埋め戻しされた可能性がある。出土遺物（Fig.36-22～25、37-1,2）は、板付Ⅱａ式の土器群。ただし1点古墳後期～飛鳥時代の赤焼タタキ整形土器片があるが上層出土で、上部の攪乱からの混入品である。

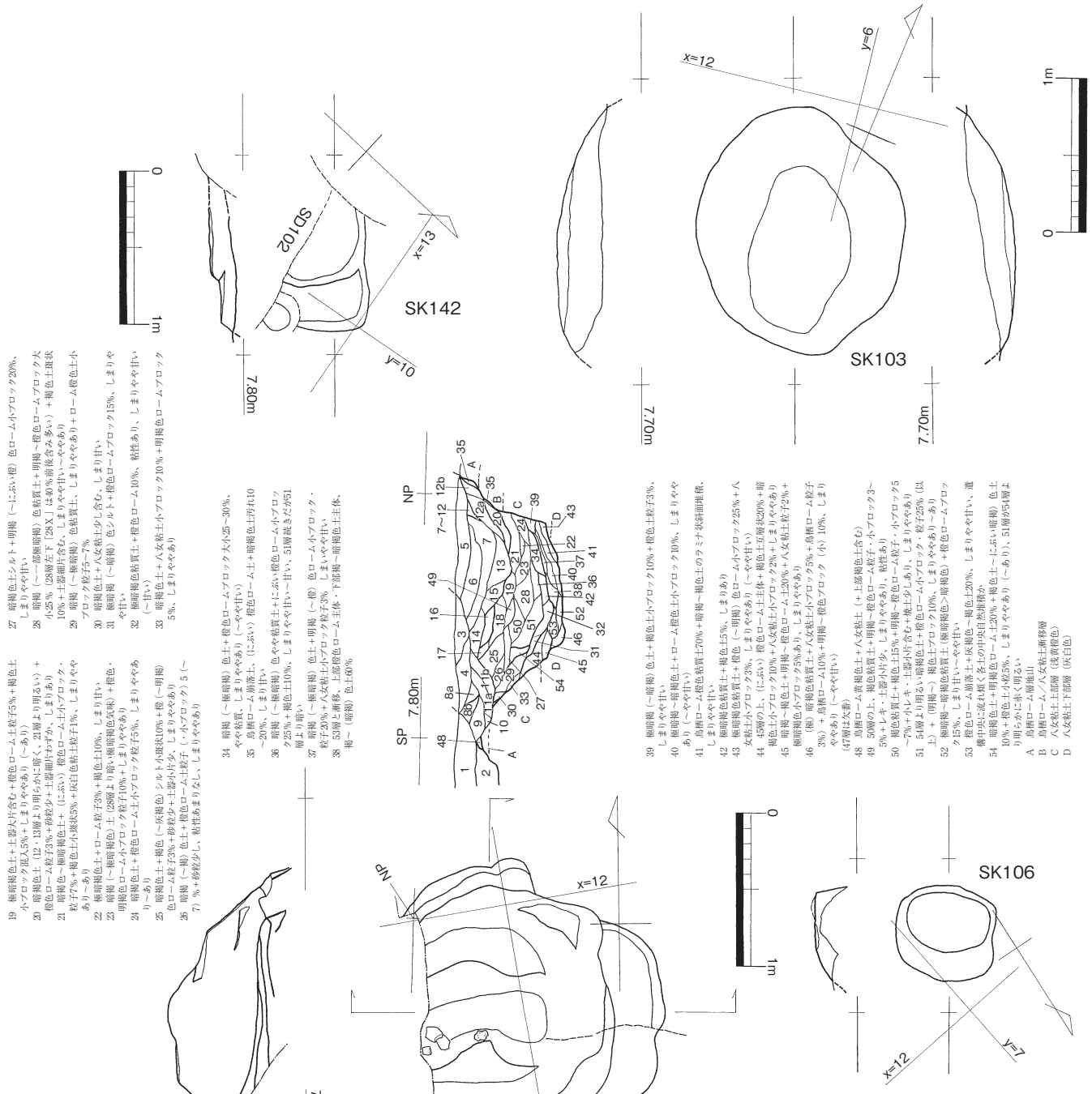


Fig.19　SK103・106・SX142実測図、SK104実測図・土層図（1/40）

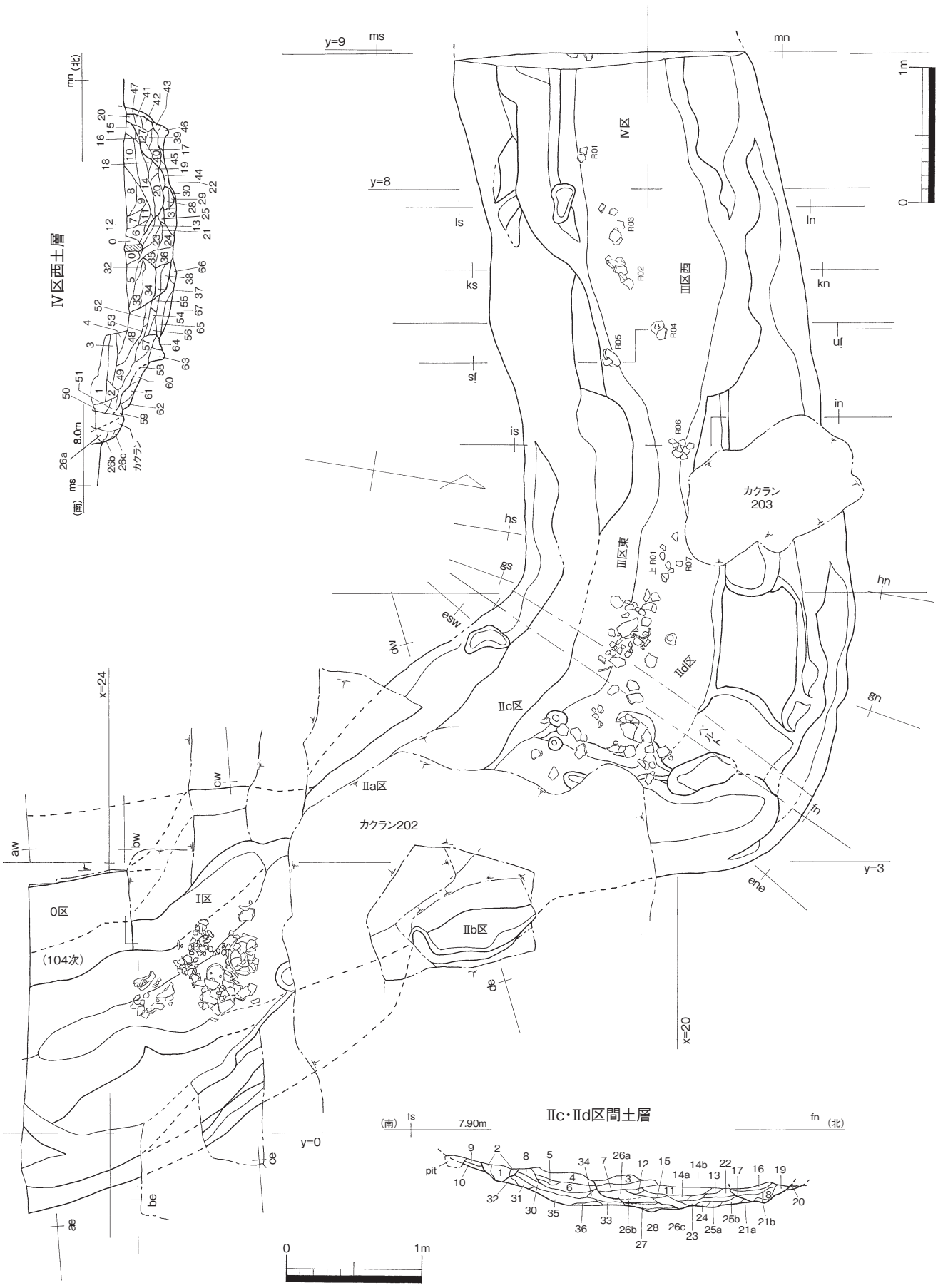


Fig.20　SD101（方形周溝墓）実測図・土層図（1/40）

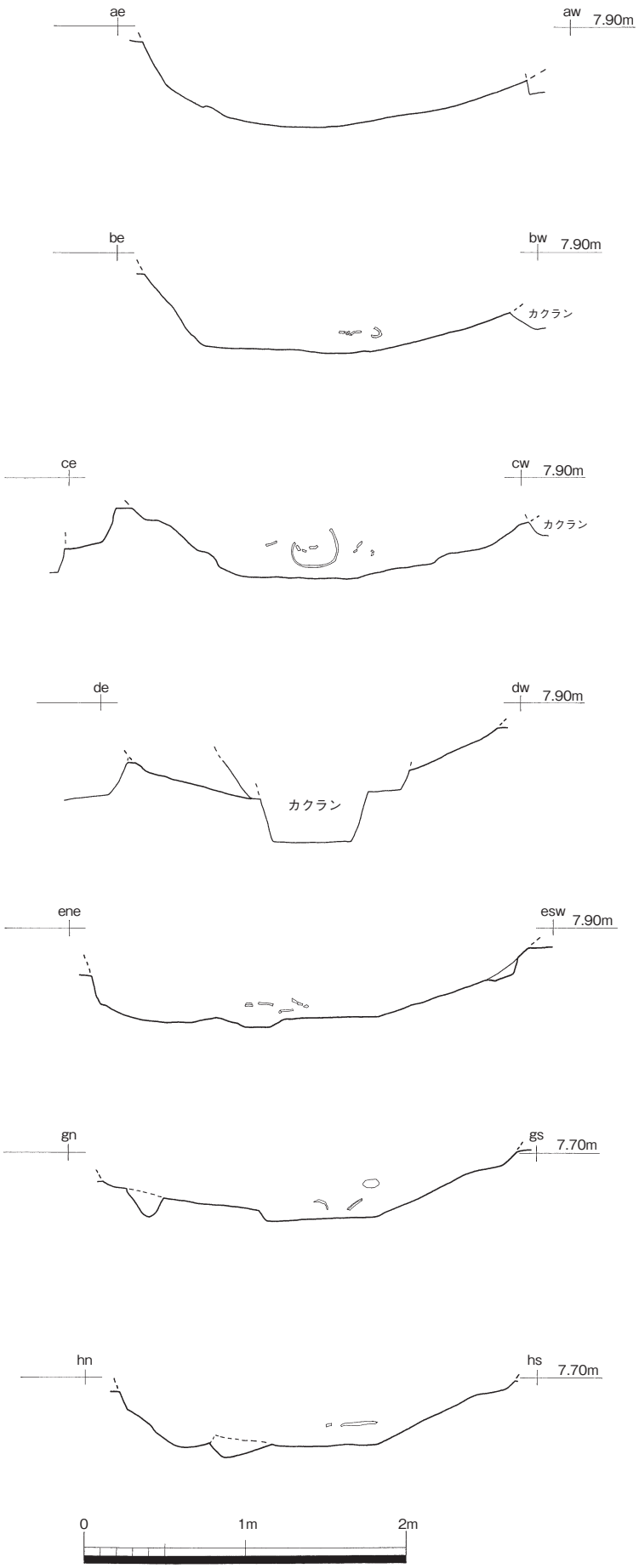


Fig.21　SD101東側溝・隅角部断面図（1/40）

・SK（SX）104（Fig.19中央・下、巻頭図版３-11、PL.3-7,8）

Ⅱ区北西で検出。SD102a、SP105、SK106に切られる。西縁は調査区外になる。北西側と東側上部がテラス状に広がる。南北170cm、東西160cm以上（推定180cm前後）の不正隅丸方形状。深さは、検出面の高い北側から約80cmの遺存。堆積はおよそレンズ状の自然堆積。用途不明の土坑である。出土遺物が少なく時期決定は難しいが、中世後半？の土師器坏（Fig.37-6）から、SD102の掘削時期に近接した15世紀頃のものか。

・SK103（Fig.19右上、PL.3-6）

Ⅱ区北西、SX104の東側で検出。略南北138cm×略東西60cm、深さ34cmの楕円形土坑。覆土はにぶい褐色土。出土遺物は少ないが（Fig.37-4,5）、中世前半の土師器坏の時期であろう。

・SK142（Fig.19左上、PL.3-9）

Ⅱ区北東で検出。SD102に切られる。長軸92cm以上（推定105cm前後）×短軸60cm以上（推定70cm前後）、深さ18cmの長方形土坑。覆土は極暗褐色土。土坑としたが、周囲のピット（柱穴）の分布を見ると、「SC02」とした推定円形竪穴住居に伴う可能性もある（Fig.4,5）。出土遺物は僅少で時期不明だが、円形住居に関連するなら弥生時代中期か。

・SK106（Fig.19右下）

Ⅱ区北西で検出。SX104を切る。径70cm前後の不整円形、深さ24cmの遺存。覆土はにぶい褐色～褐色土。出土遺物はほとんどないが、SX104を切ることから中世後期か。土坑としたが、SP105、SP035と組み合わさる掘立柱建物の一部の柱穴になる可能性もある。

・SK10　SE03上部で検出した小土坑。

表1：Fig.20　SD101-Ⅱc／Ⅱd間fs-fn断面土層注記

1　暗暗褐色シルト、しまりあり
2　極暗褐色シルト、しまりややあり
3　（極）暗褐～暗灰褐色シルト、しまりかたい
4　暗褐色土～極暗褐色＋土器片＋レキ少し＋砂粒少し、しまりあり
5　（黒褐～）極暗褐色シルト、しまりややあり
6　（黒褐～）極暗褐色シルト＋ローム粒子5～7%＋暗褐色シルト20%＋土器細片小片やや多い、しまりあり～ややあり
7　黒褐～極暗褐色土＋ローム粒子3%＋土器小片少し＋砂粒わずか、しまりありかたい
8　暗褐色シルト＋ローム粒子3%＋土器細片わずか＋砂粒含む、しまりありかたい
9　極暗褐色土（やや橙色）＋ローム極褐色土5%、しまりややあり
10　ローム極褐色土＋にぶい褐色土＋暗褐色土30%、粘性ややあり、しまりややあり
11　暗褐（～極暗褐）色土＋ローム褐色土15%＋砂粒少し＋土器小片含む、しまりあり
12　極暗褐色やや粘質シルト＋ローム粒子3%＋土器細片含む、しまりややあり
13　極暗褐色土＋ローム褐色（にぶい橙色）土40%斑状、しまりありかたい
14a　極暗褐～暗褐色土シルト＋明褐色ローム土10%、しまりあり
14b　極暗褐色土少＋にぶい橙～明褐ローム土60%、しまりあり
15　極暗褐色シルト＋橙色ローム（～明褐色ローム）土　状15%、しまりあり
16　黒褐～極暗褐色土＋橙色ロームブロック20%、しまりややあり
17　暗褐色土＋橙色～明褐色ローム土40%、しまりややあり
18　暗褐～極暗褐色土＋明褐色ローム土10%、しまりあり
19　暗褐（～極暗褐）色シルト＋橙色ローム土ブロック30%、しまりややあり
20　地山鳥栖ローム橙色土ただしわずかに暗褐色シルト、しまりややあり
21　橙色ロームブロック＋暗褐色土ブロック50%
22　明褐色ローム土（～橙色）＋暗褐～極暗褐色土、しまりあり
22　明褐（～橙）色ローム土＋極暗褐色土ブロック15～20%、しまり（あり～）ややあり、粘性あり
23　明褐（～橙）色ローム土＋極暗褐色土ブロック15～20%、粘性あり、しまり（あり～）ややあり
24　橙色（黄褐色）ロームブロック＋極暗褐色土シルト5%
25a　（黒褐～）極暗褐色土やや粘質土ローム明褐色土粒子5%、しまりややあり
25b　暗褐（～極暗褐色）土＋橙色（～明褐色）ローム小ブロック10%、しまりややあり
26a　極暗褐色土＋ローム粒子2～3%、土器細片少し、しまりあり
26b　極暗褐色土（～暗褐色土気味）＋橙色（～明褐色）ロームブロック粒子5%
26c　極暗褐色（暗褐色）土＋褐色（～暗褐色）土15%＋ローム橙色粒子2～3%やや粘質、しまりややあり
27　（26bc層の下、28層の上）ローム橙色土＋暗褐（～極暗褐）色土ブロック20%、しまりややあり
28　暗褐色土落込み（凹み）＋ローム橙色土10%、しまりややあり
29　極暗褐色～黒褐色土＋褐色土5%、粘性あり、しまりややあり
30　極暗褐～暗褐色土＋ローム粒子1～2%、砂粒少し、しまりあり
31　極暗褐～暗褐色土＋褐色土30%＋明褐色ロームブロック10%、しまりやあり
32　極暗褐色土＋褐色土20%＋明褐色ローム土20%（～橙色土）、粘性あり、しまりややあり～やや甘い
33　（29層の下）橙色（～黒褐色）ローム土＋極暗褐色土斑状40%、しまりあり～ややあり
34　（29層と同じ？）極暗褐～黒褐色土橙色土ローム粒子ブロック5%
35　暗褐色土＋ローム橙（～にぶい明褐）色土斑状20%、粘質あり、しまりややあり
36　地山？橙色ローム土
南側ピット（SP140）　暗褐色土
上層＝3,4,7層
中央層群＝7,11～14,22～28層
内側層群＝5,8～10,29～33,35,36層

表2：Fig.20　SD101-Ⅳ区西ms-mn断面土層注記

0　極暗褐色土＋暗褐色土20%＋礫わずか、しまりあり・かたい、上からの掘り込みの覆土の可能性あり（区別困難）
1　上層（最上層）、暗褐色～極暗褐色土＋混じり少ない（土器片含む＋砂礫少し）、しまりあり・非常にかたい
2　上からの掘り込み（小ピットか）、極暗褐色土、混じり少ない、しまりあり・かたい、上層より純粋な層
3　乾いて色の相違不明確、暗褐色土と極暗褐色土の混合層、極暗褐色土主体＋暗褐色土20%＋炭粒ないし有機質黒色土少し＋砂礫1%、しまりあり・ややかたい
4　極暗褐色土＋砂礫少し＋ローム粒子数%、しまりあり・ややかたい、3層より黒い
5　極暗褐色土＋暗褐色土混じり＋砂礫わずか＋土器小片含む、しまりあり・かたい
6　5層とほぼ同じ、極暗褐色土＋暗褐色土わずか＋（小）礫をわずかに含む＋砂礫あり、しまりあり・かたい
7～11層は上からの掘り込みの埋土か
7　極暗褐色土（6層よりも黒い）＋土器片わずか＋砂礫あり（少）＋炭あり、しまりあり・かたい
8　極暗褐色土＋暗褐色土混じり＋砂礫1%＋土器小片あり、しまりあり・かたい
9　（黒い）極暗褐色土＋暗褐色土若干混じる＋砂礫少しあり＋土器片含む、しまりあり・かたい
10　極暗褐色土＋暗褐色土わずか＋砂礫あり＋ローム粒子・土器微細片が8・9層より多い、しまりあり・かたい、このあたりの分層（10層周囲）は微妙な違い
11　（黒い）極暗褐色土＋ローム粒子＋土器微細片含む＋砂礫少し、しまりあり・ややかたい
12　（黒い）極暗褐色土、混じり少ない、しまりあり・かたい
13　極暗褐色土＋砂礫若干＋土器片含む、しまりややあり
14　（黒い）極暗褐色土＋炭粒わずか＋砂礫わずか＋ローム小ブロック・粒子数%、しまりあり・かたい
15　極暗褐色～黒褐色土＋明褐色ロームブロック15%、しまりや甘い
16　極暗褐色～黒褐色土、しまり甘い、15層からの続き
17　明褐～にぶい橙色ロームブロック＋極暗褐色土汚れ10～20%、18層に近い（一連か）
18　17層に近いがロームブロックやや少、黒褐～極暗褐色土＋明褐色ロームブロック25%、しまりあり・かたい
19　極暗褐～黒褐色土＋明褐色ロームブロック40～50%、しまりあり、17～19は一連の層か
20　極暗褐～黒褐色土＋土器片少＋砂礫少し＋暗褐色土5%＋炭粒少、しまりあり～ややあり・ややかたい、粘性ややあり
21　極暗褐色～黒褐色土＋土器片含む＋砂礫わずか＋ローム粒子ごくわずか、混じり少ない、しまりあり～ややあり
22　（黒褐色に近い）極暗褐色土＋明褐色ローム小ブロック・粒子15%、粘性ややあり、しまりややあり～やや甘い
23　極暗褐色土＋土器片含む＋ローム粒子わずか＋炭粒わずか、しまりあり・ややかたい、21層の下、23・24層は掘り込みの覆土（外側掘り直し層の一部か）
24　極暗褐色～暗褐色土＋ローム粒子若干＋砂礫わずか、しまりややあり・ややわらかい、粘性あり
25　極暗褐色土＋暗褐色土10%＋ローム明褐色土5～10%＋砂礫わずか、しまりややあり、粘性ややあり
26　極暗褐色～暗褐色土＋暗褐色～褐色土混じる＋ローム明褐色土10%＋砂礫わずか、しまりやや甘い
27　極暗褐色土＋暗褐色土わずか＋ローム土少し＋砂礫わずか、しまりややあり～やや甘い、妙な層
28・29層は周溝堆積途中までのピット掘り込み覆土
28　極暗褐色土＋明褐色ローム10%＋黒褐色土粒1%＋砂礫わずか、粘性ややあり、しまりあり～ややあり
29　（黒褐～）極暗褐色土＋橙色ローム粒子3～5%、しまりやあり（28層より劣る）、粘性あり
30　29層極暗褐色土＋地山鳥栖ローム混入、しまり甘い
31　（黒褐～）極暗褐色土＋鳥栖ロームブロッ、30%、しまり（やや甘い～）甘い
32　5層下と33層上の間、黒褐色に近い極暗褐色土＋砂礫含む、しまりあり・かたい
33　黒褐色に近い極暗褐色土＋砂礫含む＋土器片あり　ローム粒子若干、しまりあり・ややかたい、粘性ややあり～わずか
34　土器片多数の層（二重口縁壺片あり）、黒褐色に近い極暗褐色土（黒褐～極暗褐色土）＋砂礫わずか＋ローム粒子含む、粘性あり、しまりあり～ややあり
35　（黒褐色に近い）極暗褐色土＋砂礫わずか、しまりあり・かたい、34層からの一連の堆積だが堅い層
36　上からの掘り込み覆土か、極暗褐色土＋暗褐色土少し＋砂礫含む、しまりあり・ややかたい～かたい
37　黒褐色に近い極暗褐色土＋暗褐色土10%＋ローム粒子5%（上の34層より多い）
38　極暗褐色～暗褐色土＋ローム粒子10%＋黒褐色土粒子1%、しまりややあり～やや甘い、粘性あり、37・38層は一連の層
39　黒褐色に近い極暗褐色土＋砂礫含む（わずか）＋ローム粒子わずか、しまりややあり
40　黒褐色に近い極暗褐色土＋暗褐色土10%＋土器小片あり、しまりあり～ややあり、粘性ややあり
41　26層の下、暗褐～極暗褐色土＋ローム粒子15%、しまりやあり～やや甘い、粘性あり
42　黒褐色気味の極暗褐色土＋暗褐色土5～15%＋明褐色ローム粒子5%、粘性あり、しまりややあり、41層より暗い
43　黒褐色に近い極暗褐色粘質土＋明褐色ローム粘質土10～15%
44　極暗褐～暗褐色土＋鳥栖ローム（崩落土）小ブロック（15～）20%、しまりやや甘い～ややあり、粘性あり
45　暗褐色土＋ロームブロック明褐色土40%、しまりやや甘い
46　一見ローム地山土、地山ローム土主体＋暗褐～極暗褐色土汚れ5%、溝状の掘り込み覆土
47　地山鳥栖ローム崩落土＋極暗褐色土汚れ20%、しまり甘い
48　極暗褐色土＋暗褐色土斑状5%＋砂礫含む1%＋　土器小片やや多、しまりあり・非常に堅い
49　49層よりやや黒い極暗褐色土、しまりあり・かたい
50　暗褐～極暗褐色砂質シルト＋土器小片含む＋砂礫わずか、しまりあり・かたい
51　極暗褐色土（50層より暗い）＋砂礫1%、しまりあり・かたい
52　（黒褐色気味）極暗褐色土＋暗褐色土数%＋砂礫わずか、しまりあり・ややかたい
53　ローム粒子入る間層、極暗褐色土＋ローム粒子＋　砂礫若干、しまりあり・ややかたい
54　黒褐色に近い極暗褐色土＋暗褐色土5～10%＋ローム粒子2%＋砂礫1%＋土器片含む、混じりの多い層、　しまりあり
55　根攪乱の影響ある層、周囲より明るい層、極暗褐色土＋暗褐～褐色土20%＋ローム明褐色・橙色粒子10%、　混じりの多い層、しまりややあり、粘性ややあり
56　極暗褐色土＋暗褐色土＋砂礫わずか、しまりややあり（～やや甘い）
57　極暗褐色土＋暗褐色土やや多＋八女粘土粒子1%＋ローム粒子3～5%、しまりややあり（～やや甘い）、56・57層は一連の層
58　（極暗褐色～）暗褐色土＋ローム粒子数%＋砂礫わずか、しまりやや甘い
59　？（注記忘れ？）※61層とほぼ同じか？
60　鳥栖ローム崩落土＋暗褐色～極暗褐色土汚れ10%、しまりやや甘い、粘性あり
61　鳥栖ローム崩落土（ブロック・粒子）＋暗褐色土汚れ30%、しまりややあり～やや甘い、粘性あり
62　地山に見えるが汚れあり覆土とする、ローム土＋暗褐色・極暗褐色土の汚れ入る、しまりややあり
63　明褐色ローム土＋暗褐色～極暗褐色土混じる30%、粘性あり、しまりややあり、63・64層は小溝ないしピットの覆土
64　明褐色ローム土＋63層よりも暗褐色土が多い（60%）、他は63と同じ
65　（極暗褐～）暗褐色土＋明褐色ローム粒子かなり入る30%＋黒褐色土小ブロック・粒子含む
66　暗褐色土の混じるローム土主体層＋土器片あり、粘性あり、しまり甘い
67　ローム土＋極暗褐色土汚れ20%、しまりやや甘い
68　暗褐色～極暗褐色土
69　鳥栖ローム土＋暗褐色土20%
70　暗褐色土＋鳥栖ローム土40%

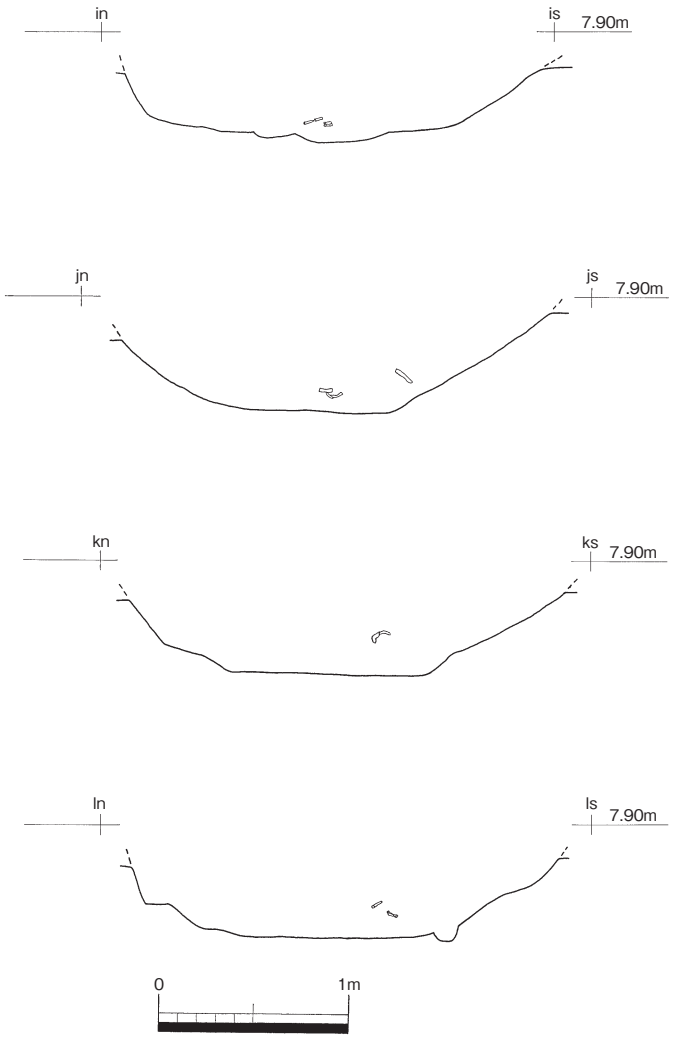


Fig.22　SD101北側溝断面図（1/40）

Fig.23　SD101－Ⅰ区遺物出土状況図（1/20）

きわめて浅く不明瞭な土坑で、SE03西側上層覆土の相違を誤って掘削した可能性があり、個別記録をとっていない。ただし遺物は分けて取り上げた。出土遺物（Fig.37-3）は、須玖Ⅰ式新相～須玖Ⅱ式古相の鉢形土器。SE03最下層の土器群に近い様相で、SE03掘方覆土内とするのが妥当か。

・SK07（Fig.5）

Ⅰ区のSE06西側で検出した土坑。東側を基礎攪乱で切られ、SE06との直接の切り合いはない。南北104cm以上（推定110cm前後）×東西50cm以上（推定70cm前後）、深さ17cm（北側の高い面から）の遺存。やや淡い暗褐色覆土。上層中央に30×15cmの礫が流入。上層に土師器小皿があり（Fig.37-9）、中世の遺構であろう。

（3）柱穴（SP）

・SP022（Fig.5、PL.3-4）

Ⅰ区南東隅付近で検出。略南北50cm×略東西45cmの略方形柱穴。深さは23cmの遺存。北東側にテラスがあり、柱痕は南西側に寄る。覆土は極暗褐色土。掘方の南西隅に土器片が出土。出土遺物（Fig.37-8）は、受口状口縁の広口壺。須玖Ⅱ式に稀にある器形であるが、瀬戸内など外来系の可能性もある。SP022は、SP033やその東側のピットと並んで掘立柱建物や柵列などの一角をなす可能性があるが、調査区全体が攪乱と削平を受けており、全体像は不明である。

（4）竪穴住居（SC）

那珂170次調査は全体的に削平が顕著であり、明確な竪穴住居の掘方は認められなかったが、柱穴の並びから円形竪穴住居の可能性があるものが2か所あり（Fig.5）、簡単に報告しておく。SC01は、Ⅰ区中央南東で、ちょうどSE08を取り囲むようにならぶ円形状の柱穴群である。ただし北側から北東側は、柱穴があるべき位置に攪乱があり、不明確である。柱穴列の復元径は、約5.0mである。SC02は、Ⅰ区南東からⅡ区北東にかかる位置にある。SK142はこの一部か、もしくは重複関係にある。SC02の柱穴列の復元径はSC01に近く、約5.0m前後である。SC01、SC02いずれも、円形竪穴住居であろうこと、周囲にSE03、SK04などの須玖Ⅰ式新相～須玖Ⅱ式の遺構があり、南側のSD102やSD101にも須玖Ⅱ式前後の土器群が混入していることから、それらの時期幅内での遺構と推測される。

（5）溝状遺構（SD）

・SD101（Fig.20～24、表表紙写真、巻頭図版3-12～14、同4-1～4、PL.3-10～19、PL.4-1～4）

Ⅱ区南半で検出したL字状に曲がる溝状遺構である。南側に隣接する（SD101-0区は重複している）**那珂104次調査SD01、SD02**（Fig.25）と合わせて**方形周溝墓**（Fig.26）になる遺構の一部である。遺構の溝の長さや各所の溝幅の法量の詳細については、挿図（Fig.20,21）を参照されたい。

SD101は、0～Ⅳ区に分けている。うち、0区は104次調査との重複部分、Ⅱ区はⅡa～Ⅱd区に、Ⅲ区は東西に細分している。0区は、102次の埋め戻し土を除去後、102次の調査時に最下部（わずかに遺物が出ている；Fig.38-2ほか）と攪乱部分下部が掘削されていなかったので、今回は完全に掘削した。このため102次の溝掘削底面は少なくとも数cm程度は掘削が足らない部分があるとみられる。0区北側（104次調査時は攪乱下部）からⅠ区中央にかけては、下層から一括土器群が出土した（Fig.20,23）。土器群は折り重なっており、比較的短い間に落下ないし投棄されたと考えられる。この部分の一括土器群は、ほぼ古式土師器（ⅡA期～ⅡB期；久住1999・2017）で占められ、おそらくは周溝の墳丘にあったテラスや墳頂部から比較的短い時間に落下したか除去され投棄されたものであろう。なお、底面からは一定程度浮いており、墳丘での土器群供献祭祀の時期よりは後のものであり、一時期の祭祀の「一括埋納」的な「一括性」はない。しかし、後述するⅡc区以西の土器群が弥生時代各期の土器が多く混入するものとは異なり、一定の「一括性」を有するとも評価できる（Fig.38-3～27、Fig.39-3～5）。

Fig.24　SD101－Ⅱ・Ⅲ区遺物出土状況図（1/20）

104次調査全体図（周溝検出状況）　※座標は日本測地系（第Ⅱ系）

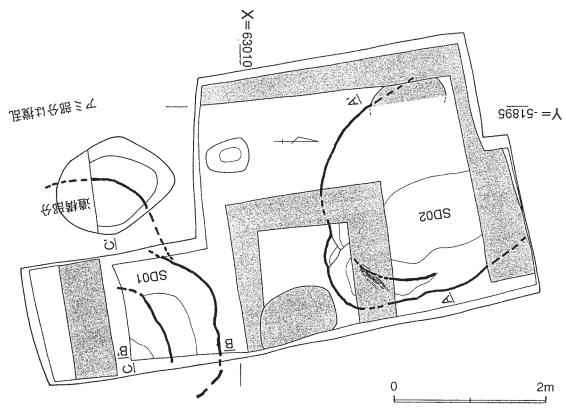
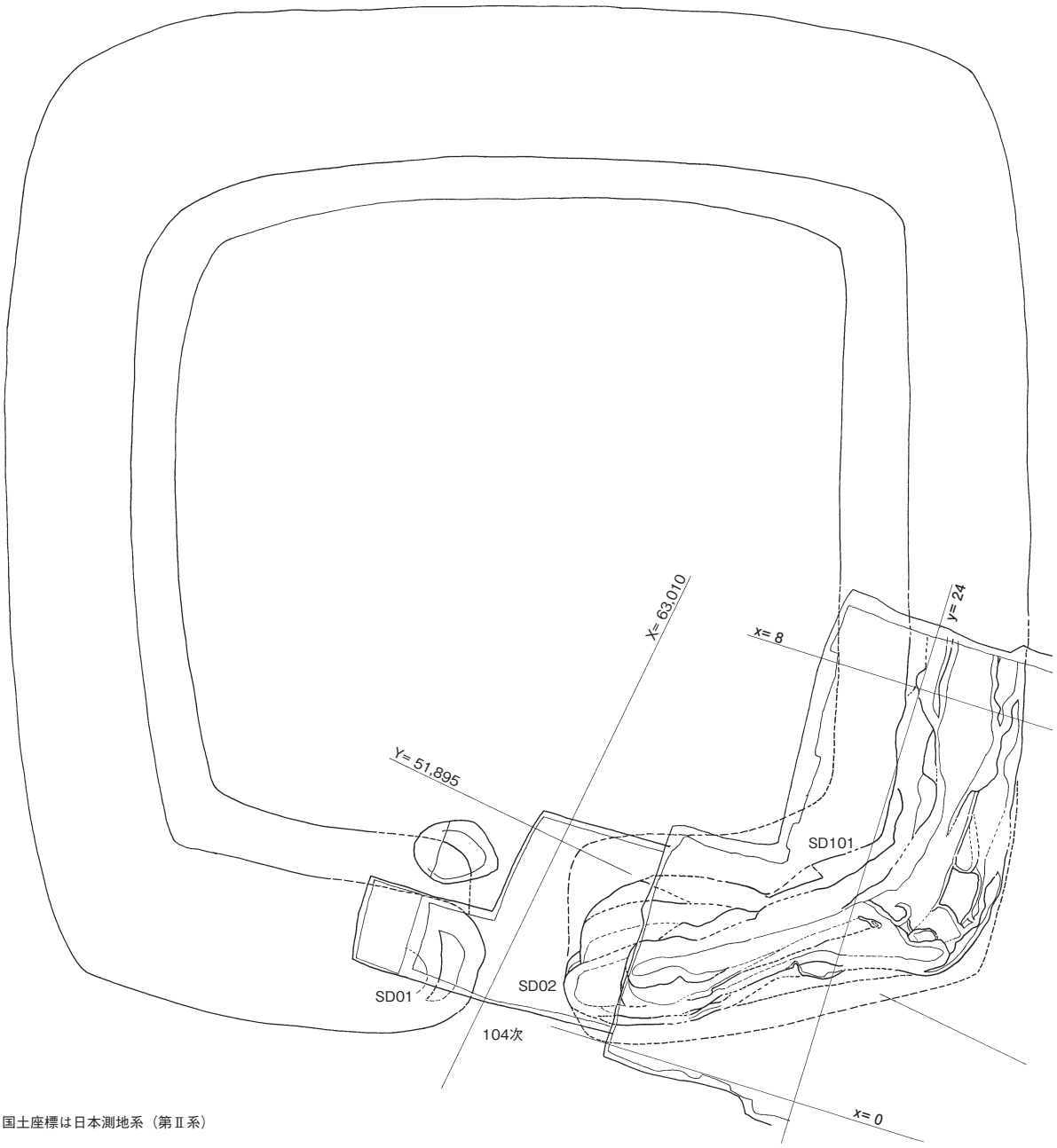


Fig.25　104次調査平面図（1/100）

SD101-Ⅰ区の周溝残存幅は228～245cm前後、深さは０区で50cm～Ⅰ区北側で40cmの遺存だが、深さの遺存は上面の削平程度にもより、底面の標高は逆に、０区で7.36m、Ⅰ区南で7.30mとなっている。Ⅰ区北側とⅡ区南東半（Ⅱａ・Ⅱｂ区）は大きく攪乱が入っているが、Ⅱｂ区は島状に辛うじて周溝外縁が残る。Ⅱａ－Ⅱｂ区の間や周囲に攪乱があるが、遺存する最大周溝幅225cm、周溝底面の標高は7.30m前後である。この部分では攪乱のためもあるが、遺物はあまり出土していない。０区からⅡ区南東



国土座標は日本測地系（第Ⅱ系）

Fig.26　方形周溝墓復元図（1/125）

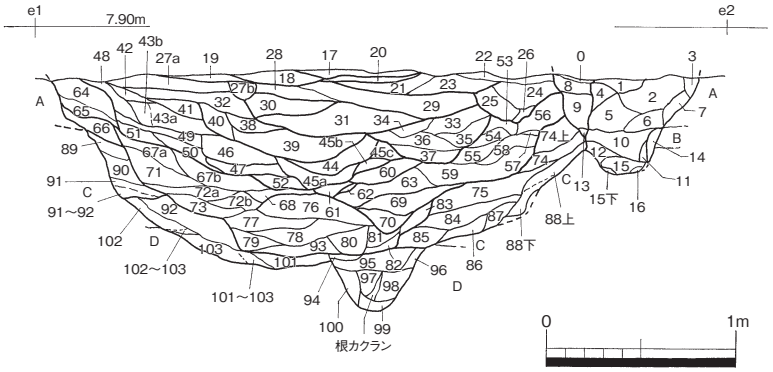
半の周溝横断面を見ると（Fig.21）、断面ae-aw、be-bw、ce-cwは周溝外縁の立ち上がりがやや急で、内側の立ち上がりがやや緩やかである。これは想定される墳丘斜面に続く造成のためであろう。周溝隅角（Ⅱｃ区）から北側周溝（Ⅱｄ区～Ⅳ区）の横断面もおよそ同じ傾向にある。ただし断面de-dwは内外の差が不明確である。

Ⅱｃ区は東側に大きな攪乱が一部かかるが、周溝隅角部付近は遺存している。なお周溝隅角は直角にならず、やや鈍角である。この部分での周溝幅は272㎝の遺存で、周溝底面は、内側下端が標高7.35ｍ前後、周溝中央やや外側で7.27ｍ前後となるが、外縁部へは一度やや上がった後にまた少し下がり標高7.30ｍとなる（断面ee-ew）。周溝外縁部は、隅角断面fs-fn（Ⅱｃ－Ⅱｄ間土層）にも表れているが（Fig.20）、周溝が若干埋没した後に、外縁部が溝状に再掘削されている状況である。この状況は北側周溝にも続く（Fig.20のⅣ区西土層など）。この時期が問題だが、下層に明らかに時期の離れた頃ではなく、周溝が下層上位付近まで埋没した古墳時代前期のうちであろう。出土遺物の項で再論するが、周溝墓に伴う大部分の土器群はⅡＡ期からⅡＢ期だが、中層以上や周囲攪乱からわずかにⅢＡ期古相頃に下る土器が含まれ、その時期前後の再掘削と推定する。Ⅱｃ区には一括土器群があるが、これは土層ベルトを挟んでⅡｄ区・Ⅲ区東端（Ⅲａ区東）の一括土器群と一連のものである（Fig.20, 24）。出土状況的には墳丘から流れてきたものであるため、意図的な埋納や投棄としての「一括資料」ではない。しかもⅠ区の「一括土器群」と比べて、分布がやや疎らであること、遺存率の悪い個体が多いのと、時期の異なる土器（より古い時期の弥生土器）の破片が少なからず含まれている（Fig.39-11,14,16～19,21,27,29、40 -1～3,5,6,22,25）ことが異なる。そのため、周溝墓墳丘上に供献土器がこれら「一括」土器群に含まれている可能性が高いが、同時に墳丘下や墳丘盛土に含まれた前代の土器破片も混入するような流入、堆積過程があったと考えられる。Ⅱｄ区は、断面gn-gsで周溝幅246㎝の遺存だが外縁部が攪乱で他の箇所より下がっている点を留意する必要がある（土層断面fs-fnでは282㎝）。深さは、周溝内側下端が標高7.31ｍ、中央の最下部が7.27ｍ、ここから外側はテラス状にやや上がって7.34ｍとなる。この周溝底面中央より高い底面外側テラスはⅡｄ区だけの幅80～100㎝だけあり、この外側の斜面も段状になっていて、あるいは周溝外側から内側に降りるような階段状施設だった可能性もある。その場合、墳丘側には、周溝底面が狭くなる西側のⅢａ区に曲がり、その内側斜面にテラスが二段（下方はⅢａ区、上方はⅡｄ－Ⅲａ区）あるので、そこを通ることになる。後述する方形周溝墓の「陸橋」とは別の施設であろう。Ⅱｄ区ではⅡｃ区ほどの幅はないが、周溝外縁に細い溝状落ち込みが認められる。この部分の底面の標高は7.3ｍ前後である。この溝は、Ⅱｃ区外縁の再掘削溝の続きであろうが、掘方形状が異なりＶ字状をなす。この延長は周溝底面外側ないし外縁部立ち上がりにⅢａ区途中まで認められるが（Ⅲａ区東では周溝中央底面と同じ深さになる）、攪乱を挟んで不明確となる。しかしそれは、掘り込みが当初の周溝底面まで達しなかったからであって、Ⅳ区西土層で認められるように、Ⅲ・Ⅳ区外縁部に続くとみられる。

SD101-Ⅲ区は、Ⅲ区東（Ⅲａ区）とⅢ区西（Ⅲｂ区）に分けられる（任意座標y=6.5が境界）。周溝の幅は、Ⅲａ区東で245㎝前後、中央で225㎝前後、Ⅲｂ区中央で238㎝、Ⅲ区西で226㎝である。周溝の深さ（標高）は、Ⅲａ区東で7.28ｍ、Ⅲａ区中央では7.32ｍ、Ⅲｂ区東～中央は7.28～7.29ｍ、Ⅲｂ区西では7.30ｍである。遺物は散漫に出土し、先述したⅡｃ区から一連のⅢａ区東側の土器群以外に、Ⅲａ区中央（Ⅲ区R06）、Ⅲｂ区東（Ⅲ区R04,05）、Ⅲａ区中央～西（Ⅲ区R02,03）がまとまって出土している。いずれも墳丘側から落ち込んで流入した状態である。底面からはやや浮いているものが多い。しかしこれらは必ずしも周溝墓に伴う古式土師器ばかりではなく、弥生土器なども含む。弥生中期土器や早期～前期初頭の土器が混入しているのはⅡｃ区～Ⅲａ区の遺物群と同様である。

SD102　e1－e2断面土層注記(1)

0　赤味ある暗褐色シルトブロック＋明褐色シルト＋砂粒含む、しまりややあり
1　にぶい黄褐～明褐色シルト＋暗褐～黒色シルト＋30%＋極暗褐色シルト小ブロック5%＋ローム粒子3%＋砂粒含む、しまりあり
2　1層とほぼ同じ、しまりありかたい
3　黄褐～橙色ロームブロック少し＋ローム粒子・小ブロック5%、しまりありかたい
4　明褐～にぶい黄褐色シルト＋暗褐色シルト5%＋砂粒1%以下、しまりありややかたい
5　褐色～（明）褐灰色シルト＋暗褐シルト10%＋ローム粒子5%、しまりありかたい
6　褐色（暗褐色気味）粘質シルト＋ロームブロック15%＋土器片あり、5層より暗い、
7　暗褐色粘質シルト＋ローム小ブロック・粒子7%、しまりあり～ややあり
8　暗褐～黄褐色シルト＋砂粒1%＋暗褐色シルト10～15%、しまりありややかたい
9　やや明るい褐色（明褐～黄褐色気味）シルト＋砂粒1%以下、しまりありかたい
10　褐色シルト＋暗褐色（粘質気味）シルト20%＋灰～褐色シルト30%＋ローム粒子5%、土器片含む、しまりややあり
11　暗褐～褐色粘質シルト＋ローム粒子八女粘土粒子5%、しまりやや甘い
12　褐色（褐灰色混合）粘質シルト＋土器小片　ローム粒子3%、しまりあり
（次頁に続く）



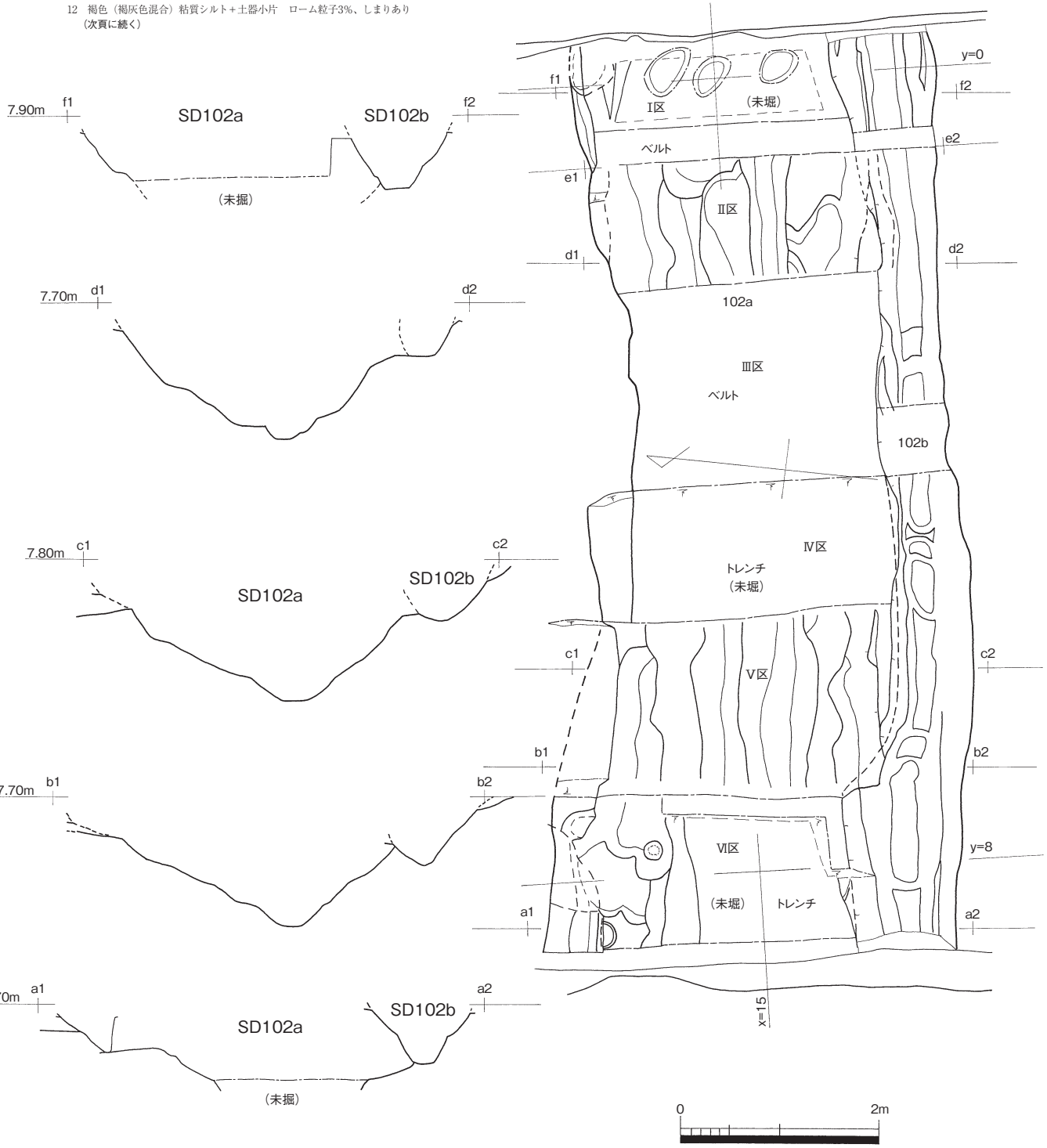


Fig.27　SD102平面図・断面図（1/60）、土層図（1/40）

SD101-Ⅳ区は、周溝幅240～246㎝で、底面は標高7.30m前後だが、土層断面（Ⅳ区西）を見ると底面に凹凸がある。Ⅳ区でも遺物の出土が散漫に出土するが、一部下層にまとまりがある（Ⅳ区R01）。またⅣ区西土層精査中にも上層にややまとまりがあった。平面図には反映していないが、周溝外縁の再掘削溝が土層にみられ、底面は7.36m前後である。外縁立ち上がりより少し深くなる部分がある。

以上、SD101（方形周溝墓周溝）について詳しく報告してきたが、ここで170次SD101の南側に接続する**那珂104次SD02**と陸

Ph. 3 那珂104次SD02出土二重口縁壺

表3：Fig.27　SD102　e1－e2断面土層注記(2)
（※Fig.27左上から続く）

13　褐色粘質シルト（やや褐灰色気味）＋ローム粒子5～7%＋八女粘土粒子3～5%
14　暗褐色粘質シルト＋明褐色土ロームブロック10%、しまりややあり～あり
15　灰色気味強の褐色（褐色に近い灰褐色）～褐灰色粘土粘質シルト＋八女粘土小ブロック、酸化マンガン粒あり、しまりあり～ややあり
16　14層に明褐色＋黄褐色八女小ブロック50%以上
17　SD102a最上層、にぶい黄褐色～明褐色土＋暗褐色土わずか＋砂粒1%前後、しまりありかたい
18　褐～明褐色土＋暗褐色土10%＋砂粒１%以上＋土器片やや多い、しまりややあり
19　褐色というより暗褐色土＋炭粒含む＋土器片少し含む＋砂粒1%未満、しまりあり～ややあり
20　褐～明褐色（黄褐色気味）土＋暗褐色土（10%）＋砂粒1%（未満）＋土器小片含む、しまりありかたい
21　褐色シルト＋土器小片含む、しまりありかたい、20層より暗く29層より明るい、23層よりもやや明るい
22　明褐～褐色土＋黄褐色～橙色ロームブロック10%＋八女粘土ブロック５%＋砂粒1%＋土器片あり、しまりありかたい
23　やや暗い褐色シルト＋砂粒1%＋土器小片含む＋暗褐色土5%、しまりありかたい
24　褐色土＋砂粒1%未満＋ローム粒子3%＋八女粘土粒子5%＋砂粒1～2%＋暗褐色土5%未満、しまりあり～ややあり
25　24層より暗い褐色シルト（暗褐色気味褐色土）＋暗褐色シルト15%＋土器小片あり＋砂粒1%、しまりありややかたい
26　25層（暗褐色気味褐色土）＋暗褐色土多め（20%）＋八女粘土小ブロック20%、しまりありややかたい
27ａ　19層の下、暗褐色が強い褐色土やや粘質シルト＋ローム小ブロック・粒子が細かく斑状に入る10%以上＋砂粒１%＋土器小片わずかに含む、しまりあり～ややあり、
27ｂ　褐色土＋暗褐色土30%＋砂礫１%＋ローム粒子少、上から掘り込みの覆土、27ａ層より明るい
28　暗褐色土＋土器片・礫入る＋ローム小ブロック・粒子15～20%、しまりややあり～やや甘い
29　28層の上、28層より明るい、褐色土シルト＋暗褐色土小斑状20%細かく入る＋砂礫あり＋明褐色ローム小ブロック・粒子が斑状に少し入る5～7%＋極暗褐色土小ブロック３%＋砂礫1%未満、しまりあり
30・31層は一連の堆積でおそらく新しい掘り込みの覆土
30　周囲より少し暗い、29層に近い暗褐色土シルト＋明褐～橙色ローム小ブロック・粒子20%＋極暗褐色土小ブロック３%＋砂礫わずか＋土器片わずか、しまりややあり、
31　暗褐色気味褐色土（褐色～暗褐色土）＋暗褐色土斑状40～50%＋橙色ロームブロック・粒子５%＋極暗褐（～黒褐）色土ブロック２%＋砂礫多い＋土器片あり、しまりありややかたい
32　30・31層に切られるが一連の層、暗褐色土シルト（31層に近い）＋褐色土ブロック10～20%＋明褐色ロームブロック20%＋砂礫少ない＋小土器片わずか、しまりややあり～あり
33～37層は一連の掘り込みの覆土の可能性
33　混合層、暗褐色に近い褐色シルト＋明褐～橙色ロームブロック25～30%＋小土器片あり＋極暗褐～黒褐色土ブロック１～２%、しまりややあり
34　暗褐色シルト＋橙色ロームブロック10（～15）%＋褐色土ブロック10%、しまりやや甘い、粘質ややあり
35　暗褐色シルト＋明褐～橙色ロームブロック30～40%＋土器片わずか、しまりやや甘い
36　暗褐色に近い褐色土～暗褐色シルト＋橙色～明褐色ロームブロック40%（土層左側にロームブロック多い）、しまりやや甘い～ややあり、
37　暗褐色シルト＋砂礫わずか＋極暗褐色土ブロック1～2%＋明褐色ロームブロック1%、混じりやや少ない、しまりありややかたい、33～37層群の底部
38　31・32層の下、暗褐色シルト＋土器小片あり＋砂礫ほとんどない（わずか）＋橙色ロームブロック・粒子5%＋褐色シルト10～15%、しまりややあり、
39　暗褐色シルトが基本＋ロームブロック・粒子5%未満＋褐色シルト5%＋八女粘土粒子・ブロック１%＋砂礫わずか1%未満、しまりややあり・ややかたい
40　暗褐色シルト＋砂礫わずか＋ロームブロック混入少＋極暗褐色土小ブロック5%、しまりややあり（ややかたい）
41　褐色土＋暗褐色～極暗褐色シルトブロック斑状15%＋砂礫1%＋土器小片わずか、しまりあり・かたい
42　褐色シルト＋暗褐色シルト小ブロック20%＋ロームブロック10%＋砂礫あり、しまりあり・ややかたい
43ａ　43層右側、褐色シルト＋暗褐色シルトブロック30%＋八女粘土粒子3～5%＋砂礫あり＋炭粒入る＋ローム粒子わずか、しまりあり・かたい
43ｂ　43層左側、右側よりやや暗い暗褐色シルト＋褐色シルト20%＋八女粘土粒子5%＋ローム粒子3%、しまりややあり
44　（上の31層も暗褐色気味）31層より若干暗い、暗褐灰色シルト入り粘質気味、暗褐色土＋暗褐灰色粘質シルト＋褐色～褐灰色土が斑状に混合＋砂礫あり＋土器片あり＋ローム粒子2%、水流があったような層、しまりややあり、粘性ややあり
45ａ　暗褐灰～褐灰色土＋暗褐色土＋褐色土混合＋極暗褐色土小ブロック含む＋土器片含む、上の44層が明るく45層やや暗い、粘性あり、しまりやや甘い
45ｂ　45ａ上右、45ａ層とほぼ同じ、褐色粘質シルト＋暗褐色～暗褐灰色土混じる、45ａ層よりやや明るい、しまりやや甘い
45ｃ　45ｂ層の上部、暗褐色粘質気味シルト＋橙色ロームブロック10%、45層と分離すべきか、しまりあり・ややかたい
46　（極暗褐色気味）暗褐色土＋明褐～橙色ロームブロック斑状15%＋土器片多い、ロームブロックの影響で暗褐色土にやや赤みあり、しまりややあり～やや甘い、粘性ややあり
47　褐色～褐灰色粘質シルト＋橙色ローム小ブロック10%＋暗褐～極暗褐色シルトブロック15%の混合土＋土器片若干＋砂礫若干、しまりやや甘い
48　暗褐色気味褐色土＋暗褐色土が多く入る＋砂礫含む、しまりあり・かたい
49　（にぶい黄褐色気味）褐色シルト＋暗褐色～極暗褐色土小ブロック30%＋土器片あり＋八女粘土ブロック・粒子15%＋橙色ローム小ブロック3%＋砂礫含む、しまりややあり～あり
50　49層と一連の層、（にぶい黄褐色気味）褐色シルト＋暗褐色～極暗褐色土シルト30%＋　橙色ローム小ブロック３%＋土器片含む＋八女粘土ブロック・粒子が49層より多い（20～25%）、しまりややあり～あり
51　褐～暗褐色シルト＋極暗褐色土シルト25%＋八女粘土ブロック25（～30）%、しまりややあり、八女粘土ブロック・粒子50層より多い
49～51層は一連の層群で50層が最も暗い土色
52　暗褐～暗褐灰色土シルト＋極暗褐色土ブロック5%＋（明黄褐～浅黄橙色）八女粘土ブロック30%（層の真ん中に入る）、しまりやや甘い、粘性あり
53　橙～明褐色ロームが強い層、ローム主体60%以上＋暗褐色～褐色土30%＋極暗褐色粘質土ブロック5%、しまりあり・ややかたい
54　にぶい褐色（～黄褐色気味褐色）シルト＋砂礫１%＋暗褐色シルト斑状10～15%、しまりあり
55　暗褐色シルト＋砂礫１%＋ローム粒子数%（3～5%）、しまりあり・ややかたい、55層と37層との間にロームブロック（37層に帰属か55層か不明確）
56　にぶい褐～褐色シルト＋暗褐色土15%＋砂礫１%＋ローム粒子斑状5%、しまりあり・かたい
57　赤みのある褐色シルト（ローム土？）＋暗褐色土10%、しまりあり、粘性ややあり
58　（暗褐色気味）にぶい褐色やや粘質シルト＋橙（～明褐）色ロームブロック40%＋砂礫若干
59　にぶい褐～やや暗い褐灰（～灰褐）色やや粘質シルト＋砂礫１%＋橙色ロームブロック30%＋極暗褐色土小ブロック1～2%、しまりややあり・一部やや甘い
60　（やや赤みのある）暗褐色やや粘質シルト＋ローム土類似の褐～明褐色シルト40%＋砂礫1ミリ未満あり、粘性あり、しまりややあり～やや甘い
61　60層の左下、暗褐色粘質シルト＋ローム小ブロック5%＋八女粘土小ブロック3%、しまりやや甘い、粘性ややあり
62　褐色シルト＋トスローム～八女粘土漸移層地山ブロック25%、しまりやや甘い、61層と一連の層
63　暗褐色気味褐色～暗褐灰色（粘質気味）シルト＋明褐～橙色ローム小ブロック5%＋八女粘土小ブロック・粒子1～2%＋砂礫１%未満＋極暗褐～暗褐色土小ブロック2%未満、しまりややあり、粘性あり
64　褐～明褐色土シルト＋八女粘土ブロック20%＋土器片あり＋砂礫若干＋暗褐色土ブロック7%、しまりややあり、乾くともろい層
65　（やや暗色気味）褐色土＋ローム中小ブロック25%前後
66　にぶい褐色土＋暗褐色土30%＋ロームブロック・粒子5%＋八女粘土小ブロック・粒子2～3%、しまりあり・かたい
67ａ（上半）　（やや明るい）暗褐色～にぶい褐色土＋極暗褐色土少ない5%＋ローム3%＋八女粘土1～2%、しまりあり～ややあり
67ｂ（下半）　暗褐色土＋極暗褐色土やや多い20%＋明褐色ローム10～15%、しまりややあり、粘性あり、67ａ／ｂ層は漸移的
68　やや赤みのある褐～暗褐色土粘質シルト＋ローム5～7%＋炭粒ごくわずか
69　暗褐～暗灰褐色土（暗褐色主体）＋ローム小ブロック3～5%＋砂粒１%＋炭粒わずか、　しまりややあり～あり、粘性あり（強い）
70　69層に近いがやや暗い、暗褐色粘質土＋ローム粒子2～3%＋炭粒1%＋砂礫わずか、しまりやや甘い、粘性あり（やや強くなる）、上から掘られた層の覆土
71　（暗褐色気味）にぶい褐色土＋ローム粒子3%＋八女粘土粒子3%＋炭粒ごくわずか＋砂粒わずか、上部の67層と比べて赤みのある層、しまりやや甘い（～ややあり）、68・71～73層は一連の層群
72ａ　暗褐～暗褐色に近い赤みのある褐色やや粘質シルト（・砂質シルトも含む）＋ローム2～3%、しまりやや甘い～ややあり
72ｂ　やや粘質の暗褐色土主体＋ローム2%＋極暗褐色土粒子1%＋砂礫1%
73　暗褐（～暗灰褐色）土＋ローム5%＋八女粘土わずか＋炭粒若干＋砂礫わずか、しまりやや甘い
74　暗褐色土＋ローム粒子3%＋砂礫若干＋極暗褐色土粒子1～2%、しまりあり
75　やや赤みのある暗褐色土（84層の上、一連の層か）＋炭粒１%＋ローム粒子3～5%＋八女粘土1～2%＋砂礫若干、しまりややあり～あり、粘性あり、76層とも一連か
76　暗褐～暗灰褐色土＋炭粒２%＋ロームブロック・粒子3～5%＋八女粘土1～2%、しまりややあり、粘性あり
77　暗褐～暗灰褐色粘質土＋炭粒1～2%＋砂礫わずか＋ローム２%＋八女粘土1%以下、78層より混じり少ない、しまりややあり～やや甘い、粘性あり
78　暗灰褐～暗褐色粘質土＋ローム３%＋八女粘土１%＋炭粒１%、全体に粘質土層（やや砂質のシルトも少し含む）、混じり少ない、しまりややあり
79　暗褐色～赤みのある褐～暗褐色土（粘質シルト＋砂質シルト混合）＋暗灰褐色土ややあり＋砂礫含む＋ロームブロック・粒子5%＋八女粘土ブロック・粒子5%＋砂礫あり１%、しまりやや甘い、76～79は一連の層群
80　暗褐色～赤みのあるやや暗い褐色土＋八女粘土小ブロック・粒子10%＋ローム小ブロック・粒子５%＋炭粒わずか、しまりややあり～やや甘い、上からの掘り込みの土層
81　（やや赤みのある）暗褐～暗灰褐色粘質・砂質（シルト質）混合土＋ロームブロック・粒子5%＋八女粘土わずか＋砂礫あり＋酸化マンガン沈殿影響茶褐色～暗茶褐色土含む＋炭粒あり
82　下の95層に近い、暗灰褐色粘質土＋八女粘土混入斑状5～７%、しまり甘い、下辺によどみのある土層
83　（赤みのある）暗褐色土＋炭粒若干＋砂礫若干＋ローム粒子3%＋八女粘土わずか、しまりあり
84　暗褐～暗灰褐色土＋ローム小ブロック・粒子7%＋炭粒1%＋砂礫あり
85　褐色気味暗褐～暗灰褐色土＋ローム10%＋八女粘土1～2%、しまりやや甘い～ややあり
86　87層とほぼ同じだがより粘土質、暗灰褐色粘質土＋八女粘土5%＋ローム2%＋炭粒あり
87　86層とほぼ同じだが87層がやや暗い、暗褐色粘質シルト＋八女粘土小ブロック・粒子3%＋ローム小ブロック・粒子２%＋砂礫ややあり、しまりやや甘い
88　暗褐～暗灰褐色粘質土（暗褐色気味・下半部暗灰褐色気味）＋八女粘土小ブロック・粒子5%斜めに入る＋黒い極暗褐色土ブロック少し＋ローム粒子2～3%、しまりやや甘い、上半部しまりややあり
89　90層に近いがやや明るい、褐色（～暗褐色）土＋ローム3%＋八女粘土1%、しまりややあり～あり、粘性ややあり
90　褐～暗褐色土＋ローム小ブロック・粒子3%＋八女粘土小ブロック・粒子3～5%、しまりややあり、粘性ややあり
91　暗褐色粘質土＋八女粘土小ブロック・粒子7%＋ロームわずか＋砂礫わずか、しまりやや甘い、92層とは漸移的
92　暗灰褐色粘質土主体＋八女粘土ブロック・炭粒など斜めに入る自然堆積＋茶褐色土（酸化マンガン影響土か）斑状20%、しまりややあり、粘性あり
93　酸化マンガン沈殿影響？茶褐色土（本来褐色土か）斑状に入る暗灰褐色粘質土＋ロームブロック・粒子5%＋八女粘土ブロック・粒子1～2%、粘性あり、93層より上部は94層以下と異なる層群
94　暗灰褐色土＋八女粘土混合、82・101層に近い
95　八女粘土ブロック主体層＋暗褐色・暗褐灰色の汚れ、しまりややあり、粘性あり
96　暗褐色粘質土＋八女粘土ブロック10%、非常にしまり甘い
97　100層（暗褐灰色粘質土＋八女粘土15%ほか）にほぼ似るがしまり甘い、上から入ってくる層で奥がすぼまる、98層と漸移的、非常にしまり甘い
98　100層に似るがローム土含む、暗褐灰色粘質土＋八女粘土10（～15）%＋ローム10%、しまり甘い
99　暗褐～暗灰褐色粘土層＋八女粘土10%＋ローム５%、非常にしまりの甘い土層
100　暗褐灰色粘質土＋八女粘土ブロック15%＋褐色～明褐色土ブロック10%＋暗褐色土ブロック５%＋酸化マンガン影響茶褐色土10%、混合層　しまりややあり～やや甘い
101　暗灰色～やや青みある暗灰褐色粘質土＋ローム粒子わずか＋八女粘土小ブロック・粒子わずか、しまりやや甘い、ほぼ粘土層
102　暗褐～暗褐灰色やや粘質シルト＋炭粒1%＋八女粘土粒子5%＋ローム粒子1～2%＋　極暗褐色土粒子1～2%、しまりやや甘い、粘性あり
103　101層似たやや青っぽい暗灰～暗褐灰色粘土層＋八女粘土ブロック10%以上＋酸化マンガン沈殿影響茶褐色土（元々ローム土か）斑状10%、しまりややあり～やや甘い、最下層

橋を挟んだ104次SD01について見ておく（Fig.25；福岡市埋蔵文化財年報VOL.19）。104次SD01は、最大幅265㎝で、報告の土層断面Ａ―Ａ’部分では底面の標高が7.55ｍとする。ただし、104次SD02と重複する170次SD101-０区の底面は7.35ｍで、20㎝も高い。陸橋に向かって底面が立ち上がってくるとはいえ、周溝幅がまだ大きい部分でのこの底面高は疑わしい。土層を見ると底面張り付きで暗褐色土が最下層覆土としてあるが、170次SD101の最下層の多くは地山ローム混じりの褐色土であった。この最下層は認識を誤ると地山が汚れているものとして把握することもあるので、実際104次SD02に重複するSD101-０区も最下層の掘削が5cm前後は不足していたので、104次の土層断面Ａ―Ａ’部分は若干の掘削不足があったものと推定する。一方、幅155～220㎝の陸橋を挟んだ104次SD01の周溝幅は260㎝以上、断面Ｂ－Ｂ’、Ｃ－Ｃ’からみた底面高は標高7.23～7.25ｍである。こちらは最下層が「明褐色土」であること、170次SD101の周溝底面の低い箇所に近いので、問題ないと思われる。

さて方形周溝墓の復元であるが、推測の部分が多いが、104次の陸橋が方形周溝墓の中軸線を通ると仮定した場合、104次・170次での遺構遺存レベルでの周溝内側の規模は約14.5ｍ前後、周溝内側下端間は約16.8ｍ、周溝外側での規模は約19.3ｍ前後となろう（Fig.26）。なお、周囲遺構の遺存度から見ると、周溝墓中央にあるべき主体部は、仮にその底面が当時の地表面以下に及んでいたとしても、削平されている可能性が高く、また主体部はおそらく墳丘盛土の中に営まれたものと推定される。

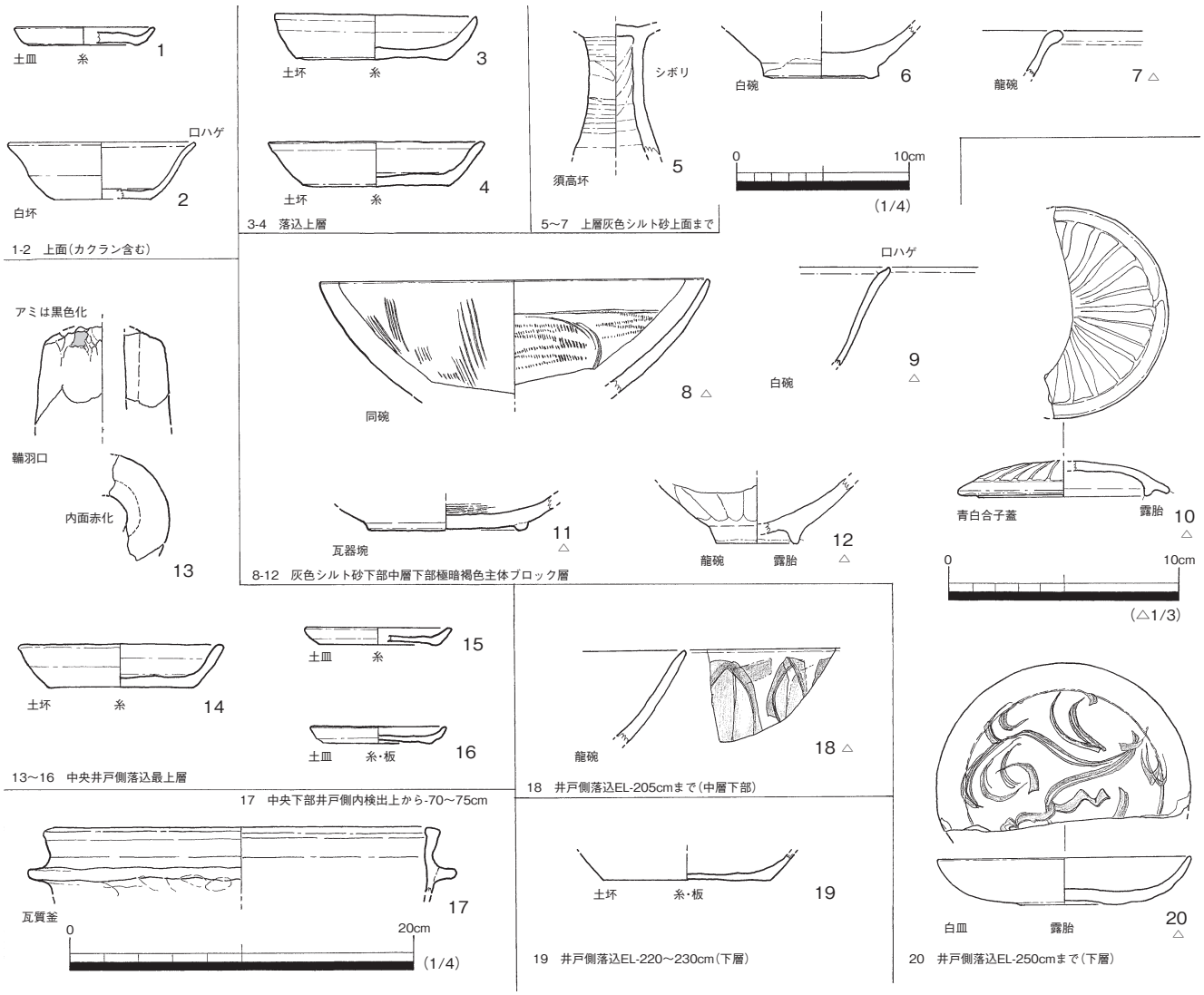


Fig.28　SE01出土遺物（1）実測図（1/4、△1/3）

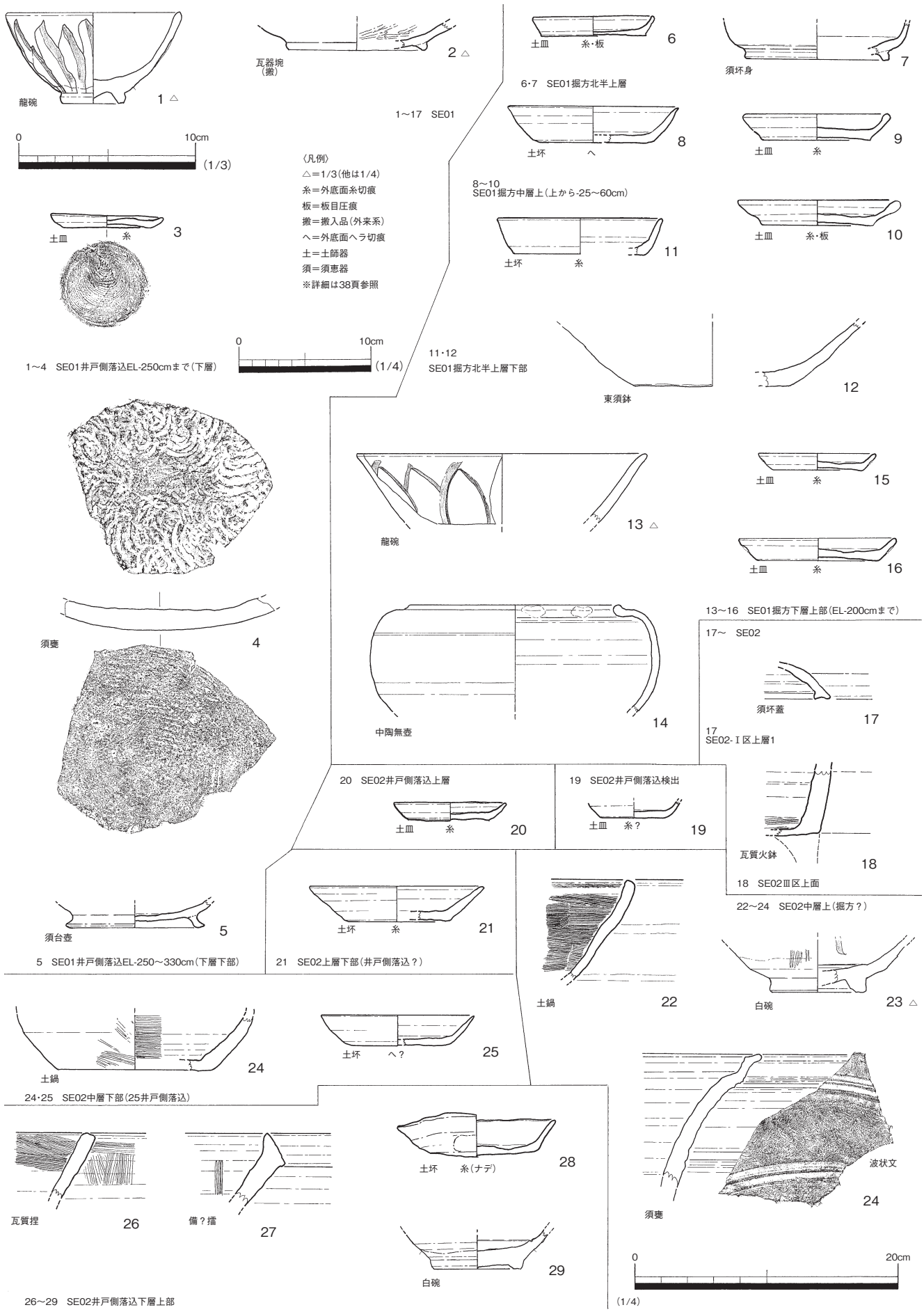


Fig.29　SE01出土遺物（2）、SE02出土遺物（1）実測図（1/4、△1/3）

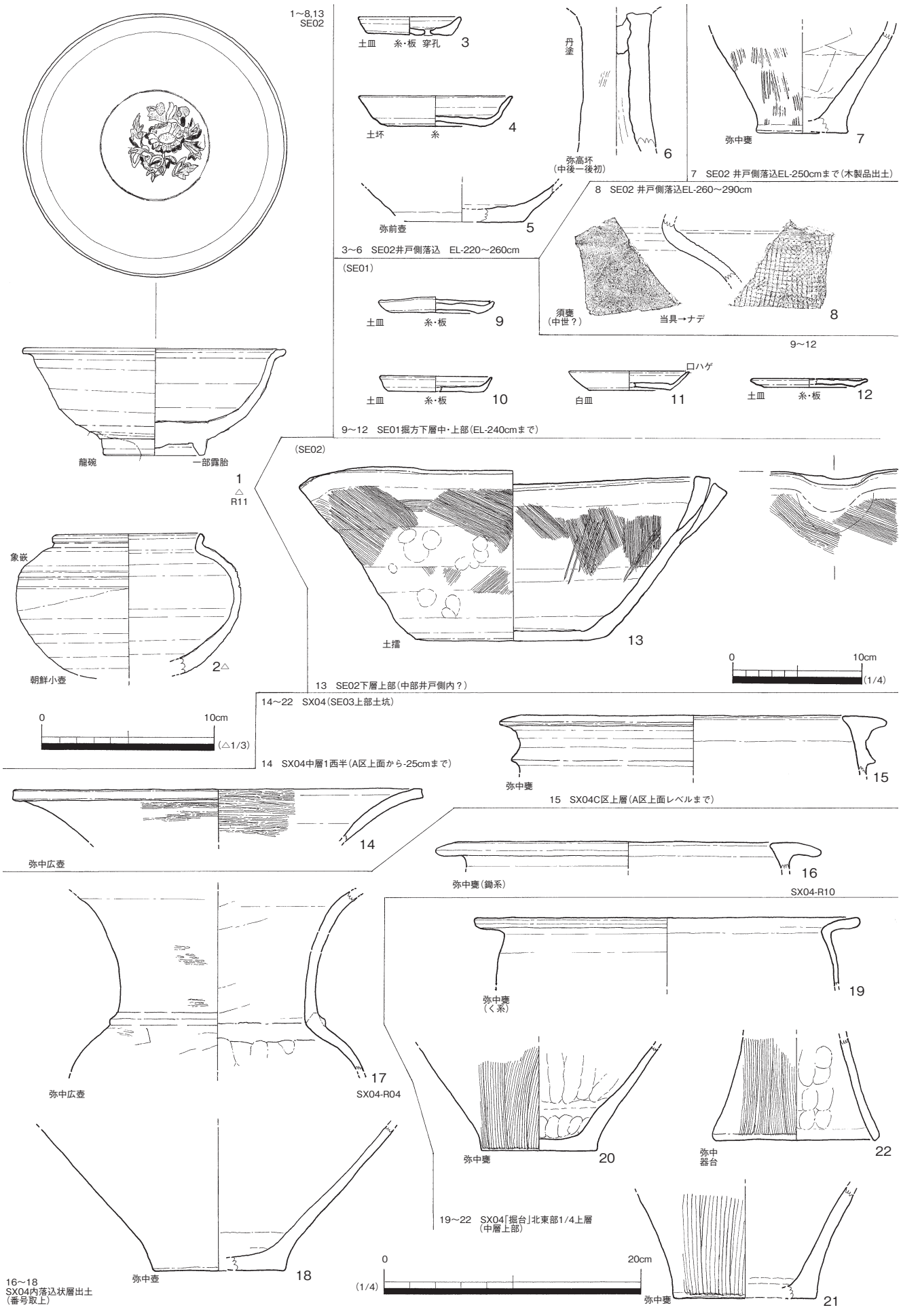


Fig.30　SE01出土遺物（3）、SE02出土遺物（2）、SX04出土遺物（1）実測図（1/4、△1/3）

・SD102（Fig.27、巻頭図版４-5～7、PL.4-5～8）

Ⅱ区北半で検出した幅広い大溝遺構。方位は、N-84° -Eで、およそ東西に走行する。溝の幅は、残りの良い西側で410～416㎝、残りの悪い中央部で310～320㎝、再び広がる東側で330～375㎝前後である。発掘調査前半の調査区Ⅰ区で、多数の井戸で苦戦した後の反転掘削でこの大溝が検出されたのだが、調査期間を若干延長しても全掘削できないことが明らかだったため、この溝については**全掘せず、部分的な掘削**でとどめ、他は**地下に現状保存**としている。溝は、当初掘られた幅の広い大溝**SD102a**と、それがほぼ埋没した後に南縁に細く再掘削された**SD102b**に分かれる。SD102は調査区内を横切り、確認長9.4ｍと長いので、Ⅰ～Ⅵ区に分けて掘削、遺物取り上げをしている。**SD102a**の断面形は、およそ逆台形に近いが、中央部のみ細くU字状に底面がさらに掘削されている。中央で深くなるU字状部分は、土層の観察によると、当初逆台形状に掘削された溝があり、その最下層のみが埋没した時点で掘削されている。U字状溝部分と逆台形最下層部分は水流の痕跡があるので、水を流すために中央を掘り凹めた可能性があるが、U字状部分の底面レベルは必ずしも一方向に傾いていない。U字状部分の底面標高を以下記すと、Ⅱ区東6.43m、Ⅱ区西6.32m、Ⅴ区東6.38m、Ⅴ区西6.40ｍであり、未掘削のⅢ区下部あたりが最も深いと思われる。同様に、逆台形底面のレベルは、Ⅱ区東6.65m、Ⅱ区西6.45m、Ⅴ区は6.60m前後である。いずれも一定していない。SD102aは、溝の西側で北側立ち上がりの一部がテラス状となっている。このレベルは、Ⅴ区で7.00～7.08m前後、Ⅵ区で7.22～7.25m前後で、これは西側が高くなりより水平になる。**SD102b**は、溝の中央部（Ⅱ区途中～Ⅴ区）では、重複に気が付かず一気に掘削してしまったので溝幅が明らかでないが（ただしⅠ区からⅡ区の傾向を見ると、中央部の溝幅はやや狭くなっていて、Ⅴ区は90㎝幅程度のようである）、Ⅰ区東で105㎝、Ⅱ区東で80㎝、、Ⅵ区東は120㎝（Ⅴ区から急に広がるか）、Ⅵ区西は100㎝である。底面レベルは、Ⅰ区で7.14～7.16m、Ⅱ区東で7.14m、Ⅱ区西で7.18m、Ⅲ区中央で7.10～7.07m、Ⅳ区は7.11～7.16m、Ⅴ区東半～中央で7.17～7.20m、Ⅴ区西で7.04m、Ⅵ区中央で7.08m、Ⅵ区西で7.11ｍである。遺物の出土は、SD102aは全体に散漫だが比較的多量の遺物が出土している。ただし遺存度が良好なものは少なく、遺構の時期は新相遺物から中世後半以降だが、弥生時代、古墳時代、古代、中世前半の各時期の土器・陶磁器片が混入する。SD102bはより散漫な遺物の出土で、出土量も比較的少なかった。溝の時期は出土遺物（Fig.42）の最新相から、15～16世紀であろう。

Ⅲ．出土遺物

１．土器・陶磁器（Fig.28～43、48）

出土遺物については、以下紙幅もあまりないため、詳しい説明記述ができない。そのため、挿図中に各遺物の出土遺構や遺構の中の区・層位・取上番号などを記入しただけでなく、以下（38頁）の**＜凡例＞**にあるように、基本的な遺物の種類（器種分類を含む）や、時代・時期、一部の調整や技法について**略号**などで注記している。また遺物の説明については、すでに「検出遺構」の章で記述している場合もある。また各時代の土器や陶磁器の分類や編年などについては、**＜凡例＞**に続いて**参考文献リスト**を掲載した。

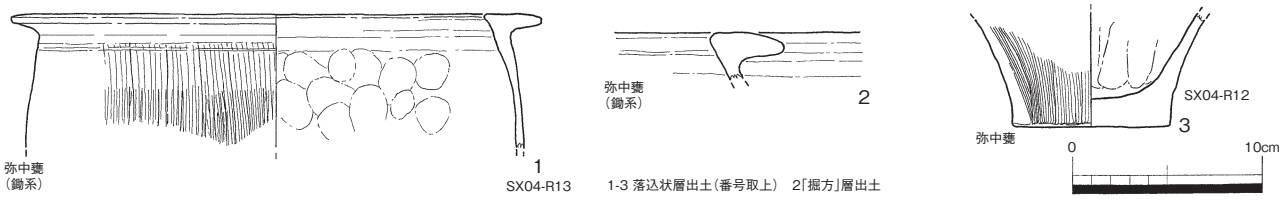


Fig.31　SX04出土遺物（2）実測図（1/4）

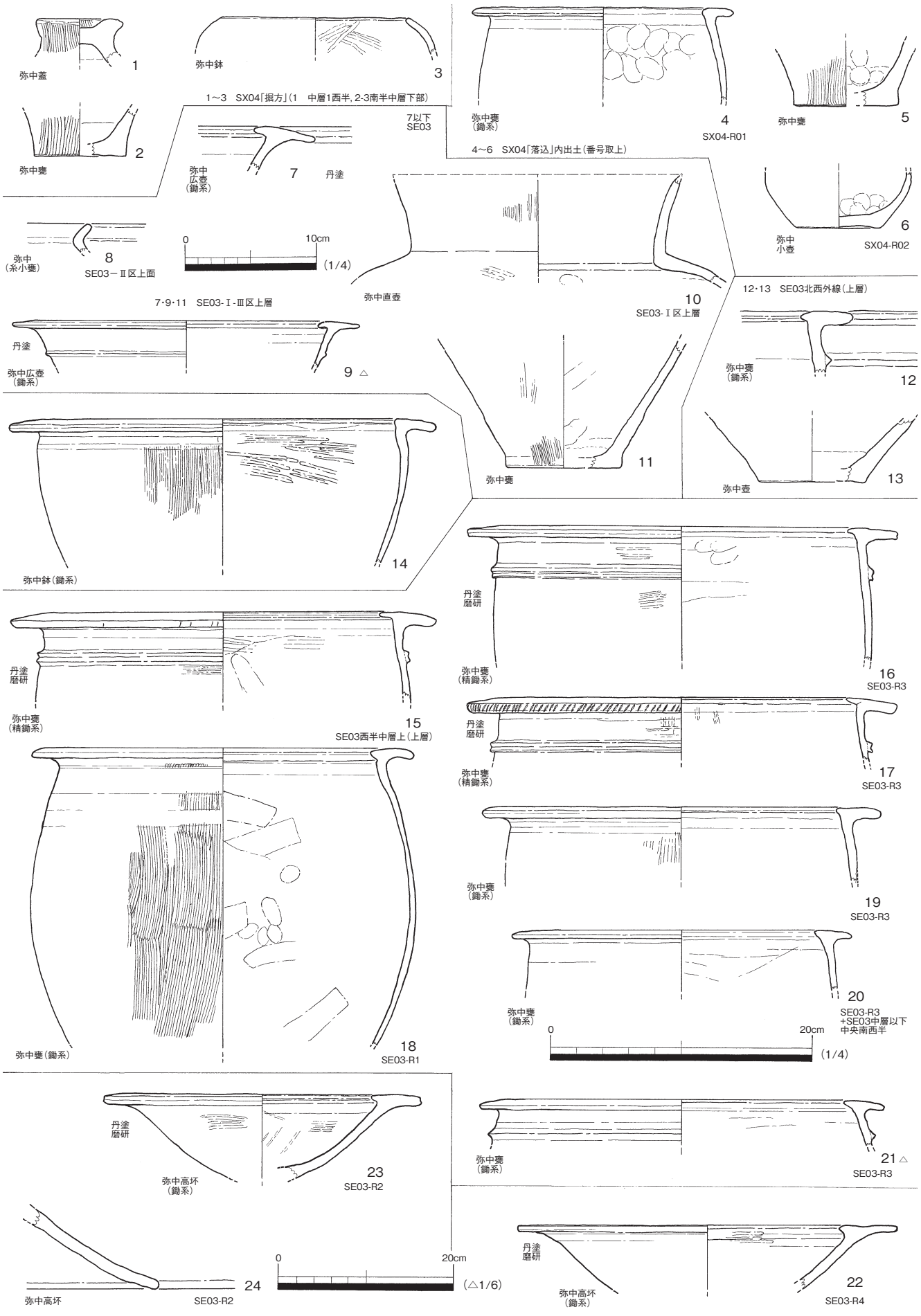


Fig.32　SX04出土遺物（3）、SE03出土遺物（1）実測図（1/4、△1/6）

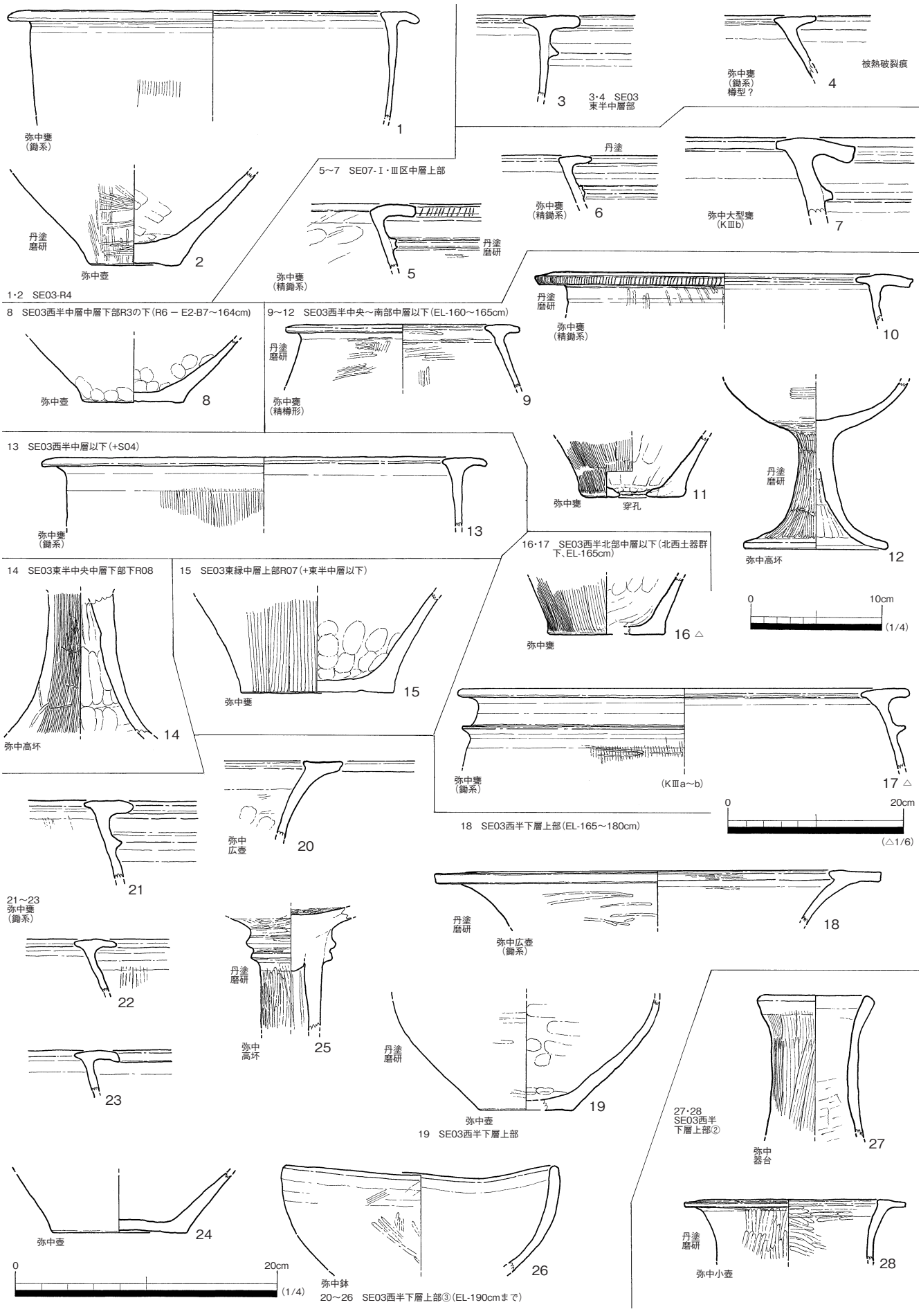


Fig.33　SE03出土遺物（2）実測図（1/4、△1/6）

＜凡例＞（Fig.28 ～ 43）

「土」＝土師器、「須」＝須恵器、「弥」＝弥生土器、「古土」＝古式土師器（古墳時代初頭～古墳時代中期前葉＝須恵器出現前までの土師器）、「白」＝白磁、「龍」＝龍泉窯系青磁、「同」＝同安窯系青磁、「青白」＝青白磁、「朝鮮」＝朝鮮陶磁、「瓦質」＝中近世の瓦質土器、「東」＝東播系（「東須」＝東播系須恵器）、「中陶」＝中国陶器、「陶」＝陶器、「瀬戸」＝瀬戸焼、「美濃」＝美濃焼、「備」＝備前焼、「赤焼」＝古墳時代後期～飛鳥時代のタタキ整形赤焼軟質土器またはロクロ整形「似非須恵土師器」、「搬」＝外来系搬入品

「弥早」＝弥生早期（土器）、「弥前」＝弥生前期（土器）、「弥中」＝弥生中期（土器）、「弥後」＝弥生後期（土器）、「弥末」＝弥生終末期（土器）、「古後」＝古墳後期、「飛」＝飛鳥時代、「奈」＝奈良時代、「前末」＝前期末、「中初」＝中期初頭、「中後」＝中期後半、「中末」＝中期末、「後初」＝後期初頭、「早～前」＝早期～前期、「中～後」＝中期～後期、「後～末」＝後期～終末期

「皿」＝皿・小皿、「坏」＝坏、「碗」＝陶磁器の椀、「埦」＝陶磁器以外の土器の椀、「無壺」＝無頸壺、「台壺」＝脚台付壺、「小壺」＝小型壺、「土鍋」＝土師器鍋、「土鉢」＝土師器鉢、「擂」＝擂鉢、「捏」＝捏鉢、「広壺」＝広口壺、「直壺」＝直口壺、「小鉢」＝小型鉢、「樽形」＝樽形甕、「脚鉢」＝脚付鉢、「甕鉢」＝甕形鉢、「ひさご」＝瓢形壺、「小台」＝小型器台、「二重」＝二重口縁壺、「長頸」＝長頸壺、「小長壺」＝小型長頸壺、「小脚鉢」＝小型脚付鉢、「小埦」＝小型埦、「埦高坏」＝埦状高坏、「袋壺」＝袋状口縁壺、「手焙」＝手焙り形土器、「短壺」＝短頸壺、「鼓台」＝鼓形器台、「小鼓台」＝小型鼓形器台、「複壺」＝複合口縁壺、「鋤系」＝鋤先口縁系、「く系」＝「く」字口縁系、「板系」＝板付系、「凸系」＝凸（突）帯文系（夜臼系）、「精」＝精製土器、、「糸」＝底部糸切痕、「へ」＝底部ヘラ切痕、「板」＝板目圧痕、

「ＫⅢａ」「ＫⅢｂ」など＝橋口 1979 による甕棺（大型甕）の分類と編年による型式名

「Ａ系」「Ｂ系」「Ｃ系」＝久住 1999・2017 による弥生終末期～古墳前期土器の系統分類名、「甕Ｂ」「甕Ｃｙ」「甕Ｄ」「甕Ｂ（Ｄ）」＝久住 1999 による古式土師器の甕の系統形式分類名（「甕Ｂ」＝Ｂ（伝統的Ｖ様式）系統甕、「甕Ｃｙ」＝筑前型庄内甕、「甕Ｄ」＝北部九州型Ｄ（布留式）系甕、「甕Ｂ（Ｄ）」＝Ｂ系統技法保持者によるＤ（布留式）系土器の模倣・折衷品）、「精Ｂ」＝精製器種Ｂ群（次山淳 1993 による古式土師器の特徴的な精製土器群の分類）

＜参考文献＞

田崎博之 1994「夜臼式土器から板付式土器へ」『牟田裕二君追悼論集』牟田裕二君追悼論集刊行会　※弥生時代早期～前期土器編年

橋口達也 1979「甕棺の編年的研究」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』ＸＸＸＩ、福岡県教育委員会　※弥生時代甕棺編年

田崎博之 1985（18頁前掲）　※弥生時代中期土器の系統と編年

柳田康雄 1986「高三潴式土器と西新町式土器」『弥生文化の研究』４、弥生土器Ⅱ、雄山閣　※弥生時代後期土器編年

久住猛雄 1999（10頁前掲）　※弥生時代終末期～古墳時代前期土器の土器群系統と編年

久住猛雄 2008「九州Ⅰ　付編　弥生時代中期中頃～終末期古相までの土器一括資料」『井戸再考』第57回埋蔵文化財研究集会資料集　※弥生時代中期中頃（須玖Ⅰ式新相）～ⅠＡ期（終末期古相；久住1999・2017）までの編年基準資料

久住猛雄 2017（10頁前掲）　※弥生時代終末期～古墳時代前期土器の土器群系統と編年

次山　淳 1993「布留式土器における精製土器の製作技術」『考古学研究』第40巻第4号、考古学研究会　※古式土師器の精製器種Ｂ群

申　敬澈 2000「金官加耶土器の編年―洛東江下流域　前期陶質土器の編年―」『伽耶考古学論叢』３、財団法人駕洛国史史蹟開発研究院（韓文）　※韓国加耶地域前期陶質土器編年

舟山良一 2008「（２）編年案」『牛頸窯跡群　総括報告書』大野城市教育委員会　※須恵器「牛頸編年」

長　直信 2009「九州島における７世紀の須恵器」『終末期古墳の再検討』第12回九州前方後円墳研究会発表資料集　※６・７世紀の北部九州の須恵器編年と暦年代観

中世土器研究会編 1995『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社

太宰府市教育委員会編 2000『太宰府条坊跡ＸＶ―陶磁器分類編―』太宰府市の文化財第49集　※古代・中世陶磁器「大宰府」分類

佐藤一郎 1996「輸入陶磁器の分類」『博多遺跡群出土墨書土器集成』博多研究会　※中世陶磁器「博多」分類

山本信夫 1990「統計上の土器―歴史時代土師器の編年研究によせて―」『九州上代文化論集』乙益重隆先生古稀記念論文集刊行会　※中世土師器（坏・皿類）編年

楠瀬慶太 2007「土師器食膳具から見た中世博多の土器様相―博多遺跡群の土器編年―」『九州考古学』第82号、九州考古学会　※中世土師器編年

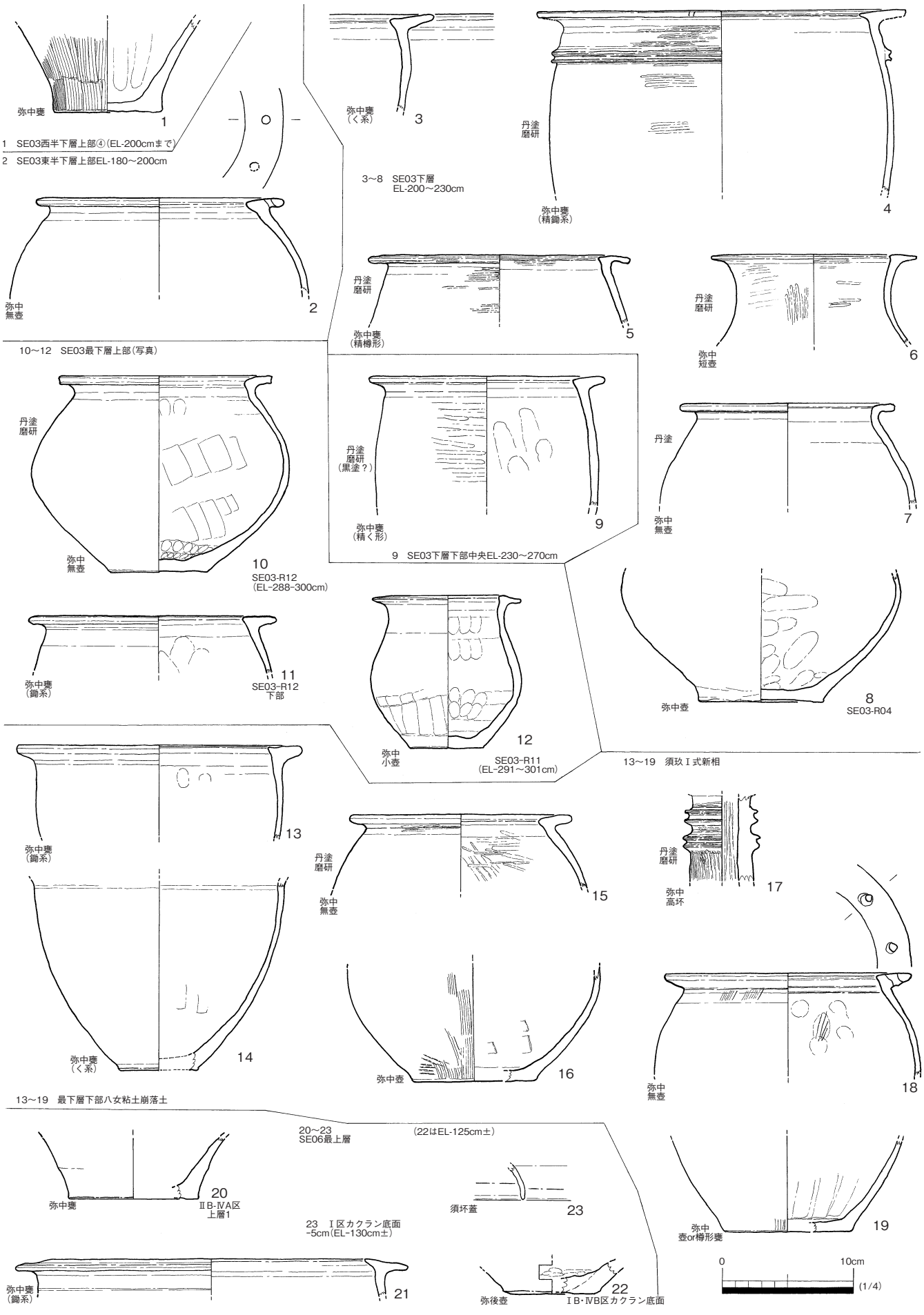


Fig.34　SE03出土遺物（3）、SE06出土遺物（1）実測図（1/4）

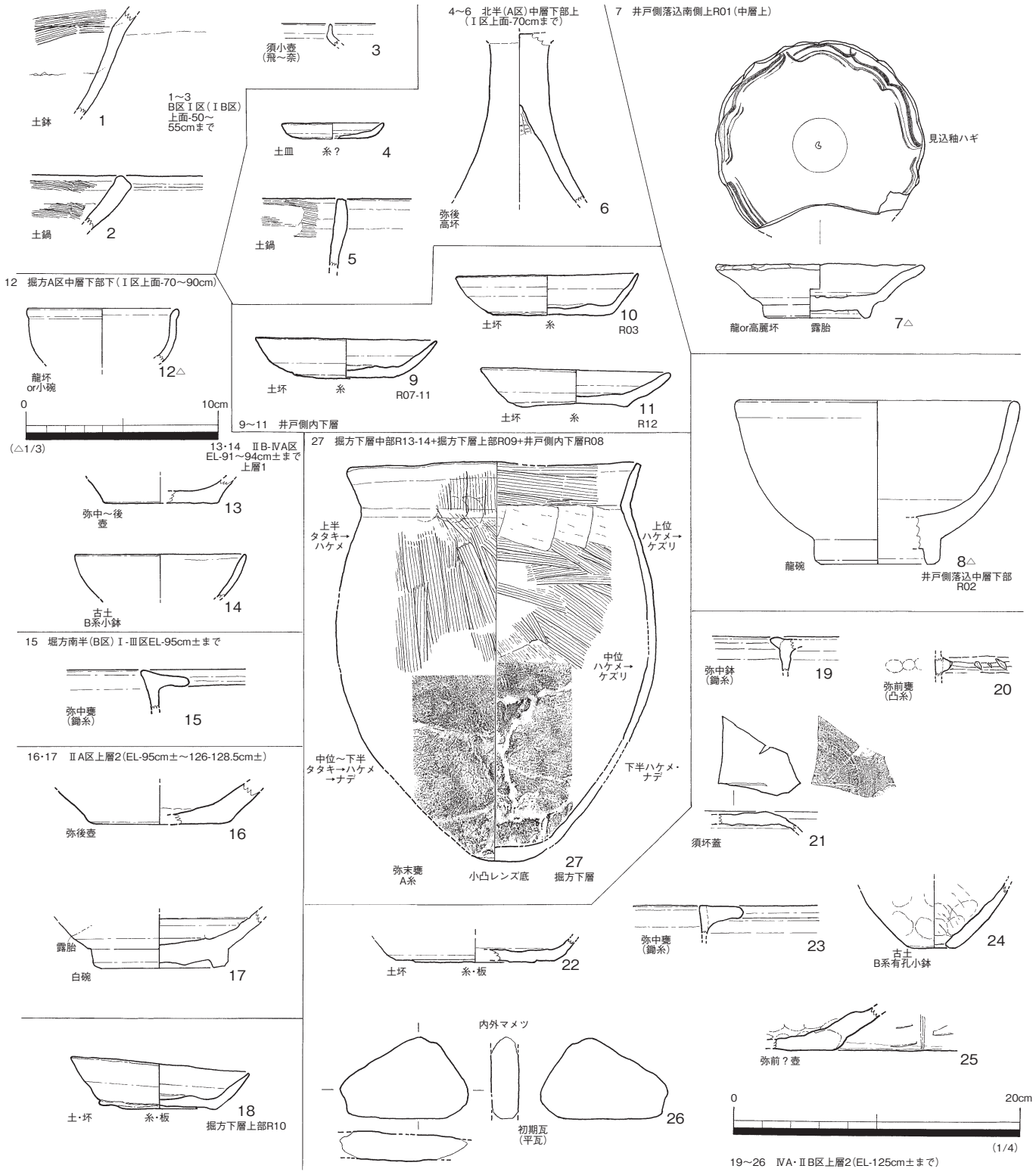


Fig.35　SE06出土遺物実測図（2）（1/4）

出土遺物については、特筆すべきものを先に記す。SE03最下層の須玖Ⅰ式新相の、SE03（最下層以外）およびSK04の須玖Ⅱ式古相の土器群は、それぞれ「一括資料」としてよい資料である。SK05の出土土器は破片だが、板付Ⅰ式新相の良好な資料である。SD101（方形周溝墓）のうち、0区北端～Ⅰ区の下層の資料は、ⅡA～ⅡB期が混在するが、墳墓祭祀供献土器群の良好な資料である。後代の遺構出土だが、「板石硯」破片がある（弥生中期後半か）。SE03には弥生中期の石製鍛冶具があり、後代の井戸に弥生終末期前後の石製鍛冶具もある。また韓半島系の軟質土器甕や陶質土器短頸壺があった。

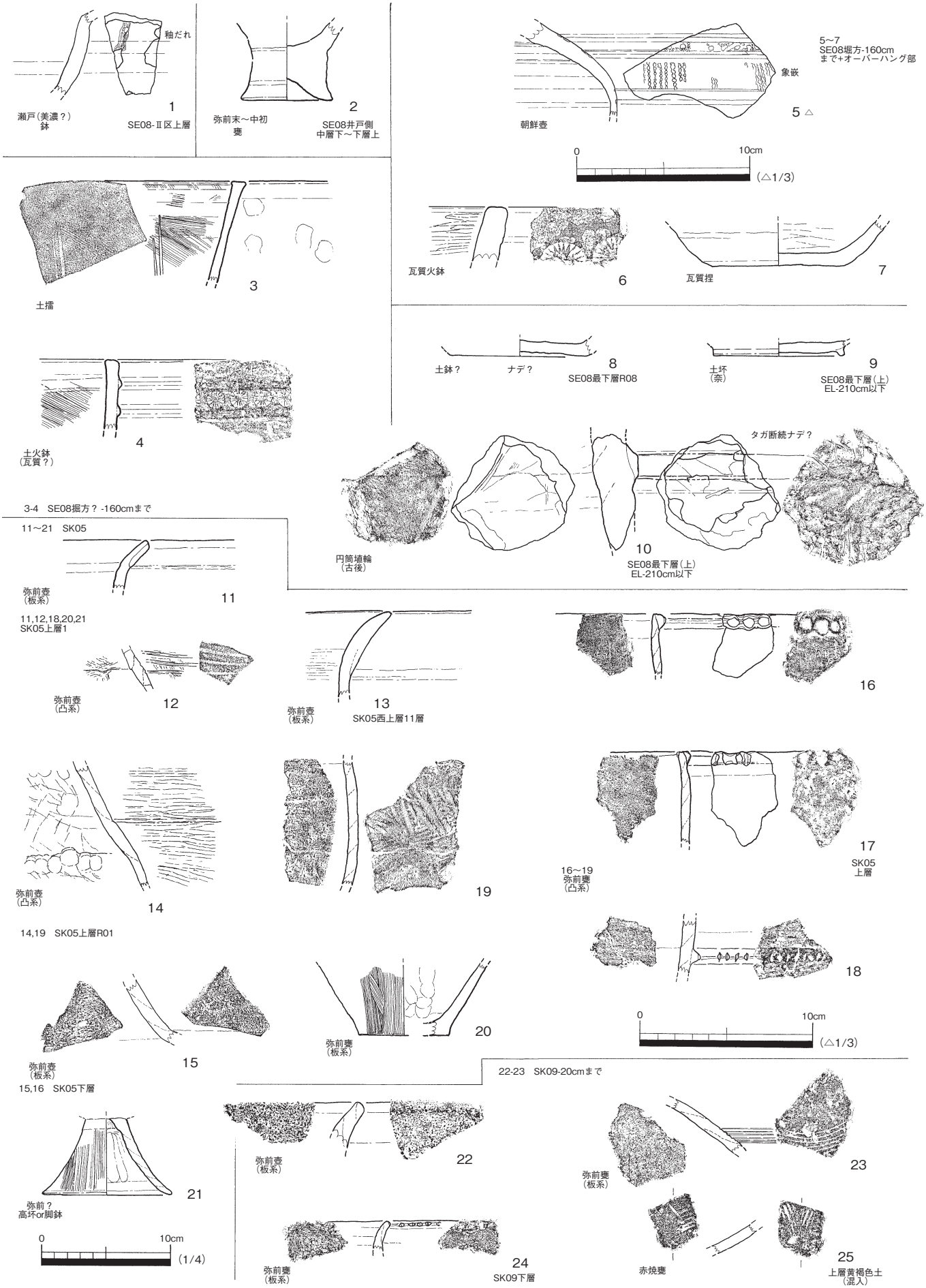


Fig.36　SE08出土遺物、SK005出土遺物、SK009出土遺物（1）実測図（1/4、△1/3）

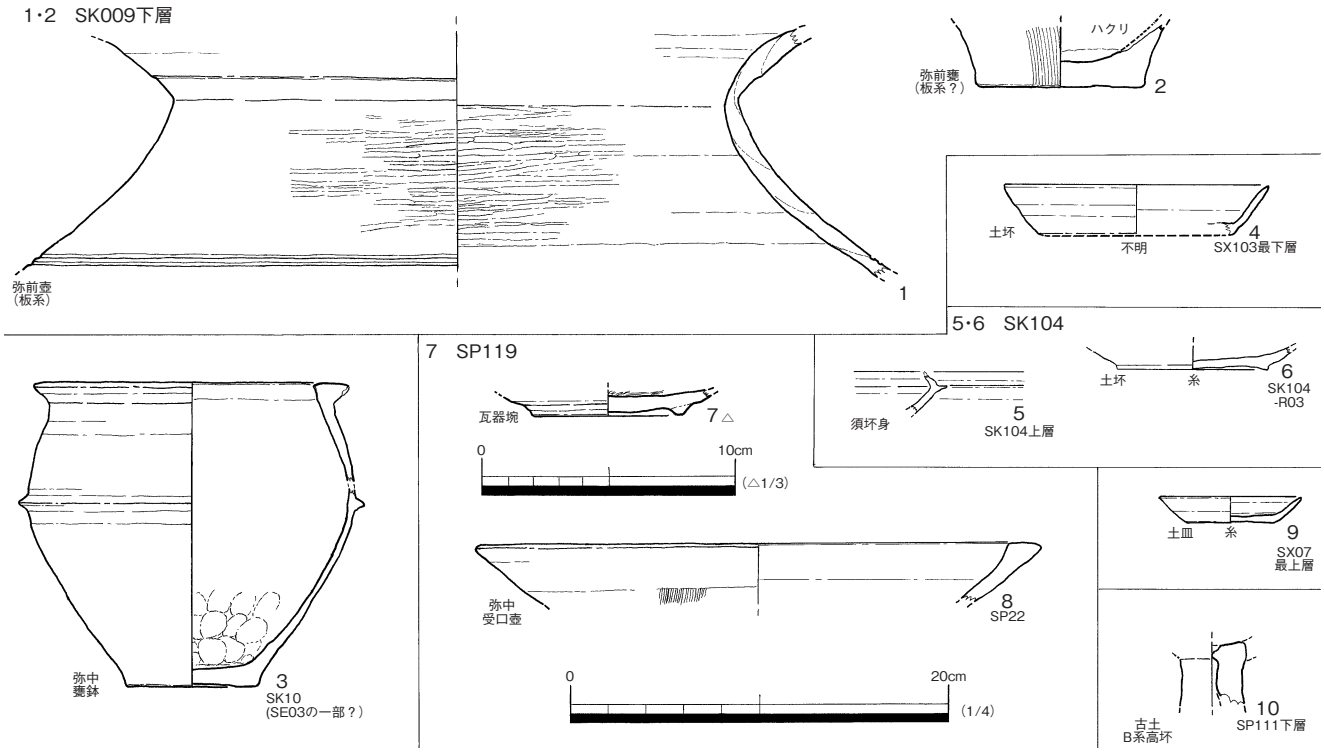


Fig.37　SK009 出土遺物(2)、その他土坑(SK・SX)出土遺物、ピット(SP)出土遺物実測図(1/4、△ 1/3)

前掲（38頁）の＜凡例＞により、図示した土器・陶磁器の説明は簡潔に果たしたものとするが、以下、特に触れるべきものについてさらに説明記述しておく。

（Fig.28）12の龍泉窯系青磁は大宰府分類（以下「大」）碗Ⅲ-2c。13の龍泉窯系は博多分類（以下「博」）碗Ⅱ-1。20の白磁は、「大」Ⅲ類か。（Fig.29）1の龍泉窯系は「博」碗Ⅲ。14の龍泉窯系は「博」碗Ⅱ-2。25の須恵器大甕は頸部波状文から須恵器Ⅲ B 期（舟山2008）。（Fig.30）1の龍泉窯系は「博」碗Ⅳ。2の朝鮮陶磁は、青緑の地に白い象嵌のある磁器。高麗末期の可能性もある。7の弥生土器甕は須玖Ⅰ式新相。14～22（およびFig.31、Fig.32-1,2）の弥生土器（SK04）は、須玖Ⅱ式古相だが、15やFig.31-1などは須玖Ⅰ式新相の様相を残す。（Fig.33）3～26の弥生土器（SE03）は、おおむね須玖Ⅱ式古相の幅内でよいが、4,6,18,20,21は須玖Ⅰ式新相の様相を残す。逆に7の大甕（甕棺か）は、KⅢb式（橋口1979）であり、須玖Ⅱ式新相に伴う場合が多いもの。26の鉢も粗製化の兆しがあり新相傾向。（Fig.34）1～12の弥生土器（SE03）も須玖Ⅱ式古相でよいが、3,7,9,10,11はやや古相の傾向がある。ただし7,9,10は丹塗磨研である。12は逆に粗製化しつつある小型壺で新相傾向。13～19は、15,17のような丹塗磨研土器を含むが、13の甕や15,18の口縁部など型式学的に古く、須玖Ⅰ式新相（末）とすべきか。（Fig.35）6の弥生土器高坏は、後期中頃前後か。7の青磁は、龍泉系に形式は似るが、内底見込みの釉ハギや高台は高麗青磁的、深緑の発色は越州窯系青磁的で、分類不明。8の龍泉窯系は「博」碗Ⅴ-2。24は内面左上ケズリ痕跡があり古墳初頭以降。27の弥生終末期の在来系甕は、内面ハケメ後一部ケズリだが、明瞭なヘラケズリではなくⅠB期（久住1999･2017）までのもの。29の瓦は、調整が磨滅するが橙色の軟質焼成で、那珂遺跡群に多い「初期瓦」。（Fig.36）1の朝鮮陶磁は、青緑の地に白い象嵌のある磁器。紋様が粉青沙器と似るが、色が逆。10は円筒埴輪片とみられ、窖窯焼成、浅黄褐色、突帯に「断続ナデ技法」がある。那珂遺跡群にある東光寺剣塚古墳の埴輪に類似するものがある。11～21のSK05の資料は一括資料に準ずるもの。壺5点のうち4点が板付系（11,13～15）、12は夜臼系。甕5点のうち4点（16～19）が夜臼系、20は板付系。21の高坏ないし脚付鉢は粘土帯接合から夜臼系。板付Ⅰ式新段階（田崎1994）だろう。22～24（25は上部混入）、およ

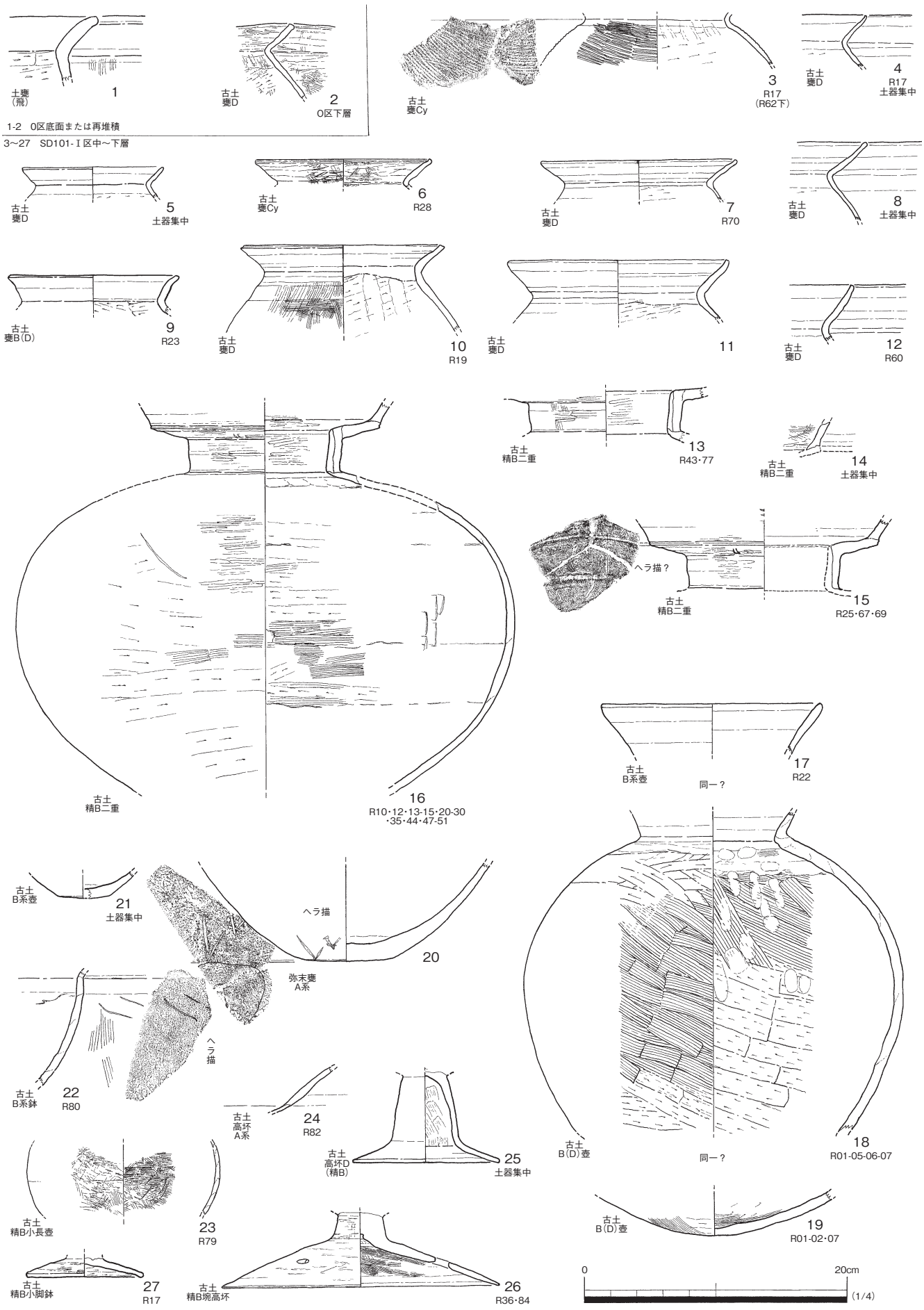


Fig.38　SD101（方形周溝墓）出土遺物（1）実測図＜0区、Ⅰ区（1）＞（1/4）

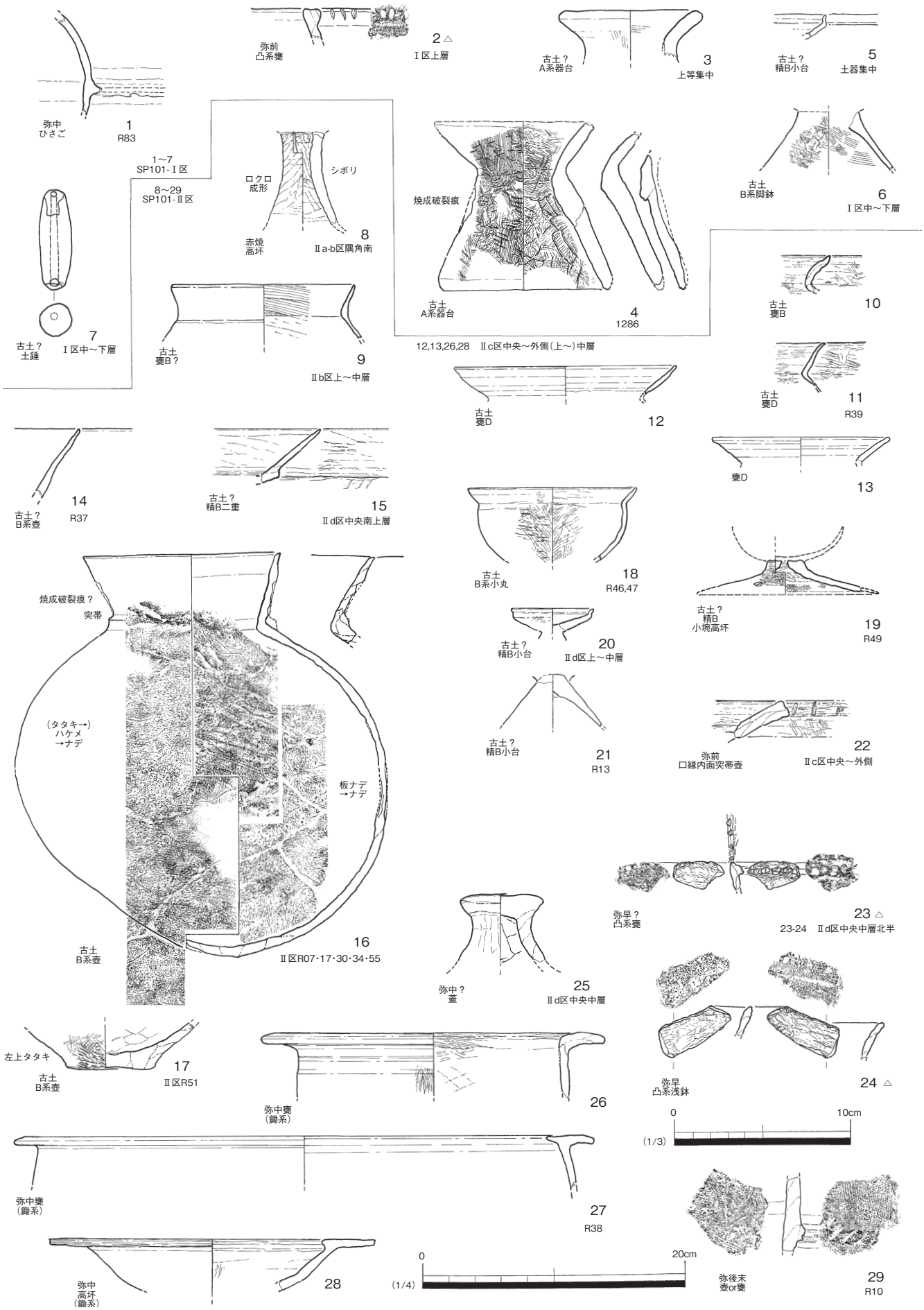


Fig.39　SD101（方形周溝墓）出土遺物（2）実測図＜Ⅰ区（2）、Ⅱ区（1）＞（1/4、△1/3）

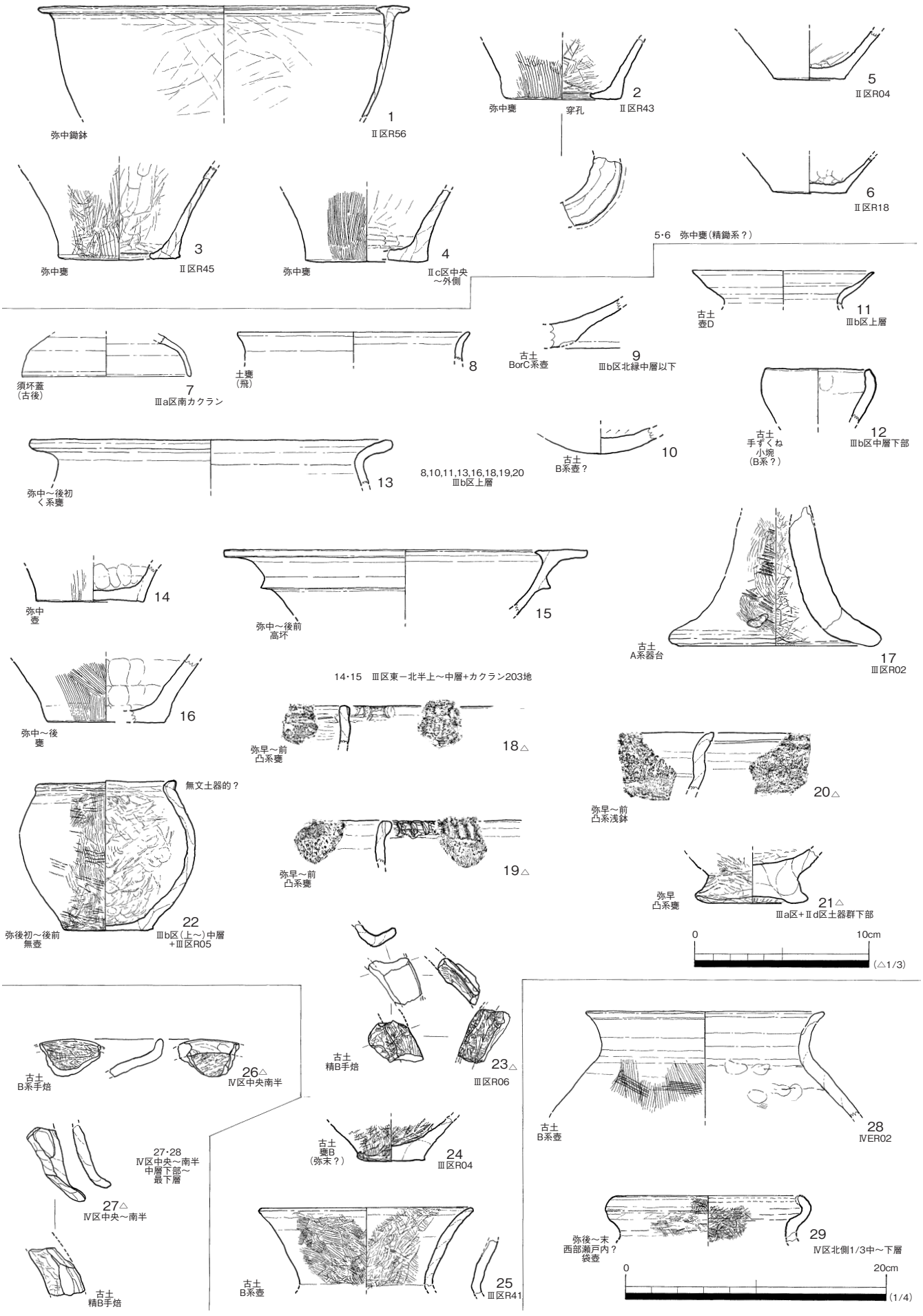


Fig.40　SD101（方形周溝墓）出土遺物（3）実測図＜Ⅱ区（2）、Ⅲ区（1）、Ⅳ区（1）＞（1/4、△1/3）

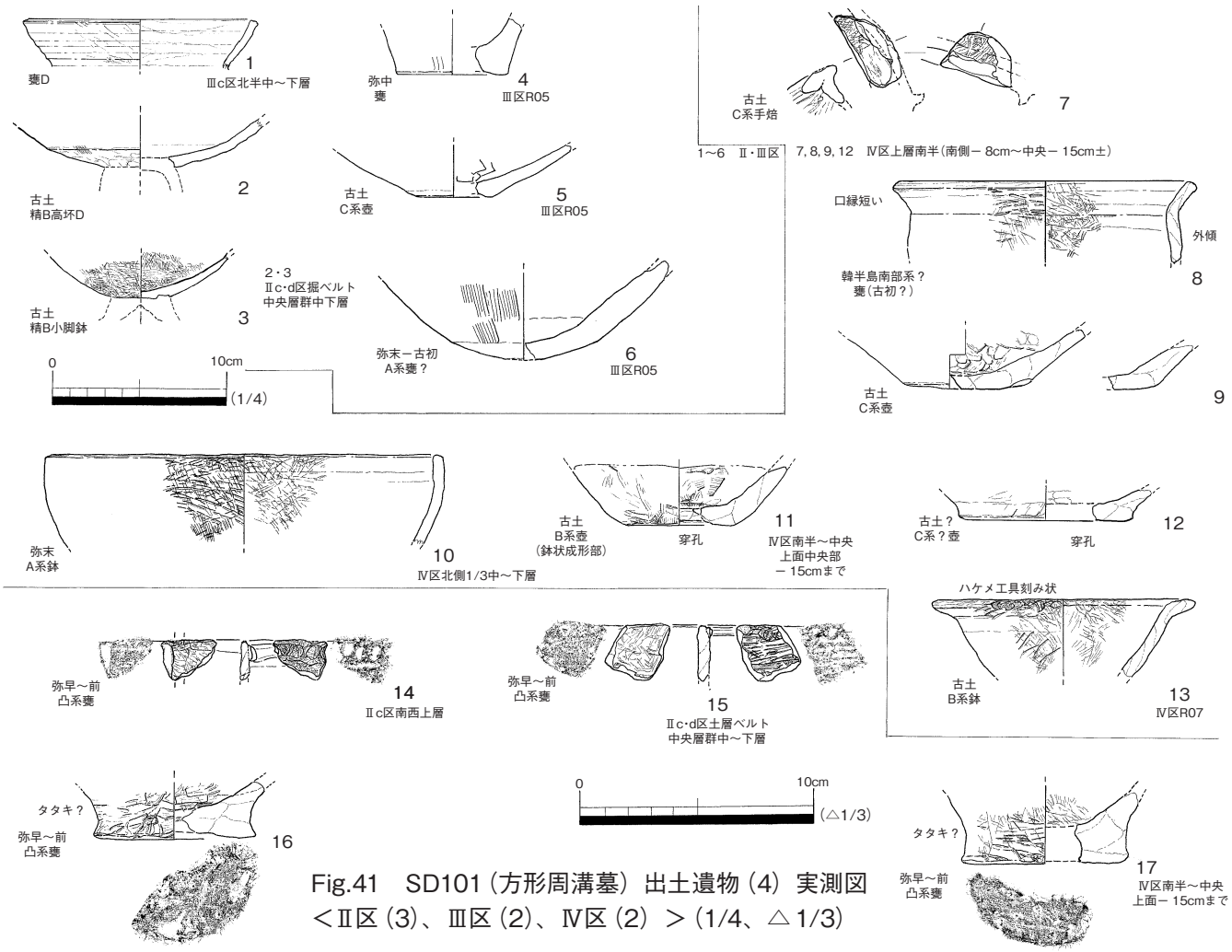


Fig.41　SD101（方形周溝墓）出土遺物（4）実測図
＜Ⅱ区（3）、Ⅲ区（2）、Ⅳ区（2）＞（1/4、△1/3）

びFig.37-1.2（SK09）は、板付Ⅱ式古段階（板付Ⅱａ式）。本資料では壺・甕類が全て板付系となる。（Fig.37）3の弥生土器は、須玖Ⅰ式新相の甕形鉢か。8は受口状になる口縁部の弥生土器。類例は少ないが、須玖Ⅱ式の広口壺または高坏であろう。（Fig.38）Fig.41まで方形周溝墓SD101土器群。3,6は筑前型庄内甕Ⅱ式（久住2017）でⅡＡ期か。甕Ｄ（北部九州型布留系甕）は、あくまで型式学的な傾向で前後があるが、4,5,7,8,11はⅡＡ期、2,10,12はⅡＢ期。13～16およびFig.40-15は胎土に粗砂礫をやや含むが、橙色焼成、細密ヨコミガキの精製器種Ｂ群的二重口縁壺。頸部が太く短い傾向からⅡＢ期。20は弥生終末期（ⅠＡ期）の在来系甕。底部近くにヘラ描き。23,25～27は精製器種Ｂ群。25,26の高坏は脚裾部が高くⅡＡ期か。24の在来系高坏は型式学的にⅡＡ期に下る。（Fig.39）4の在来系器台は焼成破裂痕があるが使用している。3,4およびFig.40-17のように在来系器台が複数ある。甕Ｄのうち、12はⅡＡ期、13はⅡＢ期か。9～11,Fig.39-9のようにＢ系甕もあるが、むしろⅡＢ期に下る型式。18は粗製のＢ系小型鉢。16のＢ系壺は焼成破裂痕があるが、4と同様に使用している。供献壺のうち広口壺・直口壺はＢ系（14,16、Fig.40-25,28）、二重口縁壺はＣ系（類精製器種Ｂ群）の傾向か。時期差か機能差か不明。2,22～24およびFig.40-18～21、Fig.41-14～17のように弥生早期（夜臼Ⅱ式）～弥生前期前半（板付Ⅱａ式まで）の土器群がある。また1,25?,26～28,Fig.40-1～6,13～16,Fig.41-4のように須玖Ⅱ式～弥生後期１式の土器群もある。8,Fig.40-7,8のように古墳後期～飛鳥時代の土器も散見されるが、これらは上層や攪乱出土。（Fig.40）29はおそらく西部瀬戸内系とみられる袋状口縁壺。弥生後期か。23,26,27,Fig.41-7は手焙り形土器。小片化すると認識が難しいだけで、珍しい器種ではない。技法系統も多様。11の甕ＤはⅡＢ期。（Fig.41）6の在来系甕は丸底でSD101の時期に伴う可能

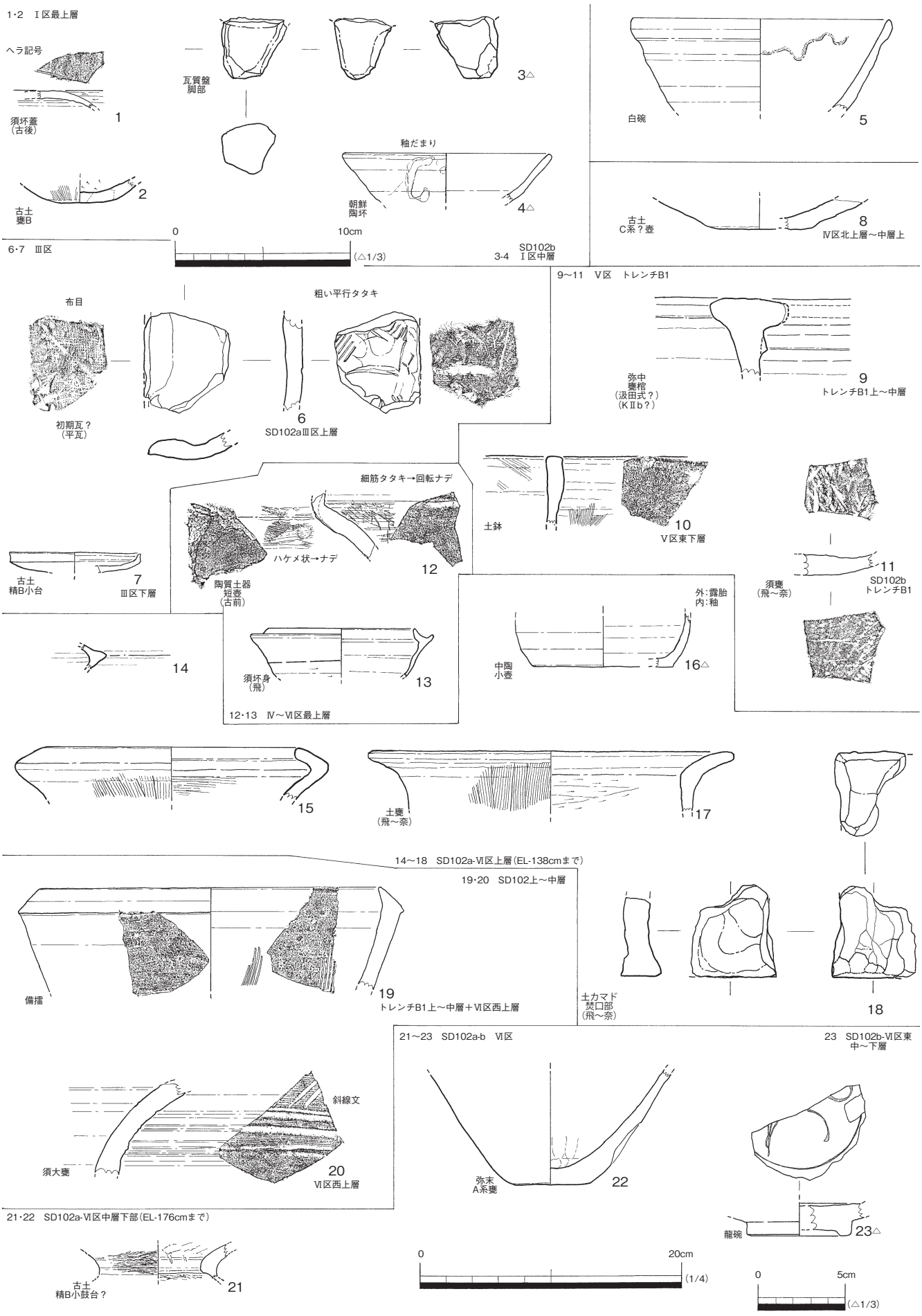


Fig.42　SD102出土遺物実測図（1/4、△1/3）

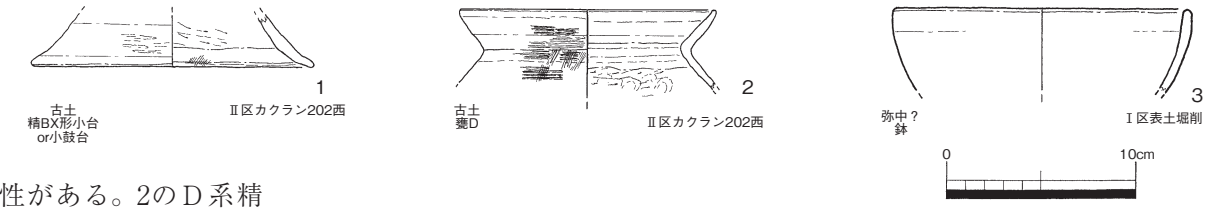


Fig.43　攪乱、表土掘削時出土遺物実測図（1/4）

性がある。2のＤ系精製器種Ｂ群高坏は、坏部上下が曖昧なのでⅡＣ期以降か。1の甕ＤはⅢＡ期古相に下る。ⅢＡ期古相の土器がSD102などⅡ区で散見され（Fig.42-21,Fig.43-1,2）、Fig.40-28も下る可能性がある。**SD101外縁の再掘削時期**を示すか。8の甕は一見北部九州の弥生終末期在来系甕に類似するが、口縁部が短く、また胴部が外傾接合で、韓国東南部の軟質土器甕だろう。類例は釜山市東萊貝塚などにある。ⅡＡ期～ⅡＢ期併行。（Fig.42）4の朝鮮陶磁は、雑釉陶器で16世紀。6は粗いタタキがあり、「初期瓦」でも新相か。12は韓国の金官加耶の陶質土器短頸壺で、肩部形態から古相の時期（金官加耶Ⅰ～Ⅱ期；申2000）であろう。

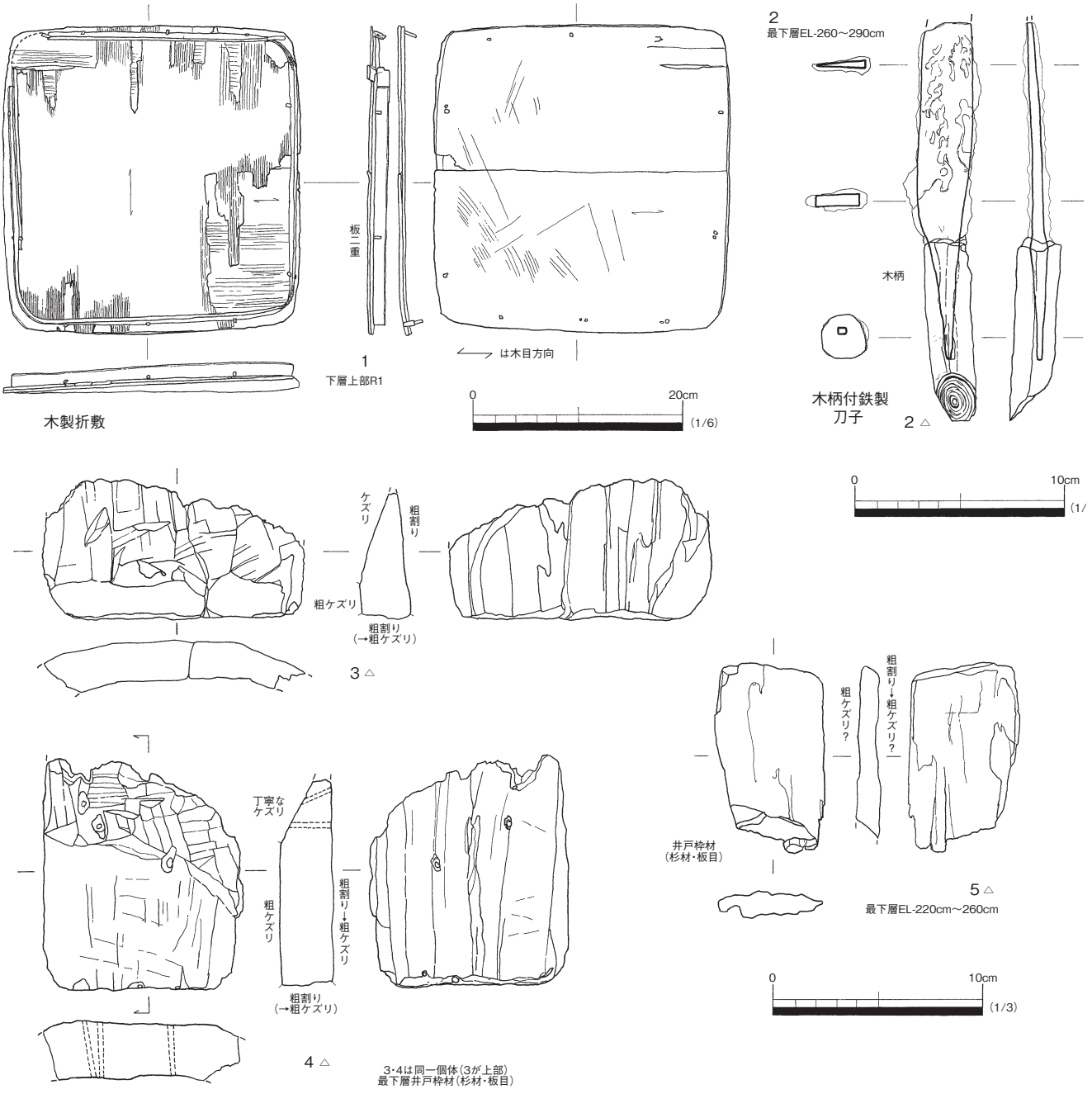


Fig.44　SE02出土木製品（・鉄製品）実測図（1/6、△1/3）

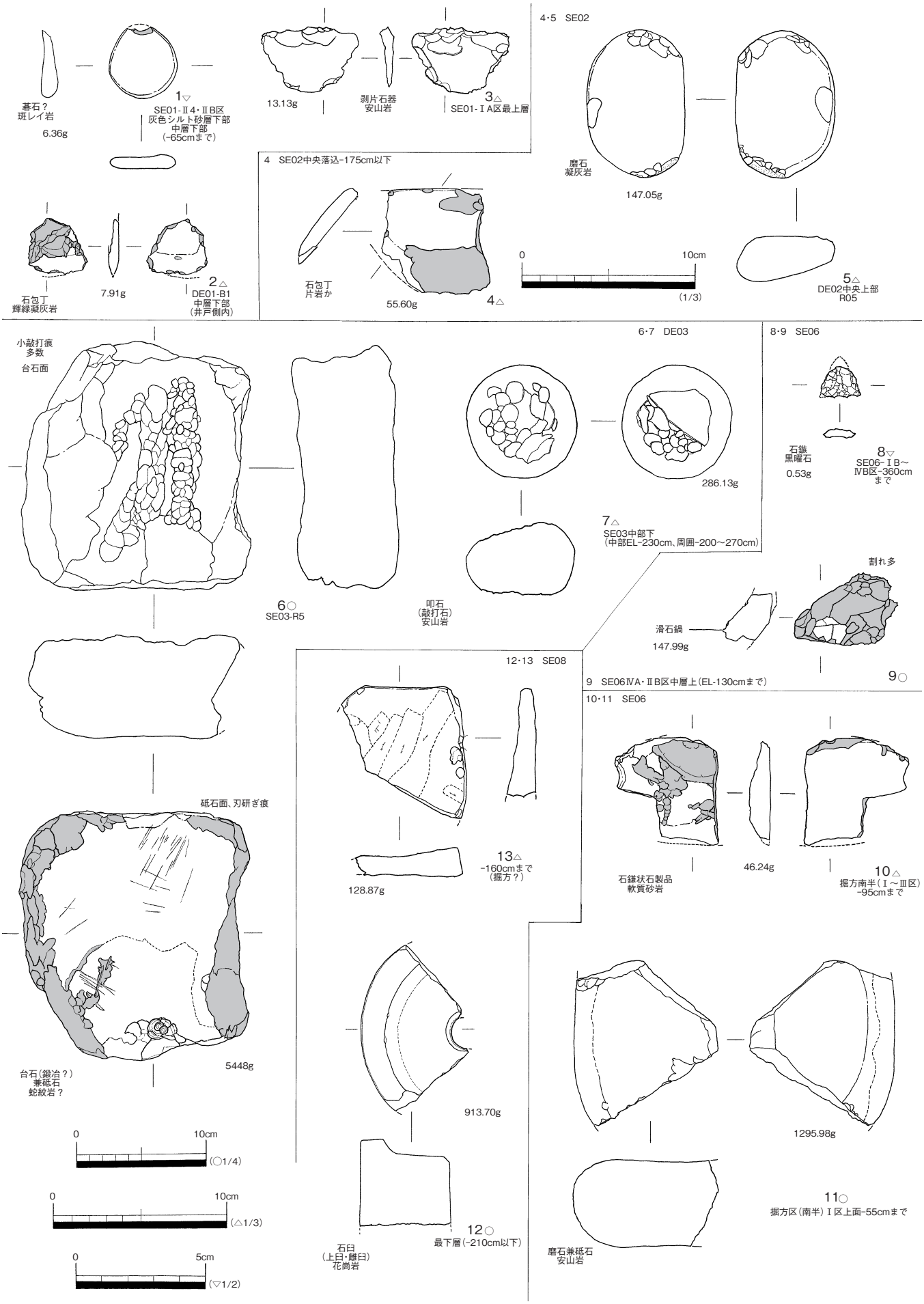


Fig.45　石製品実測図（1）（▽1/2、△1/3、○1/4）

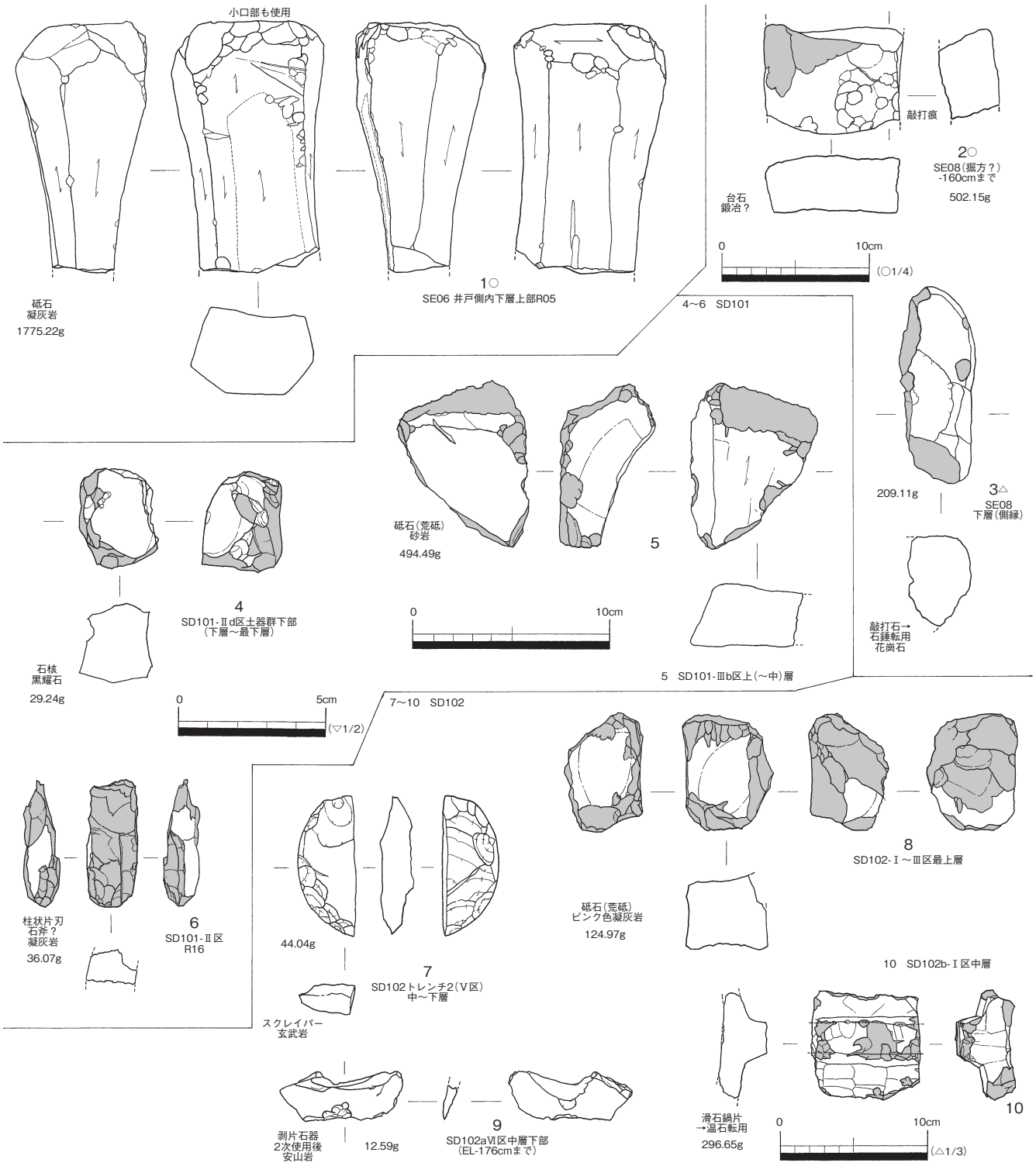


Fig.46　石製品実測図（2）（▽1/2、△1/3、○1/4）

方形周溝墓に関連か。19の備前焼擂鉢は傾きがやや不安だが、口縁部形態から備前焼Ⅳ期中頃、15世紀前半。20の須恵器大甕は頸部の斜線文から須恵器Ⅳ期（飛鳥時代前半）。21は精製器種Ｂ群だが、鼓形器台系Ｘ形小型器台の可能性がある。西新町遺跡12次に類例。Fig.43-1も同様。22の在来系甕は弥生後期後半新相～ＩＡ期。（Fig.48）耳を有さない粗製の中国陶器壺である。

（2）木製品（Fig.44）

1は「**折敷**」。薄い正方形板を木目方向を違えて二重の底とし、細板を曲物にして、衝立状の仕切りを四周の縁から少し離したところで接合している。底板の接合は細い木釘8箇所で、曲物状衝立の接合は木結で行う。精巧な作り。3～5は**刳貫井戸材**で、3,4は同一個体。粗割→粗削りの加工痕。

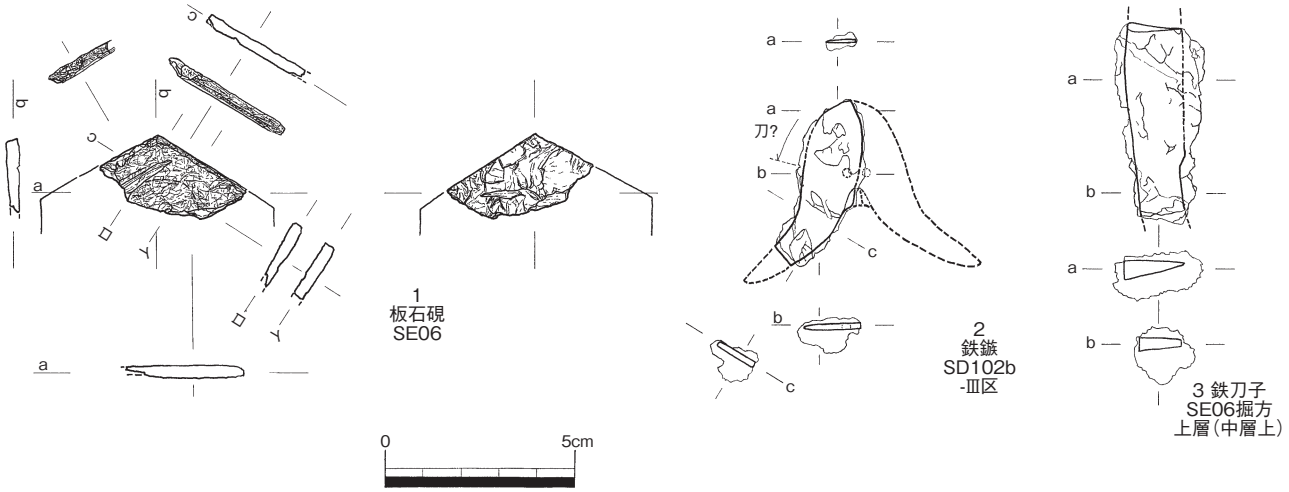
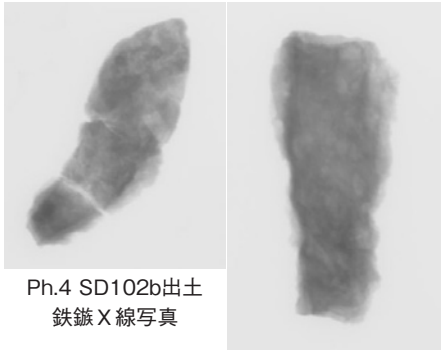


Fig.47　石製品実測図（３）＜「板石硯」＞、鉄製品実測図（２）（1/2）



Ph.4 SD102b出土
鉄鏃Ｘ線写真

Ph.5 SE06出土鉄刀子Ｘ線写真

（３）鉄製品（Fig.44-2、Fig.47-1,2、PL.4-15,16、Ph.4・5）

Fig.44-2は木柄の残る鉄製刀子（小刀）。木柄は広葉樹材だろう。Fig.47-2はやや大型の無茎平根式鉄鏃。Ｘ線写真によると根挟孔らしき部分があり双孔だろう。類例が少ない形状だが、類品が博多遺跡群147次の鉄鏃未成品にある。47-3の刀子は斜角の片関。

（４）石製品（Fig.45・46、Fig.47-1）

基本的な情報は挿図中（Fig.45・46）に注記した。この中で、**鍛冶関係石製品**があることに注目したい（Fig.45-6,7、46-1～3）。（Fig.45）6は砥石兼鍛冶用台石（PL.3-18）。片面に無数の小敲打痕がある。裏面は砥石で、全体が砥面になっている他、刃先を立てて研いだ痕跡がある。7は鍛冶用の敲打石（PL.3-17）。両面に敲打痕がある。いずれも須玖Ⅱ式古相のSE03出土。この組み合わせは、弥生中期後半での比恵・那珂での鍛冶の存在を実証する。（Fig.46）1は大型の6面砥石（PL.3-19）。最も括れた部分で破損しており、本来の全長は倍の34cm前後か。小口面は砥石兼敲打台石で、砥面で目立たないが円形敲打痕がある。中世のSE06出土だが、砥石の類例からは（博多50次、纒向遺跡）、中世というより石製敲打具を使う古墳前期以前だろう。SE06は弥生終末期の完形甕が出土していることが注意される。2は敲打痕のある小台石。中世井戸出土だが、3の敲打石を伴う古墳前期までのもの。（Fig.47）1は五角形型**板石硯**（久住2020）の一部（巻頭図版４-14）。鈍角の先端２辺は「石鋸」の施溝分割割痕がある。表面左上辺内側に試し施溝痕がある。表面中央部にかかる範囲に整形痕を切る研磨痕がある。点状に墨痕1箇所が残る。裏面は剥離成形後わずかに粗研磨。厚さ3～4㎜の精巧な作りである。（久住猛雄2020「近畿地方以東における「板石硯」の伝播と展開」『第34回考古学研究会東海例会　荒尾南遺跡を読み解く』）

（５）那珂170次出土の動物遺存体

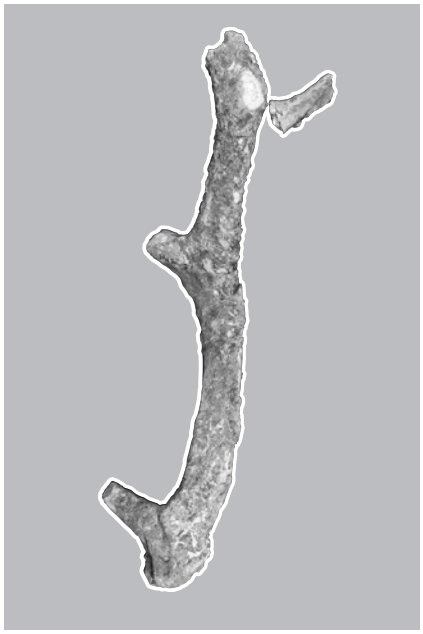
動物遺存体が出土したのは井戸3基（SE01・02・06）で担当者によるといずれも中世に属する。那珂遺跡は火砕流が堆積した低丘陵上に位置しており、酸性土壌のため動物遺存体が残りにくい立地である。遺跡に持ち込まれた動物遺存体のほとんどは消滅し、水気の多い井戸に廃棄されたものの一部が遺存したものであるが、いずれも出土遺存状態は不良で切痕などの表面観察はできなかった。出土した動物遺存体の詳細は**表4**の一覧表に記載している。

爬虫類　スッポンとヌマガメ類が出土した。50001のスッポンは背甲のみで全周縁を欠損しており、現状で13cmを測る。SE02出土のヌマガメ類（50003）は2点とも甲羅小片である。生息域からイシガメと

※いずれも遺存不良で表面観察は不可

		地区	遺構番号	大分類	小分類	部位名	左右	部分１	部分２	成長度	切痕	火熱	年代	備考
50001		Ⅰ区	SE01　R05	爬虫類	スッポン	背甲		全周縁部を欠損		不明	不明	不明	中世	現状で長さ 13㎝
50002		Ⅰ区	SE02 下層上部 R020	哺乳類	シカ	角	右	ぼぼ完形	枝角先端を欠く	成獣	不明	不明	中世	
50003	-1	Ⅰ区	SE ０２西縁、下層	爬虫類	ヌマガメ類	甲羅		不明	不明	不明	不明	不明	中世	
50003	-2	Ⅰ区	SE ０２西縁、下層	爬虫類	イシガメ	背甲		肋骨板と縁骨板の小片		不明	不明	不明	中世	隆条はない
50004		Ⅰ区	SE ０２　EL-220 ～ -260	哺乳類	シカ？	角？							中世	
50005		Ⅰ区	SE02 落込み　EL-250㎝±まで	哺乳類	イルカ・クジラ類	歯		歯根のみ		不明	不明	不明	中世	径 1.7㎝
50006		Ⅰ区	SE06 掘方　R003	哺乳類	シカ	角	左	角座から第２枝の下まで		幼獣	不明	不明	中世	角幹が細く短い自然落角
50007		Ⅰ区	SE01 井戸側落込- 250㎝以下	不明	不明	不明							中世	

表４：那珂170次出土動物遺存体一覧表



Ph.6 SE02出土50002鹿角

Ph.7 SE06出土50006鹿角

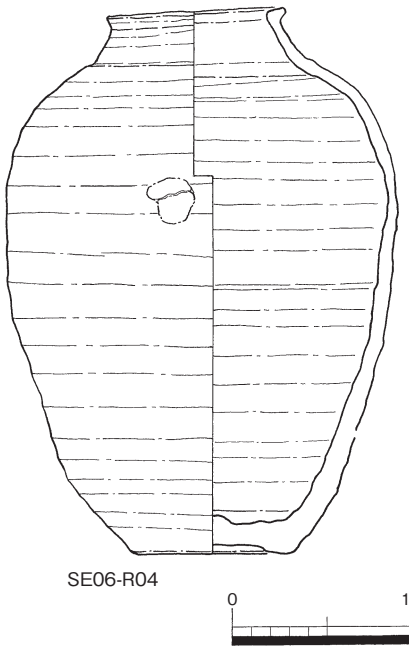


Fig.48　SE06出土遺物実測図補遺（1/4）

クサガメのどちらかである。50003-1は詳細な部位不明で種も不明、50003-2は肋骨板と縁骨板で肋骨板に隆条がないためイシガメと思われる。

哺乳類　鹿角とイルカ類の歯が出土した。鹿角はSE02とSE06から1本ずつ出土しており、50002の鹿角は右側の角、50006は左側の角でどちらも自然落角したものと思われる。50002は出土後細片化しつつあるがほぼ完形。50006は角座から第2枝の直下までで、それから上は欠損しているが、角幹が細いことから幼い個体の角と思われ、完形に近い可能性がある。現状で20㎝を測る。50005のイルカ類の歯は1点で歯根部のみの出土である。

まとめ　シカとイルカ類については中世遺跡で多く出土する動物種である。鹿角は近代になるまで骨角器の素材として多く利用され切断痕が残る破片が多く出土するが、今回の様に完形に近いものやまだ素材として利用できるものが出土することも多い。今回は井戸からの出土で廃棄時に完形であったと思われることから祭祀に使用された可能性が考えられる。　（この項、福岡市埋蔵文化財課　屋山洋）

Ⅲ．調査のまとめ

すでに紙幅が少ないので簡潔にまとめておく（巻末の「抄録」で補足する）。調査区北半のⅠ区では弥生時代中期の井戸1基と中世の井戸5基がみられた。いずれも井戸側痕跡が認められた。弥生中期の井戸は、須玖Ⅰ式新相の掘削とすれば那珂では最古である。須玖Ⅱ式古相の一括資料と鍛冶具が注目される。調査区南半のⅡ区では、SD101が南側の104次と合わせ、古墳時代初頭の方形周溝墓であることが明らかになった。周囲での同時期前後の墳墓域の展開が予想される。また井戸や溝からは明確な遺構がない各時期の遺物も多く出土し、生活痕跡の長期間の継続が判明した。

1. SE01 上面検出状況（北から）

2. SE01 南半上層下面灰色シルト層上面検出状況（南から）

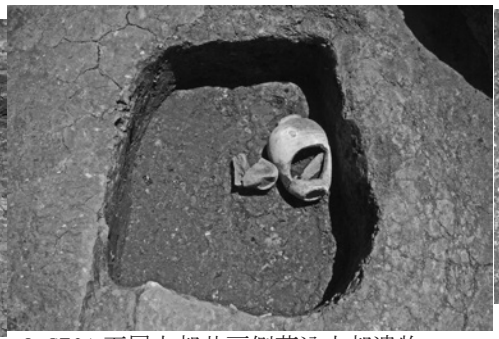
3. SE01 上層 2 回目検出状況（南から）

4. SE01 中層上部井戸側落込井戸枠痕跡検出状況（南から）

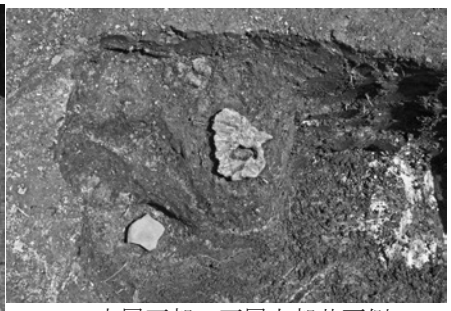
5. SE01 中層上部井戸側落込井戸枠痕跡検出状況近景（南から）

6. SE01 中層下部～下層上部井戸側落込亀甲出土状況（南から）

8. SE01 下層上部井戸側落込上部遺物出土状況（北から）

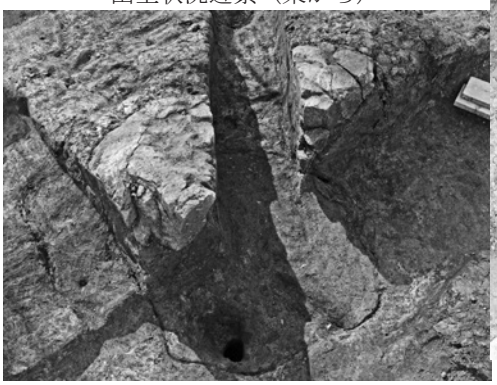


9. SE01 下層上部井戸側落込上部遺物出土状況近景（東から）



7. SE01 中層下部～下層上部井戸側落込亀甲出土状況近景（南から）

10. SE01 重機掘削下部確認状況（南西から）



11. SE02 上面検出状況（東から）

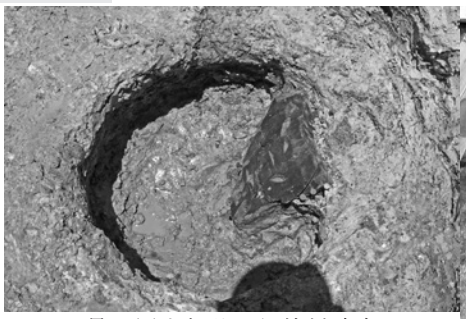
12. SE02 中央落込中層下部上板片他出土出土状況（南から）

13. SE02 中層下部下井戸枠板痕跡検出時遺物出土状況（東から）

14. SE02 下層上部井戸側落込「折敷」ほか遺物出土状況（北から）

15. SE02 下層上部下「折敷」取上げ後拡張遺物出土状況近景（南から）

ＰＬ．２



1. SE02 最下層上部井戸側枠材遺存状況（南から）

2. SE03, SX04 上面検出状況（南から）

3. SX04 西側半裁・中央ピット遺物出土状況（西から）

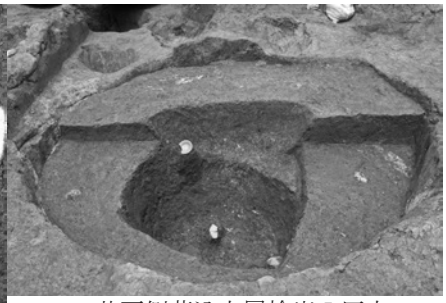
5. SE03 北西部最上層土器出土状況（南から）

6. SE03 西側上層遺物出土状況近景（西から）

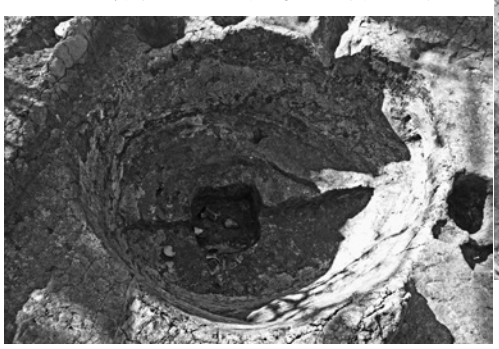
4. SX04 完掘・下層遺物出土状況近景（西から）

7. SE03 下層掘削遺物出土状況（東から）

8. SE03 下層遺物出土状況（西から）



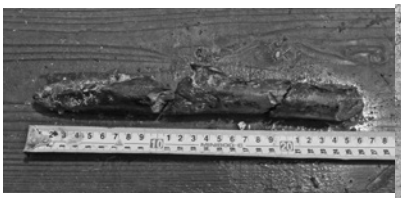
9. SE06 井戸側落込上層検出Ⅰ区上面 -95cm 掘削状況（北から）



11. SE06 下層上部遺物出土状況（南から）

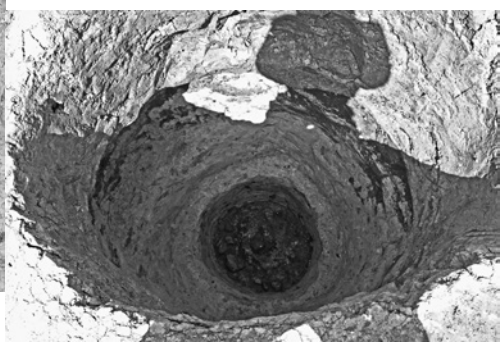
12. SE06 下層中部掘方遺物出土状況（西から）

10. SE06 中層上部掘方内鹿角・漆器出土状況近景（南から）



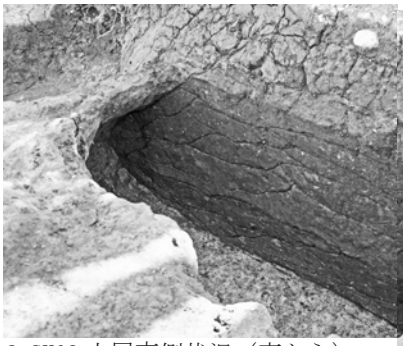
13. SE06 最下層 EL-430cm 前後出土横木状木杭

14. SE08 井戸側落込 EL-215cm まで掘削状況（西から）



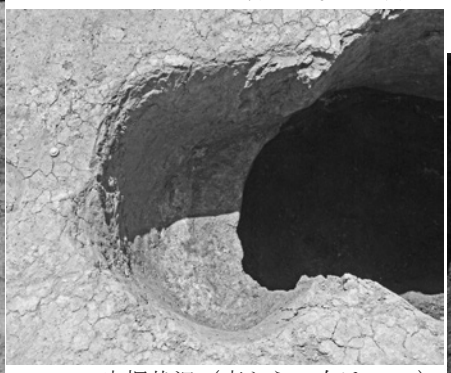
15. SE08 最下層礫群検出状況（西から）

1. SK05 完掘状況（東から）


2. SK09 土層南側状況（東から）

3. SK09 土層南側状況（東から）

4. Ⅰ区 SP022 遺物出土状況（南から）


5. SK027 完掘状況（東から；右は SE08）

6. SX103 掘削状況（東から）

7. SX104 検出・上部遺構掘削状況（南から）

8. SX104 完掘状況（東から）

9. SD102- Ⅰ区北側遺構掘削状況（南から）

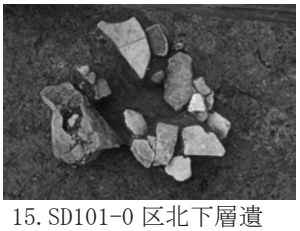
10. SD101 遺構検出状況（東から）

11. SD101-0 区～Ⅲa 区掘削状況・遺物出土状況（北から）

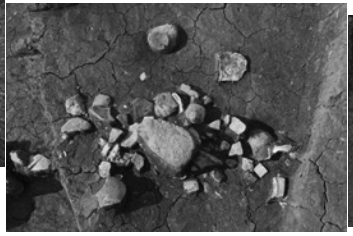
12. SD101-0・Ⅰ区遺物出土状況（北西から）

13. SD101- Ⅰ区下層遺物出土状況断面近景（北から）

14. SD101- Ⅰ区土器群下部下出土状況近景（北から）


15. SD101-0 区北下層遺物出土状況（南から）

16. SD101- Ⅱc～Ⅲa 区ベルト外し後遺物出土状況（南西から）


17. SD101- Ⅱd 区遺物出土状況（南から）

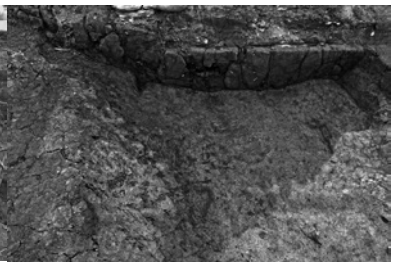
18. SD101- Ⅲb・Ⅳ区遺物出土状況（南から）

19. SD101- Ⅲa 区遺物出土状況（南から）

PL. 4

1. SD101- Ⅱ～Ⅳ区遺物出土状況（南から）

2. SD101-0 ～ Ⅰ区完掘状況（北西から）



3. SD101- Ⅱ～Ⅳ区完掘状況（北東から）

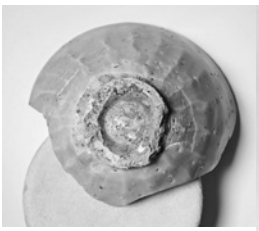
4. SD101- Ⅲb～Ⅳ区完掘、底面凹凸状況（東から）

6. SD102- Ⅳ～Ⅵ区掘削状況（北東から）

8. SD102b 一Ⅳ～Ⅵ区掘削状況（東から）

5. SD102- Ⅰ区（中層上部まで）・Ⅱ区（完掘）掘削状況（東から）

7. SD102- Ⅵ区中層まで（EL-175cm）掘削状況（西から）



9. 29-1

12. 32-18

13. 38-18

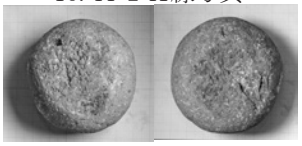
11. 30-13

10. 30-1

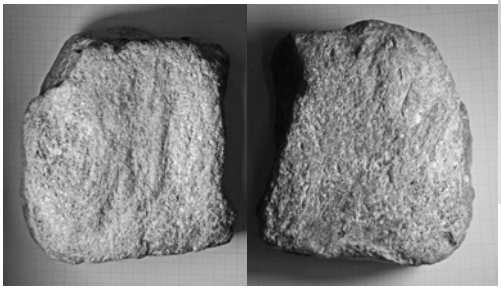
14. 48（対向する正面）

15. 44-2

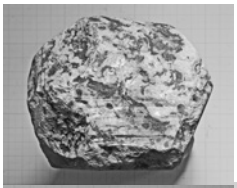
16. 44-2 X線写真



17. 45-7



18. 45-6



19. 46-1 上面

20. 46-1

報告書抄録

ふりがな	なか80－なかいせきぐんだい170じちょうさのほうこく－
書　　名	那珂80
副　書　名	－那珂遺跡群第170次調査の報告－
巻　　次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	1391
編著者名	久住猛雄
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621　福岡市中央区天神１丁目8-1　電話番号　092-711-4667
発行年月日	西暦2020年3月25日

遺跡名ふりがな	なかいせきぐんだい170じちょうさ
遺跡名	那珂遺跡群第170次調査
所在地ふりがな	ふくおかしはかたくなか3ちょうめ10ばん1ごうなかしょうがっこうちない
遺跡所在地	福岡市博多区那珂３丁目10番1号那珂小学校地内
市町村コード	40132
遺跡番号	0085
北緯	33度34分14秒（世界測地系）
東経	130度26分19秒（世界測地系）
調査期間	2017.4.25～2017.6.22
調査面積（㎡）	262㎡
調査原因	留守家庭子ども会施設改築建設工事

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落、墓地	弥生時代、古墳時代、飛鳥時代、奈良時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代～戦国時代	井戸6基、溝状遺構2条（中世城館壕状大溝1、方形周溝墓周溝1）、貯蔵穴2基、土坑7基（うち1基は「大柱」遺構の可能性）、円形竪穴住居痕跡2棟、掘立柱建物痕跡、柱穴	弥生土器（早期、前期、中期、後期、終末期）、土師器（古式土師器、古墳時代後期、飛鳥時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代、戦国時代）、須恵器（古墳時代後期、飛鳥時代、奈良時代、平安時代、鎌倉時代）、瓦器（平安時代、鎌倉時代）、陶質土器（古墳時代前期）、輸入陶磁器（平安時代、鎌倉時代、室町時代、戦国時代）、瓦質土器（室町時代、戦国時代）、国産陶器（室町時代）、瓦（初期瓦＝飛鳥時代）、弥生時代早期～中期の打製石器（石核、剥片石器、石鏃、スクレイパー）、弥生時代～古墳時代前期の磨製石器（石包丁、石斧、砥石、鍛冶用台石、鍛冶用石製敲打具、板石硯）、古墳時代～中世の石製品（滑石製鍋、石鍋転用温石、石錘、砥石、磨石、台石、石臼など）、鉄器（鉄製小刀・刀子、鉄鏃、鉄釘など）、木製品・漆器（折敷、漆器椀、井戸枠材、板状製品破片）、動物遺存体（亀甲、鹿角など）	・Ⅰ区（北半調査区）井戸6基を検出。SE03のみ弥生時代中期。他は中世。弥生時代の井戸も含めて、全ての井戸に井戸側痕跡が認められ、また比較的深い井戸であった。 ・弥生中期の井戸SE03は、須玖Ⅰ式新相に掘削、その後再掘削（井戸側の再構築か）が須玖Ⅱ式古相にあり、廃棄時も須玖Ⅱ式古相の一括土器と石製鍛冶具を伴っている。埋没後に上層に掘削されたSK04は、須玖Ⅱ式古相の「大柱」遺構の可能性がある。 ・Ⅰ区には弥生時代前期前半の貯蔵穴が2基あり（SK05、SK09）、SK05は板付Ⅰ式の一括資料を伴う。 ・Ⅰ区南東からⅡ区北東にかけて、推定弥生中期の円形竪穴住居痕跡が2棟分認められた。 ・Ⅱ区は中世後半（15～16世紀）の城館の壕の一部の可能性がある大溝（SD102）と、南側の那珂104次の遺構に連続する古墳時代前期の方形周溝墓周溝（SD101）が検出された。 ・方形周溝墓SD101は、古墳時代初頭に営まれ、周溝から古墳初頭～前期中頃までの供献土器群が出土した。古墳前期中頃に周溝外縁部が再掘削された可能性がある。 ・方形周溝墓の推定規模は、周溝内側下端間で推定約16.8mである。 ・大溝SD102は完掘できていない。当初の大溝（SD102a）と、埋没後に片側外縁に再掘削された小溝（SD102b）に分かれる。 ・那珂170次調査では、明確な遺構が無かった時期の遺物も多く出土し、削平で失われた各時期の連綿と続く遺構の存在が推定される。

那　珂　80

―那珂遺跡群第170次調査の報告―
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1391集

2020年3月25日

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神１丁目８－１

印刷　福岡市博多区吉塚８丁目７－30
株式会社 宣巧社